# 丁丑雜記

二

昭和十二年一月起筆

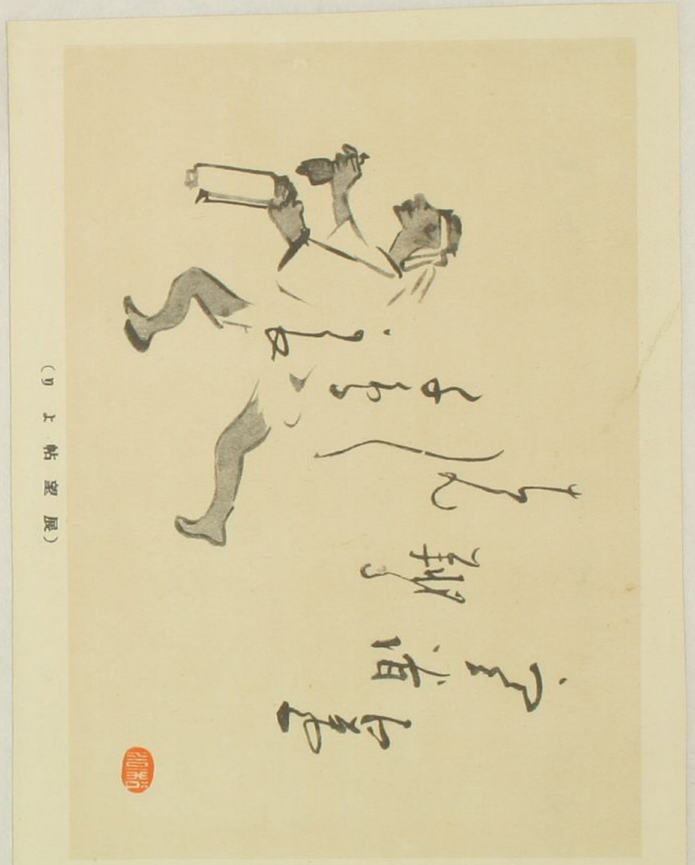
特別
14
1919
483

176748

# 丁丑雜記

昭和十二年二月上院起筆

○松浦北海の五十年祭を信者達が遺族らと相待
を受けたが、偶〻吉田黄雄氏から寄稿を頼ま
れ、何とかしなくべきものとあまり無いもの
つとして、北海の事蹟の思ひつき、記憶を辿つて、北
海の逸事を思いて責を塞いだ、家義の河鍋
暁斎が北海と寄せた俳文七枚の模写と共の全
文を掲げて世に公開のものとした。北の業作が終つて石
川啄の回想録から、谷村一太郎の追悼文を
三月の忌辰までに書てしまつて仕事を未だから



(富士 横浜)

38- 9269

永々業績をあげたのである。これが北三の河の組合の行事である、戦争の文は其の刊行を待つて此の冊に収めることを約す。

○昨夜（六日）紅葉館に睦会を開き松平侯、高田井上、増田、吧月、碁と今年に席上、自然の時局談加話題となった。何人も政局の行末いかうなるかと真剣なることが充満せる中会に出でたことくであつた。陸軍の強庵に小壮将校の跳梁の弱を押くることの加無いのが遺憾であるが、気に入らぬ病患あるが、気に入らぬ病患を伝聞せる其の病を押さくれこうれた。宇垣を弱とその陸軍のボイコットは確乎国民の思想と誘時し、気に入らぬ宇垣を

複原製

迎も強硬な新念あらせれることを強慢を抱くこういが実八優況で陸軍を屈する道もあつたのだが内府は正直一方の人で、斯ることを恐れ入ることを奏治こと長が無つたとこるが、実の斯ることを知ることを陸軍部内を宇垣の友人を宇垣として其の危険を避けしめたとこるのが、宇垣の大命を辞した所以であると云はれてある。次に大命を拝した林大将は純真到直の人とのやくが政治手腕の一面とをうてい物足りぬ感問で、組閣のうつたやうなるも、蓋宜が四五も長つて、半端の組閣であり、初めから政党を拒排した無接であるから、陸軍の意向を実行したこうであり、林大将が迎へんとした陸相も

陸軍は怪人で、中村を迎へることが止むを得ないハメとなつたが、陸軍の座右で、中村陸相を恐々陸軍側のロボットであるかもしれんと思ふ。陸軍が我意を逞しゅうするロボットで無ければ入閣もしめることも分つた話である。政府の個人の資格で永井（民政）中村（政友）を入閣せしめんとしたが、夏人は離党の真平と拒絶したのも尤の次第である。外相も擬したが南条大使も辞退した。此の内閣の運命は初めから短命いと評判されて心ある人は入閣を欲しないのも無理はない。平沢枢府議長が非大特赦を先にして大命を拝したのも実は利巧の所決である。政府は成るべく解散を避ける方針だと云ふが、陸海の海軍の通過を待つまでは安定の事であ

政党の憤怒を醸した政府は果して解散をまれに押切り得るであらうか。陸軍は出きるだけ解散を免れるやうにとのことであるが、実は理解し難いことである。政府の考へ方は何を理由として解散を行はんとするか、或は陸軍の為に兼ねて決意の修正をなすべき解散を行ふかもしれないが、解散を行ふと政府を味方する議会が多数当選するとは思はれない。恰度政党の一部分が地盤の一部を奪はれたと同じことを期してみることは出来ないであらう。年来いろいろ動かすべからざる程々の関係にあり乍ら、偶然選挙の結果の為に意を多数を制し政府を辛苦させることは、実に驚かし得ることである。到底

陸軍の横暴が政府の累をなしてゐる事を民心が思
意いが換すべきい人を時るがいきの如き時勢である。
或り色々政府党を組織する様なあるが政
党は決して一夜作りで出来るものでない陸軍と異
り恐らく知つてゐるであらう。
現下政府の困難なるのは、総選挙の修正を若干の停会を議会
を命じたが更に一週間の停会を要求し修正が出来ない併
停会を命ずると総選挙審議の日が迫るの為めに
出来面倒なるハメを陥つて、四苦八苦しもがつらいが政党
の為選挙をしても総選挙を不成立とさせらるる生じたらう
から、総選挙審議はるの足らざることの政府の大難で
ある。政府の真意を総選挙審議未了の故を以つて議会

を解散することを敢てする深き
行くまい。
以上は政府上述ひる所しことであるが今の所を見ること左の如

# 政局解散に頭

# 此の上停會せば——

## 豫算審議未了の危機

## 政府重大難局に直面

十二年度豫算案並に税制改革案の修正案は来る十二日の停會明けまでに議會に提出する事は技術的に到底不可能の状態となり政府は更に一週間乃至十日間の議會停會を奏請せざるを得たくなるのではないかと觀られる若し再停會を奏請する場合は豫算の審議が遅れ會期延長の止むなきに至るとしても議會の豫算審議決定は毎年三月三十一日を以て終了する會計年度内であり豫算の審議が三十一日を越えて四月に持越す場合は當然審議未了の爲め豫算不成立となるのでその場合は財法第二十一條に依つて政府は前年度豫算案を施行する事となる譯である從つて十二年度豫算案を成立せしめる爲めには何んとしても三月末までに審議決定終了せねばならぬが今假りに再停會を奏請せず来る十二日議會が再開されるものとしても三月三十一日までには餘すところ四十八日間に過ぎない、然るに法律上許された**豫算の審議期間は二十一日間で貴衆両院を合すれば四十二日を要し**更に本會議上程の日子を貴衆両院合々一日と見積つて既に合計四十四日間といふ日子を要する譯で前記四十八日

## く他

間から四十四日間を差引けば殘るところは僅かに四日間だ即ち政府は假令再停會を奏請するとしてもその期間は最大限度四日を越える事を得ない譯で先づこれ以上の停會を奏請する時は豫算案の審議未了を來す惧れあるものと觀なければなるまい從つて大藏當局の事務的能力が僅か四日間の再停會では到底修正案の決定不可能といふ事になれば

**茲に十二年度豫算は純事務的に見て成立不可能と見られ政府は極めて重大なる難關に逢着するに至つた**

譯であるこの場合政府として十二年度豫算の審議未了を避けんが爲めの方途として

**一、議會を解散して實行豫算を編成するか**

**二、或は貴衆兩院の可及的圓滑なる審議を期待し豫算審議期間を出來る丈け短縮する**

の二途を出ない譯である後者は依然議會に於て容易に政府の思ひ通りに行くか否か疑問で政府は議會を解散するか又は審議未了を覺悟の上再停會を奏請するかのヂレンマに陷るのみとなりその何れの場合にしても豫算審議に對する政黨の出様は非常に注目されて居る

○仰望する所多い新しく出来た日蓮宗の神殿の焼け跡に変化した事は実に仏教界の災厄の切り抜けを祝の冊子を揭げた。そこに乙竇寺と称する一大史蹟が今から千二百年前聖武帝が行基を命じて建立された比叡山延暦寺に来歴を有し、大日堂にある豆の三尊仏は国宝であり、建造物も保護建造物である。仏保護の一

榛原製

体を機出することが出来ず日蓮宗の神殿の焼け跡に変化した事は実に仏教界の災厄と除厄の神祠である。神社の往年炎上した後復興したといふ美しい旧物がいくつもあるが、いずれも乙竇寺の御願の地又は幸いに無事であつたのだ。今北麓を巡へて小村をうろうろ参詣者あるも乙村の御願の北の寺のある者の乙村の幼時に比べ参拝者が、自分の幼時に比べ参拝者が、歩数と記憶の多い所であつたのだ、東京に住して幾十年も訪ねず、三四年前岩形郡の関西修学旅行の帰路久方振りに地元を過ぎ立寄つて参拝した時、何かあつたが今思へば美が最後であつた。国宝の取扱ひ、何か制法があつても、荒廃を欠

く如ひが多、殊に僻地に住める四寒や佛蘭西を指す。為す
る取締の疎慢に流れと行届かぬうらみがあるから、今後は
一層厳密の取締を望まいと思ふ。（二月八日
記）

○昨夕自分はルイス、トレンカーの「雪山生活者」を読む。本は
由つも翻訳したもの。自分は性来冒険談を読むことが
好で、往々登山者の紀行を見て興味を感じる。北方
の著者はアルペンの名高い人で、始めはアルペンのガイド
として経験を積み、世界の大冒険家、映画界の
人となつた。北極の探検隊に参加して冒険をやり、映
画界の為め撮影し、又映画のため登山を登攀
して其の実景を撮影し、自から映画に出演した。

榛原製

登山人物とする。雪山や火の山などの映画のお陰の
第物男である。どんなどの教育があるかは知れないが、
其の経歴を書いた本書は一読に値する。其の深い心人の
胸のうち、実験をおいてみるべき実験を自身が文をな
しとゐるから、これを読んでも動心駭魄で、掌に汗を握る
ことがある。自分はつくづく思ふに、よくも北人のやうな冒険
を企てし、よくも作んずれば遂命のけんれんとがあるものだと
感ずる。殊に雪の山をたゞ一カイドとして跋渉し、苦つて
を誤まらぬことの無いのは、実に不思議と云へきだ。我
国でも登山の本録ひあるあり、熟練
び難を免れもしよう。敢行の勝力と勇気があつても無事の
期し難いこともあるのは、そもそも天体を測ることの

かべき北北極の探検をこゝろざす人は苦艱がそゝうたゝるを
知れども、或る時乗船が流氷の間さんと脱出の出来な
くなる時をいう結局氣流の境地を立つたから、彼れを取つたい
登山と深窮と遇つた時や、一方の山のチムニーから他のチムニー
へジャンプを試みたりもつたかつたであらうとも思はん
る。彼の生涯は冒険の連続であつた、彼の之れを以つて快楽
とし之れを以つて面白い運命とし此世間は冒険を趣味と
する人は色いくらもあるが冒険多方面の冒険の実験者と
して此程の人は稀であつても覚こうの。想像で書いた冒険
譚は少くもあれども之れを信ずる実地の冒険譚は恐らく北
書が冠冕であらう。明後の紙幅が盛況を添へし事

北書原名 Brothers of the Snow

榛原製

○冊表原本は「桂逸」の四字山形の横長の改装を施さん
れ、之の巻の通ずる友故中こと嘗元一と云ふが著屋に松
嶋の印がある。北の松嶋とこゝの西城老人の婿子で西を松
逸と云ふ。花島は親しく書いれたこゝが三十年位
で父と共に死んだと云ふ、俗称は和木平と云ひ、自分の祖
鈴木順之と云ふ醫は其弟を当日と云ふことを始めて
聞いた北巷い桂逸が松嶋の手本をとき出でくれたらし
いが、こゝに一月の新宮寺に西城老人の落款がある、各国の
一隅に桂逸の印がある、春屋氏は「落款」の落款が
ないが、桂逸が古字と云ふの桂逸と云ふ、冊表は桂逸と
附かず、今まで友故の中に垂棄してあつたこゝの
○乙の大日堂交上は之等仏像の奉けも情を所びたるが

蔵 吳氏 吉

冊美の語る所を按ずに三條の作家は近年文部の図案部が数千円を分けて寧楽修繕し処物句を処の災を罹へりと云ふ、乙護寺は往年焼け跡まで再建せず僅に庫裏を存ずと云ふ、今乙護寺災と云ふのは誤りにて大日堂は四しし焼のまゝにて、乙護寺は別物にて大日堂の乙護寺の英語を属するものと云へり、

○青竜寺秋郎の詩情を持ち来る、二三の壁を掲げて歌しに、北人長柄の子にて長三洲の弟にあり、三洲の詩を能くし志を立てかつて死に処の作なしあべき北人自分は北人を長ぶるとも、いつまや詩集を編後しなどとかなるべの詩なる趣香が見つれの酒家にあり

榛原製

此を又くる、左の詩は書書の作者の弟なる三洲に酬ゆしたるものなる、末句の雅心を溢れたるなり。

長慶寺秋郎 長祝帽度驛已十二載煖 (一笑)
衾裁応要、何心印後句伝郷 秋村居士印

○前掲冊美氏話次印の如く嵯峨に隠れ居る内子と称する内子の言ふる赤嶋氏の赤嶋氏は内子と称する木順丈と見者と云ふ、若へ知る人なるいが、鈴云ふものなる、内子が冊氏は世くれと云ふ、話す様なると赤嶋は勤向一人にて長く家を離れ、島南市に住をかく事しなるを送つたと云ふ、何故の島南か赤嶋しく分らぬが赤嶋の父西城老人の京都なる豪

奉を極め、四季を通じて高く千尋の霧を高く上ほさせれば
と云ふ歌も傳へられて居り、玉の井と云ふ歌枕と共に
して伯耆の暗夫人を偲ひまつり、その後に生れた
が鈴木順丈で、順丈は本姓の異母兄弟である、
角人の玉の井の逸話も本姓が勤南と云ふ人のものであら
う。夫婦の流離の為であらうも知れ
ない。島の母も此の玉井巷の幼の時或る時の
逸話と共に教さん人としたことがある、僅に忠僕
が隠匿したので助かつたと云ふ逸話も島が母から
聞いたものである。而して夫人調子を失つて其夫の
ちうそうおとのも異説伝さそれも婦人として私の家から其夫
を迎へ夫婦になつたものが自分の母であることをこゝに附記

昭和十二年二月九日記

鈴木順丈が彩色に腐心を尽した人は浜良谷の彩色板
に英の字を習つてゐた人で、玉むく陰木の家を訪ふ
たことがある。其時鈴木の家を訪ふた。
鈴木の子も彩色板をみたと思ふが、恵少
年で彩色の家のある名であつたと思ふ。白順
丈は古柳と称し、漢詩稿が一冊余の家に残つて
ある。此人は晩年冊共家に移つてそこに没した。此人
の詩稿を見ると奇門郭軒を師として江戸に出られたらしく、郭
軒が彩色を去つて江戸に行つてから、郭軒の後を訪ねてゐる
古柳の傳さ男であつたらしい。或は冊の玉の井の相続
人であつたかもしれぬ。

○織田萬（法名博士）氏の作品は、大隈家と関係のあるので、早稲田大学の法学部に数幅を献ぜられ、自分も愛玩してゐる。あつた。京都大学に氏が移つてから二十数年、夢にも想ふ事も出来ずに、氏の作品を得ようとは。先づ某氏院時の家に妙時博士から注意せんと、織田に会つて、いろいろ入閣を叙した。彼の齢を聞くに七十余りとのこと。されど若とは久しく遇はぬ。その隠棲は、人に接しないとのこと。北人も含む風格を兼ねたるとこそ、小説の中の人物。

田家の雪　鶴陰　織田萬

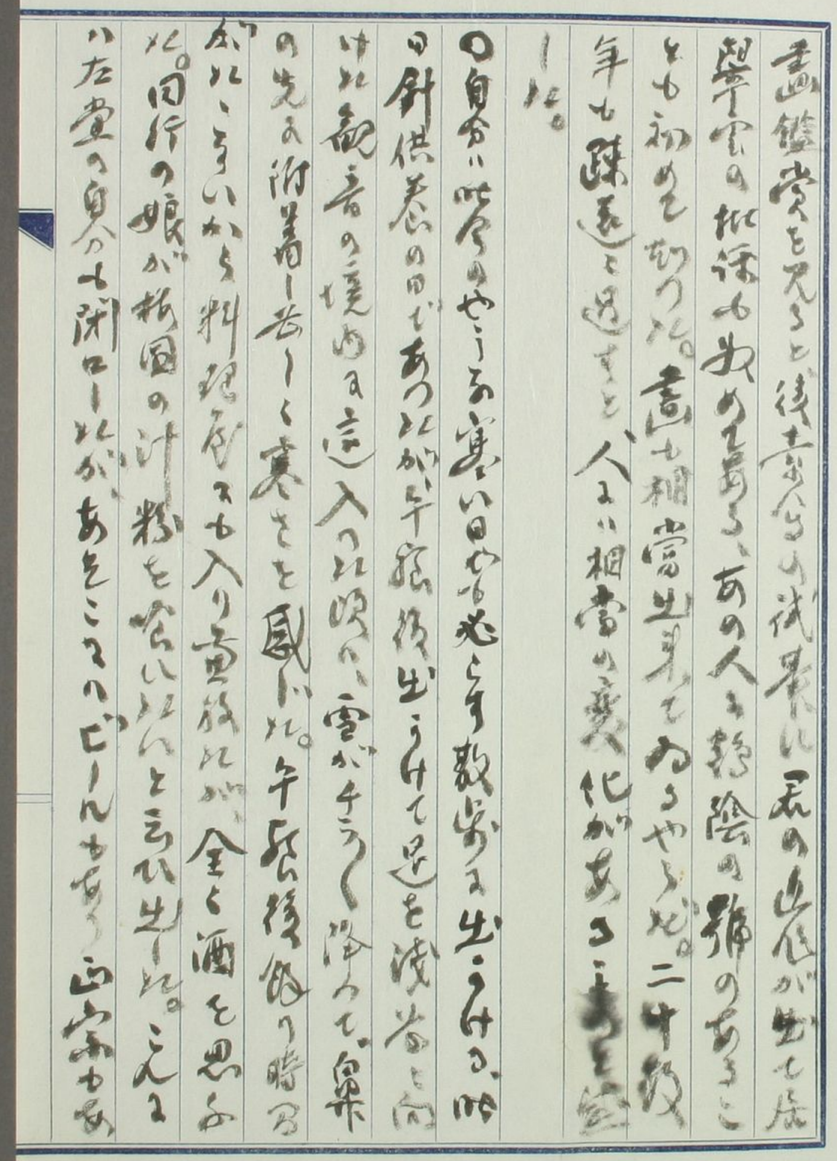
**織田萬氏（鶴陰）・田家の雪**

雪景といへば、多くは天地寂寞の境地をしめすもので、さういふ氣分を現すには、境静かに筆勢なるを要するものであるが、此の畫はさういふ條件によく塡まつてゐるやうに思ふ。遠景を寫すにも筆が簡潔で、杏かに距離を示してゐる。作者の狙つてゐる境地は、竹田などの畫境に彷彿たるものがある。

原製

畫鑑賞を見ると、後素人の筆、あの人も鶴陰の弟のあることも初めて知つた。畫も相當出来てゐるやうだ。二十数年も蹉跎（過ぎ）すると、人は相當の変化があるものだ。

○自分は昨年のやうな寒い日でも必ず数度出かける。此の所供養の日であつたが午後出かけて足を浅草と向けた。観音の境内を通り、雪がちらつく降つて来た。その先の衍義しく寒さと風だ。午後後の時分、ふいとういから料理屋へ入り酒を思ふ。全く酒を思ふ。田舎の娘が板前の汁粉を食いたいと言い出した。えゝ、ハ左様の事の七閉口ばかりあるこゝろ。山家も



るとまあかうまんまるくだとうあて汁粉椀を入れた。甘い祖酒
はあるが、下物の一つもない。何でもかんでも甘いものばかりである。
酒方なく雑煮を命じて、其中の粒餅や貝柱などを拾つて下物を充て一合の酒を飲んで陶然とした。腹も
すかず酒も身分の好びなく傍不ハ者も不良。南の窓だけが光る
九角寒を凌ぎ得た。あんな場合の人を抱く心持ハかうと娘を向うを一笑した。
四月分の東京文学。外山正一翁と心理学を教ハつた時分
しペンターの著が教科書で、あ奥と覚えこまされる。
テーブル、タルニングを試みたのも其時で、世を吹怪るといふ
表体心理の応用であると知れ。井上円了が後日妖怪学を始めた
のも実は心理学の変変を為ハのである。自分などが教ハ

つた後五十年、内外の研究家を由つて表体心理の不可思議の
現象を説明ハ悪く解を得ても来たせうれが、極端な不思議の現
象ニ対しては、学者が解を異くら私ハ時代もあり、諸説紛々
学の説が一定しないうちは事実ハ事実として、何ぞうも意味ある心の作
用を帰するあれ、実験とハ複雑の絡みがあつて、其方面か
ら学説を異端ハ邪論とニラマレもしかから、心理の研
究ハ学者も絶分の苦人ハ相者ハ医学的研究が
既を実際の確証が挙つてくるので、先年心理学者が解を残
したことも今ハ闇夜を得て暗ハ人を至つた。
人間の頭脳の働きハ霊のようで、例へハ未ハ繋ぎ盤のようあか塗落す
る女時間しんの元を想ひ浮かべ、夫が表あ春族ハ困ることを想ひ悲
嘆哀を感ずるが、えんが一秒間の心の間きで電気の一閃と同様で

ことを想ひ出す。此行為も迅速のようである。或る傷んだ病人は一瞬を
して世界の興亡をまざまざと脳裏に描くことがある。夢幻の心理は
自から流れて行く作用があって、同時に過去の思想の起こるように、又
自から考へることの是非をも思ふ。亦美醜を意識することも
また美の心理の変態で、誰でも美に感ずるように、変態となる
ると、意識が分裂して、美が各々独立の働きをする。二重人格など
云ふのは美が一人が同時に全く違つた事を考へ、且つ自から美を意
識することがある。夢幻現象でも全く本人の意識
なる現象で、夜中床を脱出して或は行動をし、或は
危険な登山をやつたりまたやうなこともあるが、甚しきは
徘徊行くも多くの金を引出して、美を持つて他郷へ走り数
月をこの生活して、美を意識しないなどの実例がある。

榛原製

考へから斯ることを天狗に浚いんだとか神隠しの過つたとか言ふのだが、えんえんと夢幻の現象である。
また文人などが夢の歌や詩を得たと云ふ事実がある。支
那には夢中の詩で傑作が多くあるが中でも夢
の托鉢の心あるかも知れないが、これも夢幻現象で事実
あるべきことだ。人間が眠つても脊髄神経は眠らないで
其の働きから生ずると心理学者が説いたことである。分裂
意識は精神と働き為すもの、その現象として無意識な
種々のものを生じ書きまくることがある。美人の平生知りもせぬ
もないような詩を書いたり、外国語を書いたり、過去のことを
書いたりすることがあつて、往々人を驚かすこ
とがある。本人は何も意識しないで書くこれ

外国語や詩や過去の経歴などがそこに現れてくるなどと心理学者は説くことがあるが、迷信時代の不思議と思はれる事柄が書くこともあるのだ、迷信時代の不思議と思はれるのも無理はない。

分裂意識が独立して働く事現象が、往々憑霊と信ずる或は神が乗り移つたと信ずることも無理はない。其の言ふ所行ふ所が往々宗教的であつたりする事からして、この傾向を利用して自分を神の代理者の如く振舞ふものもある。大本教などもこれが分裂意識が長く続いて変生格を得たものである。人が、ある場合に変生格の人となることもある。仏教のジヤン、ダークの如き女は英雄的行動で人を宗教的にしたあんなものもこの例である。

標原製

ることもあるであらう。あの世も自分の意念のことを想ひ出して全く通力を失つたとかなんとかいふことを聞くことがある。所謂霊媒を或は変態心理の人ともいふべきか、利を服して から其後の事を異変した人ともいふべきか、或は其人を化したのかもしれない。北茅は既往に於て心理的験術を経ないから今後解釋がつくであらう。

世の迷霊などと言ふものは抵抗力が幻覚や錯覚から来ることが往々自分自身が夢遊的に行動して、それを迷霊と思ふことがある。恐怖心が起ると狼狽して陰鬱するやうな実例もある。行覚もいろいろあつて行脚とかいふ事を罵る者が少くない。意識代りの馬鹿者とかいふのとあべこべに言ふ者が少くない。

分裂意識から生ずるいろいろのことを夢みるように心理
学者は今分裂意識と解してゐる。
人の色々の習癖がありて美が病的で自ら美と知つても制
止らんとしても制止の出来ないことがある、例へば心ある天井
の板の節を数へたくなる、書物の行数や字数を数へたくなる感
情の紙幅が気になる人もあるもある癖でナポレオン一世は市
街を歩く時も各戸の家を数へる癖があつたといふ
尚士の市街を歩く時も歩く癖
があつたとか心理学者は之を解して実想意識の
侵入し来る強迫観念が止むを止まれぬ心の衝動
となるとある。神経衰弱者がある事柄をいとく

横原製

異常に注意の窓が開いてゐると自分が気がかりで
怖しくなる、その異常心を怖れぬことが出来ず、自分を恐れ
心不安も亦強迫観念の一例であらう。
誇大忘想とは誇大の虚偽の観念で実際の分裂意識
の作用で、此の分裂意識が独立して発展を遂げると
抜き難い強列のものとなる、松平定信公の豊原
将軍も此の実例で、後人のいとまもなく将軍を任じ
て一年ばかり百姓の長が集まると信じてゐる、美と豪
傑を以て任じ、自ら豪傑を称し、自ら豪傑を称し
豪傑を養成する為めにつとめる、こんな甚だしい矛盾で
あるが、誇大妄想は確乎として抜くことの出来ないも
のである、度々繰り返すものがあるのだ

文人墨客が常に自分自身の頭の下のうやうや文や詩を作つて行くが出来ずまごまごすることがあるのは、こんなをインスピレーションの作用とかいつてゐるが、俗語(世間)などは我々をこんを狐が憑くと云ふ。まづ狐が憑かれたのだから(うまく書けること)を我々は知らない。これなども表識(人智)出来ることが出来ない。

自動手記の例で筆者の表識する所である。マニヤなども心理作用を大きな働きをなすものは勿論であるが憑心霊を信ずるも、それが其の間接マニヤ作用である。メスメリヅムも亦自殺で敢て繋説を要しない。

○真理の手近にあることはよく言はれる。不一の思議を見へてゐることも、あまり卑近の事である理窟がある。日光を流れる大谷川の勾配が急であるので激流であるが、その河中に大

複原製

きな大巨石があるとすると上流の潮はるのは確かに事実で、激流は石を廻つて下る押し流しそうなことがあるのに、却つて上の潮はるとこのは、理論の外へ出て不思議な現象のやうであるが、実は何んなものかといふと、上流かく力強く力強く我が流れの来た巨石を倒すこと、石の力が我力に勝つ結果である。我口を石を押し流し得ず、石を倒すことを停滞し、其の停滞の我が巨石の下をくぐるのである。穴が深くなること、石が其の穴を落ちこむこと、こんを度々繰り返すと、石は自(自然)と傾斜する上流の潮はるので、何んの不思議もない理である。

政治家や事業家などが動かすと又(次)々(事)つて往々反対の結果を見ることがあるのは、此の石の即上の理を閑却するからで、殺さんとして却つて活かし、下さんとして却つて昇す

# 新發見の良寛禪師碑銘

最近柏崎の西巻氏より出雲崎の佐藤氏に報告され、更に佐藤氏より私に報告された左の如き良寛禪師碑銘は全く新發見の貴重な文献である。

良寛禪師碑石並序

本州出雲崎有逸僧、號大愚字良寛、其爲人、氣宇超邁舉措眞卒、幼而異乎常人也、夙因所根、出塵之志不息、會備之圓通寺主國仙老師遊化、往投之、一見器重、爲薙染焉、服勤久之頗領祖意、仙老附偈云良也如愚道轉寬、騰々任運得誰看、爲附山形爛藤杖、到處壁間午睡間、後叩諸方、未謁宗龍于紫雲、深究道奥、爾來潛行密用、一不與浮花爲伍、山雲水萍居住自由、不蹈三級之世途、無露五宗之主角、詩歌翰墨、以充法用佛事、妙化擧世風靡、平處嶮々中平不可得而窺、於是上士亦倒退矣想入神僧傳、非如此人而誰、優游風顚殆五十年、文政丁亥、齡古稀遁招移鉢於嶋崎木村別齊、五易裘葛天保庚寅冬微恙告終人乞遺誡、師開口一嘆而已、端座示寂、實天保二年辛卯正月六日也、世壽七十四、法臘五十三經日顏貌如生、闍維日、奔喪者一千餘人、莫弗追慕、嗚呼師者可謂利水之慈航、欲火裡優曇也、余嘗道愛、今聞訃音、悲感之餘、唯恐德行泯没于世、因忘固陋、述厥梗概、敢爲之銘、竊勒堅珉以謀不朽云　銘曰

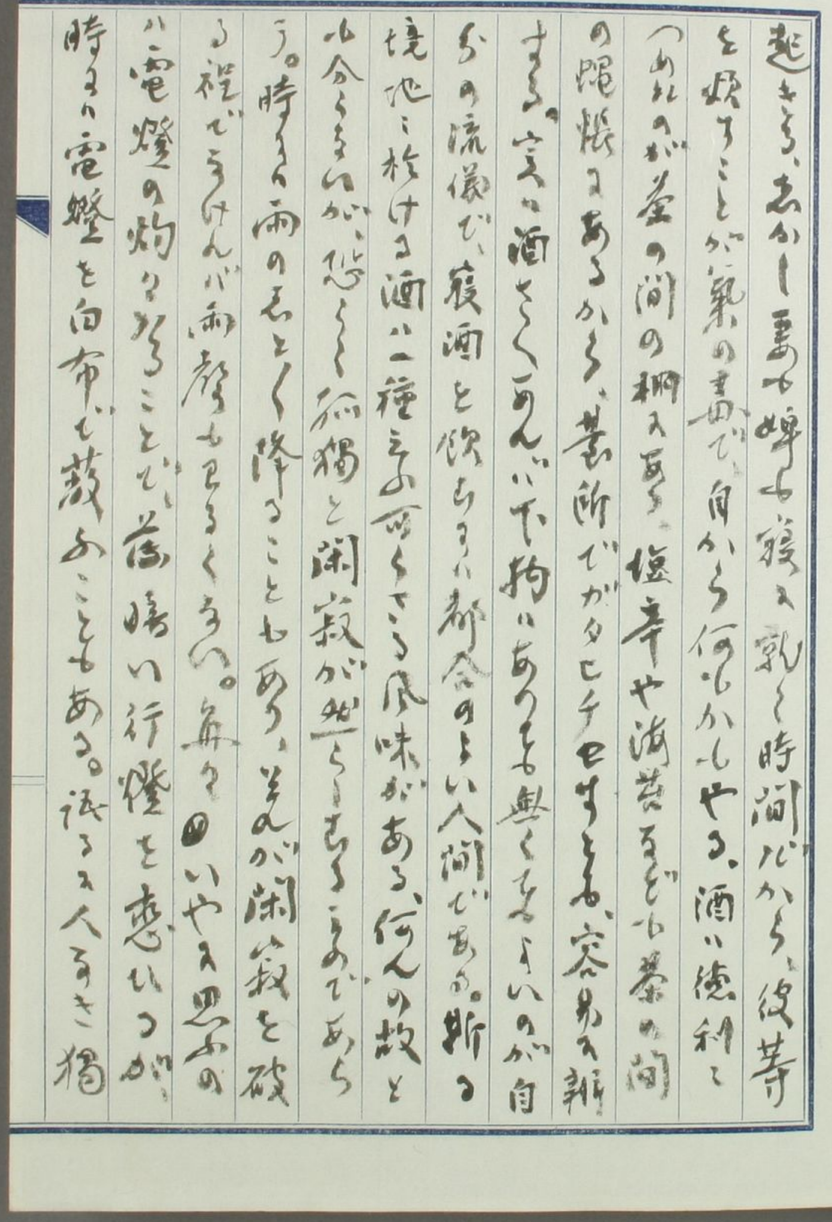
體寛大道良玄又玄若愚似魯
超聖越賢也出世際志業無倫

春花濃綻秋月高圓
天保二年辛卯仲秋
參徒北越證願詩撰

右碑文は東京神田區小柳町一丁目虎屋久左衛門氏の藏するところであるといふか、おそらくは建碑されずに終つたものでは、ないかと思ふ。

それにしても良寛和尚遷化の年の秋既にかゝる立派な碑文が撰せられて居たことは隨喜に値する。しかも記述至つて適確理解甚だ周到である点から考へると、筆者はかなり良寛和尚に接近してゐた人であつたらしい。たゞ證願その人が同國越後の禪僧であつたことが自記によつてわかるだけで、その如何なる人物であつたかとゞう調べてもいまだにわからないのは遺憾である、





酌まい無念無想で胸臆に何等去来するこなく。時
うまを思い浮べ洗して来たるさきをつれこと迫信もしな
いの中を思い浮べ身洗しと身後の事を思いまい
情無い既に死灰とうつてみるから、枯木寒巖とは此老僧
の境地で、表し得るものがココ境地をこそ言うべきであろう
自分も洋酒狂の時は酒味が無いでもない。自分は俺
んの様な酒禍れと云われが、実は酒でも禍機と相通ずるあい
だの酒は禍で禍は即酒である。酒の無い所禍もない禍が
無い。酒あんべ所禍もあるも自分から禍機を言うと云うの
が金の主張である。寢室の時間表の一行悔趙
趙一味禍の一悔が掲げてある。余は趙物の心人とす
余も亦趙一味の禍にるべき乎と一笑、酒を撒き晒す

横原製

就く

○或る老政治の談、老翁の家系のことを伺ふ。長男の
母は前妻と称したこと。冊長松大夫の長女。
勝南の時離縁した。夫が後妻内時の迫森文泰の後
室とのこと。妻は八百とあるのが此人で、芝田の同姓六
文亥の妹である。時見の近義は市貸の家で眼科医を業
とした。敵は去一九が敵後を表した時、北家の養子となり、
恩者者と門を開つて、芝敵風を吹き、
志ると云書を見たことがある。北女子が再嫁して産む北人
を代治(代宮或の他字か)と云れ、自分は年の北人を見れ
ことがある。北人は即ち富の母と異父の兄弟のあること
も始めて知った。

系譜を案ずるに自分の家は二代喜右エ門の三男次郎吉が分家
して家祖となりたるなり喜右エ門の先祖次兵衛の長男で五郎
兵衛今家にてこんが徳次郎の先祖である徳次郎は二代喜右エ門
の長男で自分の家祖次郎吉は其の弟である、夫人子孫〻〻
次郎吉の弟に伝兵衛なる者は次郎吉の弟で
あるが次郎吉の子孫は次郎九郎右次郎吉は先
こと言るが其子の孫大郎和右エ門が次郎吉の養子となる
つまりこんが三郎右衛門で其次郎の家を「命」と云ふたが自分の父の弟
板四次郎が其家を継き自分の家の分家となりたる三郎右の宜い
あるが然倉兵次の娘が婦となる長次郎の系譜を見
ると四郎右エ門の妹が再嫁した嫁した先が
妾腹の弟が死した後の嫁した人で自分の年の頃いまだ存命

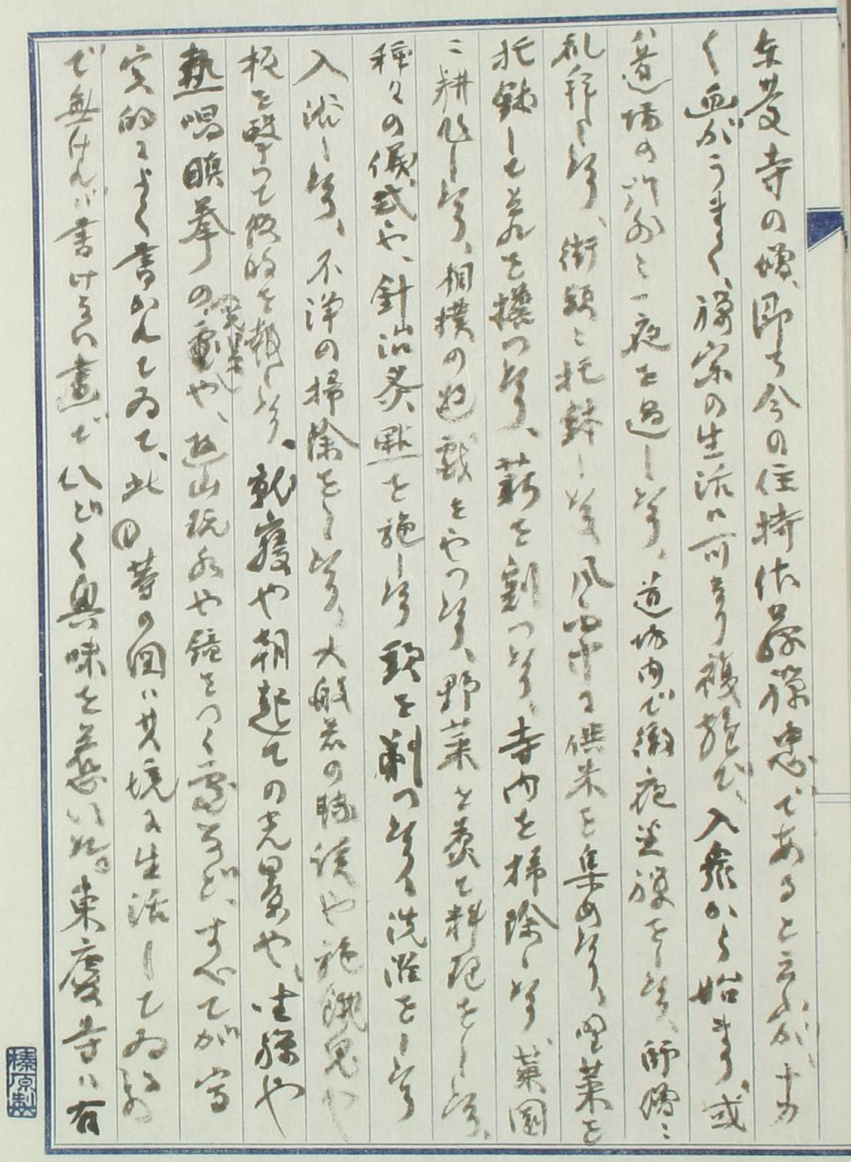
榛原製

なるのに
自分の祖母も我家の家祖伝兵衛なるべきと思ふてもあれ、そん
な誤りも家祖の分の兄の次郎吉で、其家が代を次郎吉を
称した故に家祖の名を踏襲したりもする次郎吉を子が
なく親戚長次郎の子の正七を養
子として家を継がせた、この人が三郎右衛門で其家の中興の
人である。伝兵衛と三郎右の事跡は知れもあるが家祖の事
は自分は何も知らない。伝兵衛は天集を護んだ位の者
なるべし。墓碑などを験したこともない。今は誰人も墓碑なる
すぎもないから伝兵衛の人々集を就て調べて見たい
と思ふ。去一族の系譜も頗る無雑のものが合家が数
多いから市郎性と名乗つたらしい。一時十軒迄及び分

家がまた合家を生んでゐるので、一時の同姓が蒲原郡内に確祝
しかも無理いきの郡内花くらべ郡の富豪なれば概ね大変
産をもの家から嫁が来てゐるので、保者も又郡内を充ちて
ゐれやうな仕末で、今日迄未だしきが多くの家柄
の豪家と一旦に親戚関係があることを思へば、故郷
の大切さを今更ながら痛感せざるを得ない。
系譜を由うと長家の祖に次兵衛とうもあるが、あれ
年間の書かれた、系譜首頭の由緒書を由さと、先祖三郎
秀吉の命を受け蒲口宣勝が新田の城主として移封さ
れた時随従した人に市郎弥兵衛の名が由緒書のうえにあるが、弥
兵衛の名は次兵衛がかんて住家を立てたことを思へばあるが、此の

樣原製

方人の先祖である親子であるから今ふる由緒を古いれ
時ふる人の切った関係であったことが此の関係を調査を要す
る。先ず角長家祖が士籍を脱した弥兵衛右ヱ門の時代
あり、子孫の生活を思へば、彩くしたる [illegible] と云ふ事
で一種の見識があった。若し士籍のあったら子孫は決して
長者にならうとは相考へない。
○東山君と文学の恩士佐木大拙君の禅堂を修行と生
活」の一色を彩られた。此の西洋人に示す為め紙と浮さ
れた書である。自分の生涯酒を飲む時禄味を覚へ
つがうん久時後人に見ることを忘れた北方
を後と自分の長人になのい、程堂の日々の生活状態が四十
修国大学を卒業して帰人であるから、其の事者の銀行家松原の



唐の蘄州の太守李播に面會を求めて、書生の李某が恭しく詩を捧呈した。それを一見するなり、呆れ返つて詰つた。

『これは僕の舊作ぢやないか』

『正に仰せの通りです。ですがあなたの御作を拜借して江淮地方を流浪して歩いたのも、今ではもう久しいことなんですから、どうか、さうさせておいて下さいませんか』

こんなに高飛車に出られては、流石の太守も角を折る外なかつた。

『僕も地方官で年をとつた。今ぢや詩も用がないから、まあ勝手にするがよい』

さう云はれて、李生は有難くお辭儀をして暇を乞うた。播は別れ際に尋ねてみた。

『君はこれから何方へ行くのか』

『先づ江陵へ行つて、伯父さんの盧尚書を訪問する考です』

といふから、播は笑ひ〳〵、

『君はまたしても出鱈目をいふ。盧は僕にとつてこそ伯父なのだが…』

と云ひかけるのを、皆まで云はせずに、李生はぬからぬ顏つきで、

『あなたの詩を貸して貰つたんですから、同姓の序に、あの伯父さんも一所に貸して頂きます』

斯くも詩の剽竊から伯父の借用まで、平然と本人の前でやつてのける所は、寧ろ見苦しくない位な徹底振だ。

○本主殿河原田氏殿長のある渡辺宮賢一が近ひ来り、文
村浩清雅の遺著『拙後人名録』を出版せんとて、お
筆を受ければ、地方的のものに出版するに廣く賛成の見込の
ないが、故人が折角苦心したものだから、何とかして出版
致したいとのこと、拙後も二三度がやつて見たいと決心した
あるらしいが、辞書の種々形式の異なる大小の辞書を
まるで、田舎の流家が調ひきいから成るべく安価の
やうにとの事が云ふて、自分の考を書くことを約し
た。拙後の種々の人物傳が出版されたものは多くは文人墨
客の文筆を者のあるものである。
あるのは一つもない。徳川時代各藩の人物や、工藤界の人
物や、角能者の数多くの人名録を出して名をうした人物や、商賈

標原製

や名主や慈善家や侠客や義士等、文筆を欠く為め一
切忘れ去られて世の出ずに埋もれてしまふことは
遺憾のことが、村浩は十年若干の経費を材料を採集し
なお、恐らく遺漏が多からうと思ふが、幸ひに村浩の慶下に
故人の遺墨書画或は写真、遺漏を補ひ索引を作る
ものがあると云ふから、一度原稿が編成されることと思ふ。
他の増補されることも亦角上版したいものである。
渡辺氏と今浜の物、耳をそばだてて聞いたことがある。
去る廿九日花者会部と駿河国芳賀と寄托した
書庫の半分は焼失した。数年現の為め三十年を
経てやつと成就したとのこと、其の蔵本は悉く焼書び二
冊(三冊)人物とのこと。文(文)に関する書物がないらしい

が我々の筒人洋書二篇を著した例の通り学かうの田中家で結婚式を挙げた人仲長吉君支出してゐることが感じのよいこと。

○天童如淨の風鈴の詩を巻末に掲げた時師曾氏が支那で得た美人比時師曾氏の作

通身元是口頭禪
芙蓉東面南北の人
一等風塵のなかの般若を演ず
滴丁東々滴丁東

○此の号不良少年の河を行くんとある隠語が都新聞に出てゐる。美人下に掲げる此きこのである。

不良の隠語

ヨタ、ヅベ（不良）　ヤチヲハガス（女と戯談する）　チョーコー（素人）　レク（仲間）　ゴラン（子供）　ベンタ（細君）　クリ公（制服巡査）　ダチ（友達）　キスグレ（酔っ払ひ）　ツメル（喰ふ）　カンタン（泊る）　ベクリ（青道）　メリケン（米国）　ドヤカン（宿屋に泊る）　ガセ（ウソ）　ノウ（上野）　ダカン（調田）　ゴーホン（本郷）　クサ（浅草）　ヤリビヤク（一銭）　フリビヤク（二銭）　（イリヨー（二圓）　十ベイ（十圓）　エンタ（煙草）　グニヤ（電話）　オートン（自動車）

○小石川の三人の話久井上仲義と云ふ人が訪ねて来た。用件を聞くと村敬宇先生の長宅並びに同人社の遺跡を去年まで見た遺碑のまゝ敷地と云ふ、夢の遺跡と標示した標木があるこれが見えるまで無くなつて土地も高低し標主を替へてゐるから、他の遺跡が全く湮滅する事なのに、同人社出身の大橋訥庵先生の相模もしてゐることから、自分の快く賛成を表した。自分は同人社に関係ないが、東京大学の教授を受けたことがあり、後又小日向丸道所の米沢の所教の家を半分貸借したが、此の家の崖に先生の宅と同人社があつて、私の宅の池水が走つて崖下に出る地形で、確に私の家を受けたかと思はれる

# ごさみ

第五號

## 碑厄

春城生

豐太閤が聚樂の第を營んだ時、建築材料に莫大の石を要し、石商や石工が非常の繁昌を極めた。此時遠近から石を求めることを石狩と云ふた。當時は起重機もなく、運搬に便する汽車らしい者も無つたから、恐らく遠く石を求めず、武威を以つて附近の碑石などを狩り集めただらうと想像される。權勢家が大建築を營む時にはどこでも石材を石碑に取るから、多くの碑石が此爲めに亡びる。いつぞや支那の書籍で見たのであるが、明の天子が宮殿を營んだ時に、大規模の石狩が行はれて、大概の碑は此爲めに亡びた。支那の學者は之れを惜んで碑厄と云ふてゐる。

全體支那程豐碑の多い國は世界に無い。どこに行つても仰ぎ見るような巨大の碑があり、勅建の碑となると、必らず龜を刻した石を臺として其上に置かれて屋蓋がある。此等の碑は不朽を期するもので或大事件を記念するならん、君德や功臣を表彰するなど何れも大文章が刻されてゐる。これが歷史を語る貴重のものであるが、宮殿などを作るに、これ程良材は無い。之れを打仆して運べば、加工を要せず、水に架すれば橋となり、道に舗けば歩道となり、少しく加工すれば階段ともなる、支那の天子が戰勝の餘威を以つて前朝の記念物を如何に多く亡ぼしたかは想像に餘りある。多分此等の材を今は堀り上げて見たら、其の一面に刻字のあるものが少くなからう。中には史料とする貴重の文字もあるであらう。支那の金石學者が惜んで措かないのも無理はない。碑は不朽を期するものであるのに、戰亂に遇つては縱令兵燹を免かれても、斯る災厄を免かるゝことが出來ない。之れを思ふと、碑石を石狩の厄から免かれしむる保護法が無ければならぬ、都會地を避けて建つる如きも其の一法であらう。

（二月十五日記）

△三鶴亭梅の漢詩ある

○先日錦水亭で歌人に時雨庵と香雪の詩句が掲出してつたが、それが本年子規忌の例の俳句の詩び松井梅亭の漢詩である、依て詩句と思ひて讀んで見ると、梅を味也と云ふと雪梅の味と見てゐたが、其後逸雲が桂山と家とれ雪梅の句を見ると、主人公が雪梅と花家が雪と梅の花を見たるが、三冬酸郁の花を発するから、女性を扱ひたるものでは、之を斯く見立てる方法いる事は支那の名高い女性を題材とする詩、梅い花を對するけんば枝木と見まがふやうな、鉄幹（蕉雨）の男性的の樹である。花ちんぱこを妾梅と云ふ、梅くい事迷惑ひあるが、兎角北村の小寒花と行て清香を発する事（梅の）ちがあるのに、性質日を梅毒と云ふとそうしたものを（？）

梅を愛するあまり其花を書かせて得たり。

○今の梅が春を報ずる時節じゃ家園のお梅も四分咲

きいずれ咲きそろひし。風心元和堂

報じてあり。仙覺の代に梅候しくや何か降りて春に春を

どこの花が梅に著き咲めば梅は著き先

九ち花を見すれば行てそのるかに花を見し。梅花の咲きて

なるとと花を見し。おやじ北村の人を驚かせる。実相寺

つて殺した。古寺のくちの梅もけうさめん、そはてて

花ゆはこころひきけりと、三文字屋和助の堆この

花をつて、其香殺ちう、清楚として美をひらさる

梅の風ある。詩人は梅花変と

吟し、文人は書画を友梅書屋と名付、玄宗の龍地る

梅北と花くらべ、採梅を風流として美人で梅を採り

まるき時ある、梅花市者と係ちどこる変物で咲

く、市者家で之しき家も梅咲きぬとこのやうに、一茶は

「梅の木のあるやうに顔もあり山家うるし」と讃し其角は

梅うる者やらんの家ものそのし心と言ひ、賢安は梅

と題枝とし、こんう者し一詩うきを恥とし比。蜀山は梅の代つ

て「おんなえてきく歌をよみさしうと梅のあるいん事も

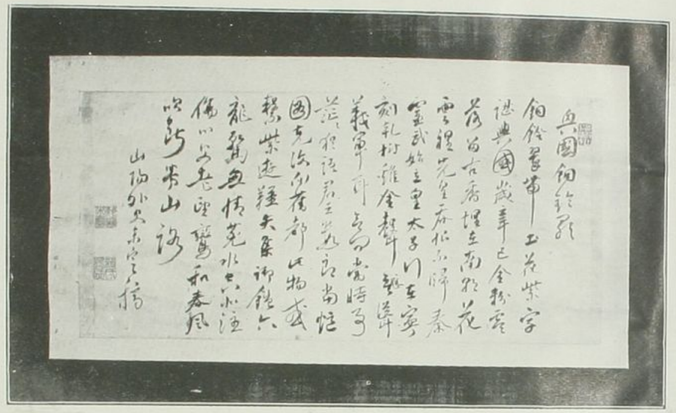
はづうし」と。皮肉。梅の月と花まて

名に飛まて、晴雪溶動月黄昏は年古の俗唱とさる

て春う月ヶ瀬の渓流は校舎にて歌を函てあるる者はあり無い。

月と花は清を梅と事ふの多。梅を美人とする清楚

の故である。梅花は時節あるも俗に依る市位無無。本和清は梅



此幅余が愛蔵せらるる載せて書道雅源「今まえつ」第六号のもの、

口碑を余の七十八回の延長するを余を神田の流化えいくく、今を張人と流出席を過ぎ
る頃、流今間の形柄を、蒼海杉井杉木の三流人
七年今、人方振り四人を向七年の人今の神郷士初め
七出席、流今を尾崎写真四策を関する演流よりを
外れ写真の人今を流れる端を、四写真の演流振張と
る、穏さなる写真の会市流くと云ひ二時間と
亘る演流いるく四民の云ひ人とする所を忌保をく悪し
くをを其の大宴をなく、余をも幾人をを著書を欲
つを例をしてあるを、をを余が十数の絶筆中日本
趣味を関するものを集めを一冊とし徒文社をを表
の春偶開流を欲の、今の注意を惹きるい今休み

榛原製

り、北家のかの川三叮目入あるも、もと市盛と云ひし半角
庭の流れを、流を、四角目を一新し、入口を数十間のトン
ネルあり、両側丈夫の大盤石を壁とし上を示ひ
流れを大石を載く、訪る大石を何人も軍ひ難
此の盤石上を三畳角を敷しと云ふ、屋内を入て
休憩所を取るを、ここを一間程の四形の大火鉢
あり、大瓶を上を振くつけあり、鉄瓶を煮一
畳角を、庭も多石の工作を施し、瀑布珠
を以状を為し、山氏斯る大がかりの設備無けんべ
家男なるを、楽地を作けり四庭を行きしこと
をなるを、八坂なるを、市中神田の市上を作ける
云ふの別天地を

二月十八日

政宜義務と軍部を始めとして、諸の如き誰の為の離散を恐れて、時局に真批判を為す者の起つを待つの時、志士の起つを待つの時、志士の起つを待つの時間の経過を試みるのみ。陸海両国民の奮起を待つ。

大正四年三月十八日　七十九年歳末　身体虚弱、一見悩んでいるべき衰状を呈しているが、流石に気魄のみは衰えず、元気溌剌たる。其の強く所、往々国際関係の為所を外れ、彼の特殊の理想論を通ずる新聞記者に対し、教訓を與へることを忘れない。

東京朝日抄

白亜の殿堂

## 議堂登壇と時勢の變化

◇尾崎翁の登壇は確に今議會呼物の一つであつた。傍聽席も新聞記者席も文字通りすし詰めの盛況振りを見せたのである。初期議會以來の議員として唯一人の存在であり、當ては憲政の神標とまで呼ばれた翁の翁が、七十九歳の老軀に鞭つて、議會政治沈滞の眞只中に、大いに獅子吼しようといふのである。

一體何んな事を言はうとするのか、又その獅子吼が政治的に何んな影響を與へるか、或ひは風を呼びはせぬかといふこの二つが院内の視聽を集め、世間の興味を呼んだのだつた。一時間四十分に亘る演説は、翁の老ひたりと雖も往年の翁を偲ばしめるに十分であつた。

聽壇を埋つ者の側に立つた弁舌が聽衆水を打つたやうな靜寂の中に、その前半は相當の緊張を見せた。その後半に至つて、演説内容の重複と演説者の疲れで、聽衆がダレ氣味に陥したことは遺憾であつた。我政界の大先輩として、軍部をたしなめ、諄々として説いたその教訓は、世人の氣持をそのまゝ代弁したものとして、軍部の諸公と雖も、素直に受け容るべきである。

◇然し翁の獅子吼も結局一場の教訓演説であり、その意味でその勢を多とせねばならぬが、現下の複雑、深刻な時局に果して一大指針を與へるやうなものであつたらうか。

翁の翁が説き去り説き來つた時局認識乃至は國際情勢の説明が、一向にアッピールせず、聞く者をして、深刻な感激を覺えしめず、何んだか時代からかけ離れた放談の實感を與へたのは確に時勢の變化によることをつくづくと思はせた。

國政の指針について最も鋭い論鋒を向けたはずの翁の演説の中に、果して何をなすべきかのといふ現下時局の最重要點を發見出來ぬのではないか、寧ろこの老政客からかういふ感激を得ようとするのが無理かも知れない。

◇翁の演説の最中、院内では軍部反駁と解散のデマがしきりと亂れ飛んだ。前夜來神經を尖らせてゐた政黨方面では、なるべく拍手を控へるやうにとの警戒が拂はれ、翁の演説の半ばにして民政黨は町田總裁以下首脳部が聽場を引揚げて解散對策を練つたのは少し氣が早過ぎた。「無事でよかつた」これが政黨人の偽らざる胸中であつたことに間違ひはない。翁の起つた日のナンセンスの一つである。

複原製

○以上の記事は文政二年右掛屋と云ふが連署さ
れて数人之者共より出る所の二歩仕り候人のこと
が書かれてある、其中で知てゐる人物も可成あるので
興味をもつて読んでゐる、柿本が数人と共に来た時は
第四回(後で述べる冬の庭が出る統一さんが時に
自分の文化の頃の校長)の方が主であるが、柿本と張つた
のは、ずいぶんと柿本が衆議院議員で自分が議員であ
つた時であるから、こんなに前から仲が悪かつたのや
来た比較的古参が浮山ちつて錦袋を極めるが西宮
寺公園は徴兵庁の第一の古参であつた、前原も古参
で北人の私の家の隣りであるから、仲のよかつた自分は知つて
ゐる、生田郷は知らぬが家は郷の書記で二家数

が今も花しんである。実録の二家が実は先輩で
輩である。名和後とは人事の人事の点で
北北人は和の時事法を受けなかつたのが深い
事実北北の台閣も入らず特しいことであつた。柿本
以前に事が縁がある人物の以上のはきえる。柿本
から今の関谷は十年まで六十年間に二十九人の知事
が交代したところが、北中で永山が最も長く在職して十年
続き田とは田が四年でいくらか長いが、まだ何とも一自人
の在職は二年位が十年四年の時いのもあるから、こんと
例おりして除くと、一年半をこしての在職はあるが、すべて
二ヶ月位で更迭したのもある。こんな程在職は地方行政の
為にうまいことがきまる。こんな所は知らぬ冬和も略

略四級で、西園寺家と近衛家との交渉が成立した例は今迄無かつたと云ふ。
の交渉が成立した例は今迄無かつたと云ふ。
の名すら記臨が出来ない。自分などは高等の教育を受けたから、
多く文盲が多く、知つてゐる人物とても、樺太、永山、八郎平
田、柏田、勝田、平頼、西郷、大田、三枝、篠崎（五郎）等を知つてゐる。
ぎりの、中島、柏田、勝間田、千頼などの他分頼、奥と往来した
新潟の大物だからね。如何も格言のうまい人だのだもあ
るから人物が下つてきた。別に政府の政略の犠牲と
なつた人物とは云へない。人物などは実人と云へるべき者が無い。
況や教育を受けた者は殆ど及人がないが、各位のおもかげを聊か描いてゐるから、巻末に収めて
おく。

○島村抱月と松井須磨子の恋愛問題事件は当時別に
深の法則とかなんとか自分も聊か文壇関係があつ
たので、知人と会つたり、又手紙を貰つたりした。実人
と出来ないさうだ。抱月もあの一件で文壇
から離れ、早大の教授に専念した。別に深刻な一幾悩を
抱いてゐるやうだが、彼は自己を犠牲にしたのだ。須磨子を独占したのは
つまらぬ事だが、自分は名を流した。彼は恋愛の為に自分で
須磨子との者に走つたから、ちやうど雑誌の月日を送つ
た。自分は彼の去就を見て、須磨子との間をうまく料理
したいと思つた。彼が早大教授であつた時、自分から
ちうちうに相談を持ちかけたことがある。その為須磨子と
手を切れとまでのびてゐたが、彼が体裁を繕ふと

ランクで無つた為め自分の子を引のばしたが、果して彼れの須磨子引つれん、終の須磨の犠牲となつて死んだ。彼れの死は自殺だとの噂が、自分はその当時須磨と責め殺されたと話した。北海不思議なめぐりあうのが出て来た。えい悪の肥満文でえが三百）まもなくて昭時を異にして書かれ、心臓とすることを約し、最後の延（ばうん書）約束んだ五千円の制裁まれ消してある。斯るえが何かあるえの話別の嘘すしかつれ的えの現れんきうとのであらうか、今まるつて現れんえ、えが河水繁後の雑誌婦人公論の解説が附さん、又抱月と須磨の往復の往復が細かえ叙さんもあるので、自分も一読したが、自分の既に考えもあることが細かん書かれてあるので、肥瘠を呼び起すことがあるえ。他のこと

はさて置き三通の手紙を渡んとえて、抱月がヒステリックの須磨の真意を鎖めるえ苦心したのの往復があるくと紀れ、自分が学つて成さしん、抱月須磨に支我さるとえふことを意味まるえ北海書であるも感じん。抱月は天才肌の男であつたが、性格の弱い男であつたから、三回まで往来を繰返ばかりうるこうたのであらう。須磨は抱月殺しを二ヶ月計りの後に絶死したが、えが果して二度のえい情かくおんなるがとうか、えが為めに比翼塚まで立つる略事が生じたが、実は須磨は純真の愛そであるまと思くえ。肥海面の五千円の制裁のあるえは野卑の極で、侵物あ子の修養のえい女の巧利心が試めいてみるやうえも見へ、後年赤愛ええ名の為め行つたこの如

原制

くるも思いなる。彼廉いろ〳〵恋の相手を物色し得ず、遂に
之を弱い性格の抱月を捕ろうとしたことが安南じゃあるまい。

抱月と彼廉の関係は文藝協会解散の新機となつた。
此協会は元来の彼等を始めつゝあることが出来ず、
其の四悪者と称した関係の離脱を面白く勧めれ
ると察んで彼等は文藝協会を去り、別に一旗幟を
立てるのもつた。彼の事件から自然抱月は早大を去ること
となつた。此の紛糾うつき、或の日情を抱月の
中河内の指図の賊を云ふものとしかど、実は中河解
散ちつて、日活内の何等非疎も説明せざる事の
ない。実は元への抱月は志賀関係から背き協会

の事業に累しなのである。世間は中河下生のたくん
ぶを為ることあり、而して男女の関係を生ずること
と称園と称して為すべしとなる、唯此場合は宏量
なる悪んで悪者を放たざりしも、自分は学ぶも
彼廉が漸やく周囲からチヤウホウ云いそやされる
彼れの言ふに。こん恐く他の協会の為をなさん、何ん
の恥辱を抱くも日光しきも優い座主之んを忘れす
ること例とも、一い事無らんの人為ろう、協会の目主脳
内い表格として彼ること能を望み得べくもなへ。況ん
哀れ自ら当んかと、勿論「時の試験」なるしと云ふ
果して有願んなる彼果に為(寄)着しなく、抱月が外国の
なくも明瞭し此日、志きなる自然を義を明者しなを

聽き屋の女時代と不孝を戒しるが、彼んの行住い身を主義を
実行したる座敷し、彼んの粧れ遊戯るくるべき歌

○俳句を古川柳を後文人の時代の表句を左る書きとも

女房の屋中でありて所えぬるあ
つらあるれ女あも里へ長居けし
お加減亭主屋敷へ出きんるる
屋あげく亭主屋敷へ出きんるる
使ふがくもんるる
添乳して棚に鰯かさせるやす
生恨る夫びいきにもらはるし
糠味噌く思い切る手の美しさ
寝かす子もあやして亭主ひるる
子の寝ぶ見る女房宣伝する

原製

糸巻の内ん亭主踊つてお
女房は歩いて流するはるし
初盤の家あれまも今ふ氣ある
朝掃除ひとり娘を掃き残
心中へいや居行はしてみたし
かへ抜かしかると娘初手いい
振えれ手曼を志しつてる
子を持つてやうく親の馬鹿ふ
女房のおあくちるる。邪魔るるあ
女親は息子の嫁を作てやり
朝帰りに親仁も笑ふ見んどする
孝不孝二つるくらる金ちまくら

通さめい通さうルめの通善法
長持や家宮を担ふる棒の長さ
年礼に一軒ゑやす例角
ほうえん比所び蓮庭孫を
そこら辺行つてわが金女房貸し
少立い急が四人の先を降り
うゝ帰りて寝ちとりひく盗み出
心中の追人に親のゆゝ一文
○数年前仙台帰者の記録古蹟成文
が持参の七方の内ゝ岩船藩の治家の史記がありたる場り
時代答藩で往々の事柄を刊しにとい切れ切れことばその
刊書ゝかゝゝ家国一ゝ有るが村上藩の史記のやうな可

横原製

ゝゝ大都の書を刊して振うとい寄ゝ寄ゝ感じに刊古
記ゝどの名へ問ゝることも出来ゝ去つたが近刊の雑誌
「古志路」に北の史記考が出てゐる見て伝ると服部七
左衛門の元宅とゝが天明年間寺嶋師範ゝも抱へゝ
寛政二年頃から史記の法版ゝ手をおし田四年ゝ
とおいてゝゝ江戸ゝ藩邸ゝ出版ゝ
新数刷行ゝゝゝ今ハ京都ゝ出版ゝ
ゝとゝ。言志路の記ゝ
北冊子の巻尾に収めてゐる。
○去十九日神田の寄席を今橋ゝ江戸時代を追志
ゝる連中の座談会を言語研究者が出席した
越人の歌切ふんとゝゝと四顧社ゝ中のゝが多かつ

北から見ても釣られて出て見た。二十名ばかり出席した。ばかり
数いたくさんの人で、ちつとが好江戸風味の料理屋
さんくれた。遠方旅行の会でもあつた、北海道の
の料理を出品の面白の面白い人、酒肴鉢を自家立作を
やつた位で、格別種のこと も無つたが、自分見たから持出
した注文に成る分け蛙の料理を集めることを喜
用し、養泥も蛙の味を存ずることを云はれた。浜者の名
を現はすことのあるを、素人寄も秘事を蔵ふことを
うるから、料理を集まる。今度は男子に限らず老
婦人で来ることもあるも求めた。北の出産の内容
を書きれた蛙の種を何部かに集まる藤の鉢を
かつて、前田曙山などの小説家の江戸見を説く

榛原製

て江戸見と云ふ人に一行の人物を連想し氣質ひの人間
や喧嘩肌の人物や喫呵を切るやうなものを書くと
が、見る或る一部を書きたい、もつと書き考く旅へ江
戸の風俗いろいろと云ふ洋書家に田江戸時代のおもかげ今でも
井柳亭と云ふ洋書家に田江戸時代のおもかげ今でも
多趣味を出来るやうなる。やうに小説の中
庵などを一六堂の臨別餞ひも摂ひをこの田城の損型や人
他江戸の義賊(国)などを海外と鼎庵の設定(作をべさん
と主張し、何某(名を略す)とこの常磐津の師匠家に悲
こ江戸式の音曲の発物を浸き、自分に書生時代の料
理屋や芳原の状況などを説いた。実に場内の長年
長い身分であるが、見かけ以上八年を出来られあひ江

戸時代の僅かに残りてある面影を眺ぬる氣持もするべきものなれど、他の場合と異なりて二十年三十年も若い人々であるが、銘々の宝物ならんと江戸生れが多く、江戸出身者は自然威張れる他国出の人でもあるから、江戸人は江戸人の中の時代田舎が良いと云ふ出質と云ふ話が出たが、こんな通説実は他江戸兒は今は寒さ厳しくなるとあれば、ある人の話に他の田舎にそんな話はなかったとか、江戸料理の薬つれことを慨も義憤を抱くことあるべきものである。江戸の四時賑が云ひて地名までが誤えてまることなきにあらずあり、江戸時的密の思想は埼玉県つれか大速力で時間が迫ったので、銘々が起つて決する間に九時かきて閉会を由義をきたれり

複原製

○我々が高等師範教授であれモール大先生の大正十四年八月八日の葬儀に際し、先生の晩年の日々自邸を訪ふ人の目撃する所が自分の注意を惹いた。先生の書斎は大きな標本棚があつて、近寄すると其経を見ることのある大きなものが始終もあつた。即ち第一行は エドワード・モールスター、モールスとあり、第二行は一八三八年の六月十八日ノーン州ボルトランドに生まれとあつて、第三行に「死すべしとして年月日を記入し得るあり」あけてあること、義ふことと思ふと先生の尋ねると、先生の云いつるは、「人の自分の脳の装置は、自分の死後脳を解剖して研究して、その結果を用ひたと云ふ、且つ云いつるのに

先に長崎のウヰスメー研究所（解剖）の所長グリーマン侍士がやつてきたので、近次自分の脳の解剖を侍士と共にし且つ其の脳と研究所へ寄附する旨を約し此の日、侍士から北の鐘を寄せて来れり、其内の侍士の書簡の中に「当下の所安永に由り脳を納める鐘を贈る」とあり、この鐘が永く用立ちしことを実証するものなり、其書簡を写せば次の如しとあるが、こゝに其書簡を写さんとするが、こゝに其書簡を写さんとすることゝ、先生の孫井子高宮幹雄氏が大正八年、先生を訪ふた時の事を追刊の雲州の出でたるなるこゝの大成を知しめるの

○風後翁年譜八冊（城後が民の医二階堂良碩の推新奉公録、其の記載八百技康三（医科医

複原製

らるゝ事の出来る、かゝる事の御国柱渡のおき勤王の魂吹き荒あつ、勤王家の起るべきは必ずしも余の其の多くとなるべき二階堂の勤王事跡の如き初めて突く所也、此の風後翁は若い二階堂が奉公の事を自記せらるゝ事を戊辰の戦争に奉走、逐こ居て陽を率へるを取り功績少からず、ちゝ〜の人物こ、余が御里の原を論議と共に多くなること為めども、其名を知らざること、惟新乱平くの後、兵部省から賞を受けらるゝこと、聖駕後、城後翁は幸の際の天教奉行の栄を得らること、吉橋竹谷が長崎都不のを論じて刑部の爵〜や、北人七郎産まれ入獄〜なる後釈放を得らる、南時雲の間あるこの話四雄と勤き勤王の為め身を業とを業とせるが、二階

堂の如き其の風采とまぶき人物なり、此人如何なる人なりしかの詩なり

半百光陰指間、翼来往事笑談頃、暁風時波響清海、夜雲或論鄭陵山、吟懷崇究入土獄、揚名愛命者天顔、志慶歳月是現、休説年

客帯光陰

詩

北海雄図拓渡を示すの也、八百枝の高い二階也の世なり、此吉田八百枝の刊する所也

二月廿一日記

幕末風雲急なる時憂国の徒、馳せて敢て他の示唆なるなく自から起つ此あり、其の如くであつた。傾神宦医、富豪、僧、苟くも名後あるこゝあり、もとより特殊の奥斎で、勤王の旗下に

榛原製

立つた。大小幕府の圧迫に立つた弊さ時としもあつたであらうが、暗殺を敢行する者もあり士としては真に此あるこゝまんの義侠が有つた。彼等は何を為したか必らず

しも武装を以て斬々彼つたとあるべからず、或は宦官の

徐道を為すもあり、藩侯となり、同志相呼応して勤王の

実体をつとめ、或は兵糧を助けたりして、敢て自家の利

害を顧みざりしもの、八百枝の雄略の氣宇を

輔翼し、之を為すか、彼等は花蹤の間を奏功した命

と強し此あり、如何に少なくとも、此等の人の隠れ行跡

は自記を存するもの、外皆なしも無きも、我邦

後の如きは、官可き者抗の志かあり、陽明の命令あり

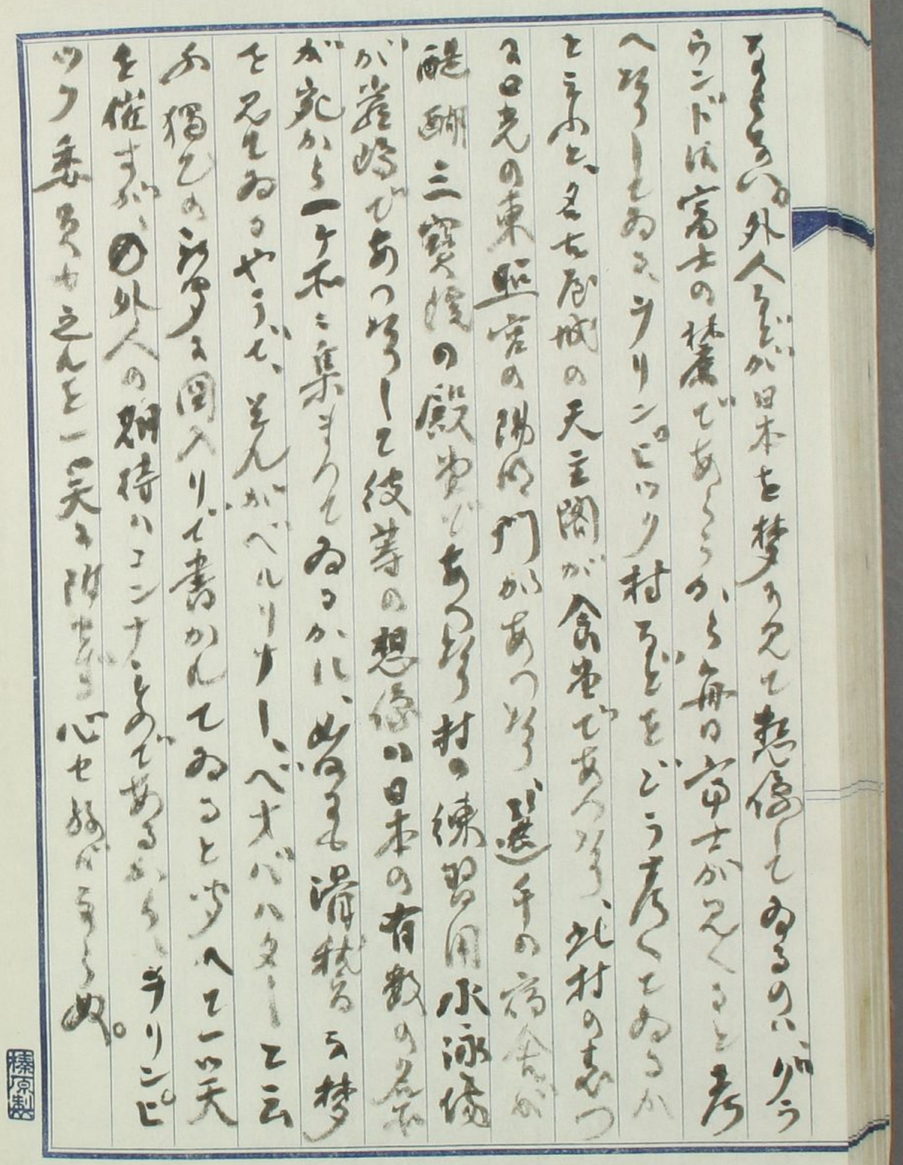
て、交戦の地であつたから、所謂花蹤は列る事

心張りそのはけ口を北の危険に求めたるものなるべし。吾等は戊辰の以前幼少であつたから、銃砲などを見たことなき人なれば、無論のことゝ思ひ、嬉しくもあり、悲しくもあり、志士の表面は一卵の中に而と呼ばるゝ志士の幹旋などは、知る由もなきことなれば、長なる全土にたゞ志士の存在の駒雖の事のみが唯一の道と思はせたるが、何年か経て勤王の士は北海道に渡り、人知れぬ苦心の勤王志士の運動は、[illegible]相達の[illegible]其の辛酸苦労に於て決して劣らざるべし。但し大藩の志士は其功勲を[illegible]、卿地の志士は其功勲をうえたるのみ、吾等は二階堂の自記を読んで一層北感を深ふせざるを得ず。

橋原製

○杉浦武雄の[illegible]武彦から書簡を寄せられた事は[illegible]武雄の紀念碑を建てるとの事である。吾輩は[illegible]碑「書簡」を読んだ武雄の書簡を載せられたが、なんとか紀念碑に収めたいと考へたが、あの書簡は勿論若干の読者を失ふ事なれば、武雄自身が下に書して書かせたものであると教へられ、如何にしたが、なほ[illegible]組織の時代の書いた記文とせねば何となく文章が整つてゐるかに見ハれる。

○日本を枕とせ開かるべき第十一回オリムピツクの報に就ては未曾有の大設備を要するは勿論だが、○世界の注目の期待が偉いから、[illegible]の人とすることは金を莫大に[illegible]のが満腹の[illegible]も外人を驚[illegible]



書畫骨董雜誌　第三百四十五號　昭和十二年三月一日發行

# 松浦北海に就て

市島春城

折角寄稿を請はれたが、差當り書くほどの思付が無い、然るに昨夜松浦武彦氏から松浦北海翁の五十年忌の法要を來十日寛永寺で營む旨の案内狀に接したので、翁の事に就て聊か雜話を試み責を塞ぐことにしよう。

私は翁の生前一回も面したことが無い、ことし翁の歿後五十年と云へば、私の二十七歳の時歿せられたので、機會があれば遇ふことも出來たのであるのに、毎々遺憾に思ふのは、翁は私の大すきの人であつたので、一面識を得て置きたかつた。私は翁の事蹟を特に調べたことは無いが、其の逸事を聞くことを喜び、翁の著書や遺蹟を可なり稽査したこともある。但し私は老いて巨細の記憶が無いが、思ひ出るまゝを秩序も次第もなく矢鱈に語るのだから、或は思ひ違いが無いとも云へないことを前以ても斷つて置く。

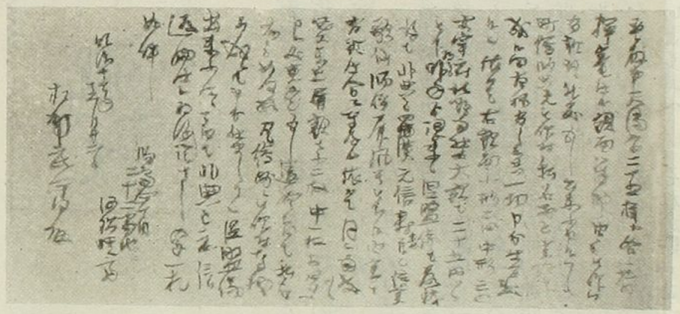
翁の遺蹟の存してゐるのは紀州德川家である。爰には翁が木片勸進で多く歴史的の古材を全國の知人に募り、巧みに構造した一疊敷の書齋がある、又翁の遺著が南葵文庫に多く藏せられてゐた。私は此等を探討する爲め、數々德川邸を訪ふた。史的木材で構へた室は他の人の企にしたのもあるがあれほど小さく、あれほど巧みに、且つ珍木材をあれほど寄せたものは無い。一疊敷の狹いところであるが、何から何まで遺憾なく調べてゐるのには驚歎を禁じ得なかつた。翁は卓越した多方面の趣味の人であつたが、其の一端は此の書齋で直ちに首肯される。此の書齋に附いても『木片勸進』と題する翁自刊の寸珍本があつて、それには用材の來歴が一々記されてある。亦書齋の襖には翁自刊の紀行、これも寸珍本であるが、それが貼りこまれてあつた。翁は寸珍本が好きであつたと見え、十數の紀行は皆な此小形で刻されてゐる、私が一時千餘の寸珍本を蒐集したのも、翁に負ふ所があることを白狀せね

ばならん。

翁の未刊の紀行類幾十冊は大抵南葵文庫に保存されてゐたが、これも度々展覧した、翁は相當畫も書いたので、紀行には必ず風景のスケッチが添はつてゐた。翁は田崎草雲と親交があつて、蝦夷地の風景を己がスケッチを粉本に供し、草雲に圖させたものが二冊の帖になつてゐた。それが偶然私の手に入つたことがある、私は足利市に游んだ時草雲の門人が生存してゐたので、それに鑑定を請ふて箱書をもらつて、大切に珍藏したこともあつた。

翁の遺著に名高いものは一日百印百詩である。翁は賴鴨崖と江差に出遇つて、或る人の仲介で曉天より夜に入るまでに、鴨崖が百詩を詠じ翁がその詩の句を取り入れて印を刻するの文嬉を試みてそれが成功した。其の結果が版にされたものが二種ある、之れを見るに鴨崖が山陽の子であるだけ、才氣横溢で百詩共咄嗟の作と思はれない程巧妙であるが、翁の篆刻もなか〳〵手に入つたもので、確かに作家として相當の地位を占むべきものであると感じた。翁は多藝の人であつたが篆刻は恐らく其最も長所であつたと思はれる。嘗つて翁は北海道の地名を雅語で撰み、それを自から印に刻したことがあつた私は其の印影を見たことがある、印影は確か黑川眞賴翁に藏せられてゐて、眞道氏から示されたことを思ひ起すが雅語の撰び方が如何にも巧妙であつた。斯ることのあるのに、政府は何故にそれを採らず、現在の如く俗惡の地名としたか、其間の事情を詳かにしないが、誠に遺憾の事である。私は其印影の模寫を今も藏してゐる。

翁は河鍋曉齋と親交があつて、曉齋に書かせた畫の内で最も名高いのは、北海翁樹下午睡の圖で、大幅の密畫で、曉齋は九ヶ年を費して書いたと云ふが、其圖は涅槃の圖に倣つたもので、樹下午睡の翁を釋迦に擬し、それを圍繞してゐる種々のものが、翁の愛玩の骨董類である。これは一見觀者の頤を解くもので曉齋の傑作である。翁は曾つて曉齋に托して天滿宮廿五社に奉納せんとする大小の顏面を揮毫させたことがある。其際曉齋が翁に差入れた證文じみた書簡が私の架中に藏してある、それには涅槃像の事にも及んでゐて興味もあるから其全文を左に收める。



（河鍋曉齋證文）

（本文參照）

貴殿事天滿宮二十五社へ各々私の揮毫仕候額面御奉納の由にて被仰付有難存候然る處もし出來不申候はば町繪師共へ被仰付私名前を書入被成候由左樣有之候共一切申分仕間敷候也依是右額面小形二圓中形三圓太宰府北野兩社の大額は二十五圓づゝ被下候約束昨年より認來候涅槃像も落成後は兆典主羅漢元信壽光幷に信實歌仙師宣屏風等被下候由實に難有仕合に奉存候依ては月に兩度づゝ必ず參上額は小二枚中一枚相認め申候處實正也もし違約致候ば私名前にて如何樣凡繪師に被仰付奉納相成候共申分仕ましく候涅槃像出來不仕候節は兆典主元信返納仕候爲後證差入置一札如件

湯島四丁目二十二番地
河鍋曉齋

明治十七年十二月廿二日

松浦武四郎殿

以上書簡の文言で推測すると、曉齋は例の大酒客で人の依賴を氣に留めない習癖があるので、翁は其癖を知り、若し約束を履まない時は、下手な畫家に書かせて、君の落款を据へるから、承知してもらひたいと釘を打ち、約束通りに書けば、名畫を謝儀として君に贈ると云ふことに對し、此手紙は請け書であることが、一讀してわかる。それにしても翁が贈ると約した兆殿司、元信、信實、師宣、など皆容易ならぬ名畫であるのに、思ひ切つた割愛であることに驚かされる。

翁が多方面の趣味家であつたことに種々の遺品を見ても知れるが、高い趣味の現はれは、翁自刊の『撥雲餘興』に收められた稀覯の珍什を觀て知ることが出來る。翁の一擧一動は趣味の一擧一動であつたので、平生外出の時には必らず、澁團扇一本を腰に挿んで出かけ。書畫の能力ある人には卽座に書かせた。いつぞやそれが屏風に張られたのを見たことがあるが、いろ〳〵知名の大家の筆蹟があつた。又旅行の折には寸珍の書畫帖を携へることが恒で、到る處に人の書畫を求めた。此寸珍帖若干が自分の手に落ちたこともある。

翁は旅行通だから足蹟天下に滿ち到る處に遺蹟がある。翁の遺蹟と見るべきもので長く傳はるものは、翁が上野東照宮を初め北野天滿宮、大坂天滿の天神、吉野の金峰神社、太宰府の天滿宮に大神鏡を奉納したことであらう。其の鏡の裏面には北海道の全圖が鑄刻され、そこに翁の奉納の精神が籠つて居り、翁が優れた意匠家であることが知れる。いつぞや北野の天滿宮を拜した時、此の奉納の大神鏡の外に、大坂毎日新聞社の本山翁が奉納した他の大鏡があつた。その裏面には擴張進展した日本地圖が刻されてゐたが、これは云ふまでもなく翁の先蹤に倣つたものである。

翁は菅公崇拜の人で天滿宮へ種々奉納してゐる事蹟は前述の如くであるが、翁の逸事に人の頤を解く一笑話がある。翁は大阪にゐた頃、天神講を自宅に催して知人を招請した。天神崇拜の翁の事だから多分秘藏の菅公像を披露するであらうと、皆〳〵袴着用で出かけると、如何さま床に一幅が掲げてあつて、それが白絹で掩はれてゐた。一同は端坐して開帳を待つてゐると、翁はシカツメらしく挨拶をした後、恭しく白絹を外すと、現はれ出たのは天滿宮の聖像とは似もつかぬ、一枚の番付を幅に仕立たものであつた。一同は呆れてよく見ると大阪の私妓の番付であつたので、一同はガフンと云ふた。大阪では私娼を天神と云ふたので、翁は此の惡戲をやつ

たのだ。翁は斯の如く時に諧謔を弄する人であつたと思へる。翁に馬角齋と云ふ戯號のあるのも翁のユモアの閃きで、馬喰町の角に住した時の號であらう。翁は蝦夷探撿を始め長く旅行を事としたに拘らず案外私財が豐かであつたらしく、自著を出版したり、一疊敷を建築したり、種々の骨董を集めたり、古金銀貨などをも蒐めた。前に陳べた奉納の大鏡は古金銀を賣却して造つたかに記臆してゐるが、近藤正齋は金銀圖錄を著したけれども、貨幣の實物は皆な諸家から借りたので、それを返却しないとかで物議もあつたが、翁は實物を苦心して蒐めて終にそれを不朽のものとして神社に納めた。翁のやり方はなか〳〵面白ろい。大概の趣味家は案があつても財囊の關係でそれを實現し得ないものであるのに、翁は案ずることを着々實にして自から娛んだ、そこに多くの趣味家の及ばない所があつた。

翁は役行者の流を吸んで修驗道の人であつたから、難行苦業に心膽を錬り、深く未拓の地に入り、山野を跋渉して野營の苦勞などは意に解さなかつた。日本の交通は多く修驗の山伏に開かれた歴史を有つてゐるが、翁は恐らく此方面で長く國家に貢獻した最後の修驗者であらう。蝦夷地の具體的に闡明を得たのは翁の力である。翁は傍ら露國の事情をも窮めた。翁には自から踏査して作つた北海道大地圖があり、安政六年に出版されてゐる。外に嘉永二年刊行の蝦夷大概圖もあり。此等は我國に於ける蝦夷地圖刊行の嚆矢であることを忘れてはならぬ。又他に樺太の大地圖もあるが、これは安政六年翁の自筆に係るもので、露國との領有問題の爲め遂に刊行されなかつたが、翁の探撿の功は頗る大なるものがある。

凡そ修驗道の行者は鐵の如き心膽を有すると共に、器用な才能を有するものが少なくない。不毛の地に起臥して自供自足するには自から萬端の事を處理せねばならぬから、自然諸藝に通じねばならぬ。翁が百藝に通じたのも此故であらう。翁の事蹟に就て語るべきものは、澤山あるが是等は翁の傳記に讓り、爰には趣味に關することのみを記臆を辿つて聊か記すに過ぎない。（昭和十二年二月五日稿）

## 賴三樹名詩

**詠清初諸子係明遺民者**

稜々逸氣欲凌雲。誰以輕疎罵此君。灞飲悲歌妓圍裏。一腔熱血燦爲文。

**辭世**

排雲欲手掃妖熒。失脚墜來江戸城。井底痴蛙過憂慮。天邊大月缺高明。身臨鼎鑊家無信。夢斬鯨鯢劍有聲。風雨多年苔石面。誰題日本古狂生。

道是の俗を伺ふて配えんと折角急いだが、稿の成
（これが思ふてもみるに、更に河井継之助が書き立ま
こと、ありうる道）と河井合点あらうこと。ここの外と
配本すべきも命の者拙が見出さんと。えいや早稲田拙が
ら生れんとなれば、帝大の源田氏流と云ふ文学士が
道是を学界の飯り、道是の基礎を考証
を施し、道是書志と名つけんとのこと、五百頁余
飯る者の多く、或る者は原から出さんとせば、版ハ出
来ざる者多く、或る者は校正に迷つて
るのを拉ひ来りて、スレタが宿を迷つて
とあり、自分の其の様子を知つて
を一説したが道是の紀念拙さん取しかるべしとのこと。

複原製

そんが早稲田拙が道是のつい生の千年成らざるべし
所を知る公平の趣があつて偶ありありとのことがあつたと自
分ならばいまだ知らず。

二月廿六日記

○雑話（改造）三月号に伊集院齊の小説「兵兒文象」と
云ふが載つてゐる。事山陽の薩摩に関してあるから一
度目を通したが、実に薩摩を作げる山陽を気の毒の
思ひる所がある。薩摩の人と女房さとをつくれこともあり、
その著者の姓から推すと薩摩の人であるらしいが、読
んで見ても格別書いることもないのに、如何さま薩
摩びけあつて、双伝寺件が山陽滞薩中二件もあつて、
先ず俗人に歌妓の山陽が情交を使人に小説お春の
形もとつてゐるが、山陽の性格ハ少しも守拙してゐない。

# 吉藏のアレを斬った
# 牛刀は三條の産
## 相塲工場の銘「長義」が證據

日本刀鑑のヂヤアナリズムを綺色の昂奮に叩きつけた例の「お定事件」中の要めの堀尾久の愛用「短刀」での大荒ごとに使用したといふ牛刀（肉切り庖丁）の產地が何と金物どころは三條市の產物であつた事が今回判然として街の話題を賑はせてゐる三條市田島町の相塲長一郎さん所有工場へ二十二日某氏が工場の參觀に越くと最後の仕上げ檢査室に山と積んだ兩刃の牛刀が置かれてあつた、工場長はこれを手にとつてニヤ〳〵しながらこの庖丁の「銘」を見て下さいといふので見ると「長義」と刻まれてある、どうしたのかと聞いて見たら「これがその例のお定事件で吉藏のアレを切り落としたものと同一製品で實はあの凶器も「長義」とあり私の工場で作つたものでした」と說明された某氏はおもむろに一本の牛刀を手にとつて見たが何だか變な氣持ちがしたさうだ、三條市における唯一の產業的威力を誇つてゐる同工場の製品が「お定」によつて使用されたのかと思つたらこの男性の脅威的「長義」の牛刀が相當グロに感じられたのである、同工場でも「あれが私のところの製品だつたには驚きました、當時直ちにその筋から照會がありましたつけ」と語つてゐる、全くいやな因緣ではあるが三條金物が再び第二のお定事件には使用されないやうにと少くとも越後の刑事は祈らなければならないだらう（寫眞はお定）

ヨシナことが郷土の誇りとして出て来るぞ一美！！
三條產の牛刀の切れ味はお定を極つて試驗
濟とられ、おくすり丈工
場でい之れを立條の利用
まゝや丈

榛原製

陽が無限を賞讃して
あるのだから、その走
ないまれ梅を
○無限の愛 梅食を
軍中、必ず報業中の「梅」の材料
かセ文人墨客の梅を
帳と書きはじめた
も相當のあるだらう

梅園 梅軒 梅人 梅溪 梅仙
梅逸 梅風 梅外 梅痴
梅所 古梅 梅岩 梅巴 梅梅
友梅 梅國 梅屋 梅村 梅莊 梅隱

## 梅雨　梅嶋　梅字　梅潭

一行の年中で山崎氏が一番高齢であり、梅士と長谷川が如是閑がお亀
人で世話してゐた。北斗人の其書生は代直(?)の奴婢を
雇ひ其家を居た関係がある。自分は試みに百人の年
齢を問ふて見た、一寸見る長谷川の歌舞伎は白い
どうしても其年齢の山崎の上のやうな見へる。山崎を
年の白髪全く若く、身丈の低い雪白の髪が歌舞伎
風いので、成い山崎の方が若いと思はれる。山崎の方
が大分年が老つて居る。川の沢田可愛おばつ
ちやんで、焼芋を買ふ役目(?)ばかりであつた。今いる人が
遅い老人ばかりと一緒に笑ひた。
年齢の話から大隈侯爵が存命であれば、こゝに百歳

榛原製

で居ると云ふ話が出て、高田早苗氏は其の頃大
隈侯と同年と思はれ、京都の舞踊の師匠
片山春は本年百歳で、まだ豊鶴してゐると云
ふ。春子は全く亀の如く白髪の婆さんで二十二
三の未亡人であるが、美人であるとは思はれない。
山崎との話沢、自分の若き頃の記憶に大酒豪があつた
自分の書生時代、北人と墨江を屋根船を浮べ妓と酒盛
を載せた豪奢の遊びを自分と自分が招いた。
永井荷風は老の催しであつた。
自分の部下の窮屈を嫌ひ、多の酔が回つてゐた
のに、屋根の上を攀ぢ上つたが転がると思ふ(全)端

サンゴリあるを見うけた。水泳の心得のない人今年花いことで
あつたが幸れは[illegible]救いんん。其[illegible]時洋服を着け外
套も被つてゐたと記憶まるが濡れ鼠とまつたが、まる白
分を保護して相乗りの伝で小石川大和所の宅まで送
つてくれたが、高田馬場の高田家に着きビレヨ
濡れ[illegible]ちろ、高田君七五郎と[illegible]のまぎ浴を吹つけと
云ふに世平洗浴呉れが高田はあの時の困つたと云
ふ。

日本ラリンピック大会を[illegible]話を出た。早稲田の歌[illegible]
のグランド(陸海軍の使ふこと供まると田中信吉に話つた。アノ
グラウンドは四年使ふるので今の立派なスポーツ場をこ
ゐる自分のまだ見た長くない。大会でアノ位大きなグ

複写製本

ラウンドを育つてゐること思ふと隔世である。自分
は此[illegible]をこまかいことを、ラリンピックの大会で未知
の外人が手取り早く、日本を紹介する一活いデバー
トを作る、偽らざる日本あるのまくの地を陸軍の任務
の徴まることを云ふが、田中の[illegible]世界中のデパ
ートの日本の[illegible]の[illegible]とふれ。[illegible]
外国でいう丈四のよう一式が出てゐるときいが、日本の[illegible]
でいう外四のよう整山あるとあるを日本国[illegible]のが[illegible]
七七分も占めてゐると云ふ[illegible]、日試である。
田中伯爵の[illegible]大の[illegible]就き[illegible]
二年をかくした。一は[illegible]永久の土地を[illegible]
ることをうつたことである。[illegible]の地位

きで九千坪とふ廣さい宅地があるの者共が迫を廣ク
り行くなれ、この地が是迄あり、坪田六十三円ばかりで
買ふことゝなりたるが、六十三筆の田の價ひあり、四百
坪の仕拂の成業が、あることゝなれば、あの地に五百人の風俗のある事なれども
つゐにかなはい無いと思へば。
もう一つの事実は、最近名川合金坑主が、早大く来て拾ひ
九ことに、早大の機械科はうんと一層産きを為する相
違ないと感じた。此人は日本の四霊とも云へべき大切な
人で、駿河の日本の何を為に此人に及ぶ容易ならざる関
係があることなのに、最早やスチーム大切な時いるを
と思ふて、今回金坑代と此人が立世来

複原製

界を拓き、此人のなすところ、いくらか金を拾ひ出すこと
二萬円の利益いくらもあるの。この人が早大に拾ひ来たれば
身丸ごと流出したあるとこゝのい、真に福音である。
四年に山崎博士が早大に洋行させたこの幾人あるこの
ところの人を、開拓に出来る六十人に近ひあるこ
六七人洋行生があるとこゝ、一年二三度を出して、毎年一筆四百円宛洋行
費を出したとしても、この六十人の筆四百出すに勘定すると
私立学の物ゝ、その恨が利くの。
学者共が海外に迫く連陽の地に、採金を為稼するのに
出来の成績を学ぶと何の為に結果からうと、不仕の為
め、数年七百生七欠産が多いと云ふ。世の大学も今

の土地を度外視して移轉を計畫したるが恐らく、家族不安と動揺とを生ずべく、殊に一人の地を早稲田に求めんとせば、早大も多の喜を嘗めたこともあつたが、今度おれの屋敷を買ひたいのだ、ハウキリ女大と名のいつたらう、女大も計畫が一層困難に陥つたらしい。

田中と異論中、早中の事も及ぶに、自分も早中の關係を聞いたのだが、時々仲裁の生ずるに困つたのであつた。早大の圖書館を設けることに決したことは、そうすれば、自分の方でも大いに力を盡すことだ、そうすれば、中小時代に早中の仲裁に早大の誠意を表

樣原製

する譯の世間にいあんを早大と附屬とすれば、別物立のものと思つてもあるまへの。自分の方でも困るとこのれ。自分の方でも早大の係せるを何人の故障かあるとも云はず、校友中異議者が出ずとも云はれがとも云はず、校友中同窓会とすれば法律の規定が絡み出して、面白くない。法律の規定が絡み出して、面白くないあるとの校が校史の時手をつけることが何分にも困ることだ。あんの律に全く教育を毒するものとあつても法律に全く教育を毒するものと自分の話しに。

徒後の汽車中、太のやうな雜談で時の移るを知らず、退席するとすぐ渦巻が、背面の方に寄く、展墓の際に乗人と七〇五つに分るるが、未二人の心を一の設備に苦慮あるを著感する。

今時之文化ハ国ハ何の家の座らるるか、いつの間
にか二十人の為を答うる大は麦が出来るを見て北俗の料
理も酒も無論不似合と銭、自分の腹をえるなく志き
りの飲る且つ珍らしく腰部を抜いれば三月一日
元

○今夜の自分撥拍の放送い近所放送局と一曲一回
として創めれ随筆放送ぶ時間が十五分と限られ
るので甚だやりまくい、数を謎のやうな浜トール
が、実ハ北是こ書きのけば、石が奔流の仕方不流を押し
流さず、却つて上流を潮るとなる一寸不思議を思はれるが往
を見かねば、仕人もうるつく、私の工作を伝つて あつて、北の放送
の眼目い、来を人事を尚てハめて、聊か世を試み

とするのである。随つて前の項が聴者の理解を
博さねばならんが、脱稿を筆をすると大略左のごと
しである。

五月三日記

以上のことを政治上社会上
人事上、教育上等の人事をハメテ
から奔流と石れ解んるのハ急匂配の反
ハ石を撒散して下流を押し流さんとするのであるが、
其壓迫ハ石を動かし得ず、却つて逆に石を上流を
前進せしめるのハ正しく目的を正反対の結果を見る
ことと云ハねばならんが、新ることを実際の人事を性
々見ることである。誰れもが知る如く、壓迫さい反動が
起る、此の反動の力ハ壓迫の力と同じい

七直ちに起る場合とがあつて、直ちに起らぬ反動は鬱積の力が十倍も百倍も加わるから一旦起ると壓迫の力を逆かんし凌駕しも恐ろしいことである。事実の証する通りである。丸が凄まじい勢で奔流する実の有様は壮絶であるが、之に対しても藐然として動じない石は、聲もなく抵抗もしないから、人を感動を惹き起さうが、実は壓迫の力に屈服して動じない勝ちである。都合よく動く勝ち逆は奬力を制すると云ふのが北条である。丸は動き且つ著しく石は静かで、ジットしてゐて、却つて自らちく丸の工作で前進する。商中の例である。世の無抵抗と云ふ一種の戦法がある。これは見れ

複原製

愛壮快の感はあるが、実は尤も強い戦法である。抵抗しないものを相手にしやうから根氣較べで佐局軍配が無抵抗方を揚るのは云ふまでもなく、自分の友人営つて無抵抗を主義としてゐるがあつた。北人の大会社の手段であつたが、どんな難件でもよく治めた。論論はしないが氣根がの偉いので、めるる場合にはも相手を屈したこれは個人の例だが、印度のガンジーでも此戦法を用ひて、ゆるがぬ信念を以て、ドシドシ鎮圧する。こんな相手も困つてゐる。抵抗しないから、こんな氣根を表べて、都合動く勝ち逆は芽を制する実例とも云ふべきかも知れない。

世路風霜吾人傳了之境也世情
洽熟吾人思之性也地位世事頼
倒吾人修業之資也

佐野君賜
本書

―（秋田　佐野良太郎氏蔵）―

是れは刊本雅語に載する所余北の旅を喜ぶ
の雅語が関東研究会の機関雅語となり行くべき
予の寄稿を求めらるゝ「私の初めて入れし東京」と題
で書いて見た。明治八年　赤倉と海岸　北出羽の感想
であるが　まだ十五六の時　時代に珍らしいことゝ

複原製

七解んず、一素朴の子もしたあれば
ので、寫真のよう少ゝ、紙想とふるものもそうた
が、文化まず、江戸も偲ぶよりもあの北からも、えんを形う描
しなる過きこれる何れも紙紙の生ずる物ぬきを尾
を附する三十六、

二月十五日記

○唐金の碑は日本で最も早く知られる漢碑であるが、北
碑は明の萬曆に出土したので、千弐百年土中にあつたの
で、支那の金石家の中でも第一流の人々でもいまだ
ある。去れば宋の欧陽修の集古録趙明誠の金石録
も載せず、ずるもつても都穆の金薤琳琅も載せず
の今金石古文にも載せず。北碑の出土した時の一言
の廃物も無りしとゝ云はんとする。北碑の隷体で典雅遒美

を極め漢碑中の傑心と見らるゝものにして、我邦に於て初めて
寶刻せんとするの明和の頃に、伊勢の国に活版の名のあるに、
中川韓次郎が、撰刻して回如と称つるのを始めとし、天寿の刻版
所蔵者活版に収めたるもの、唐代弘暦の、この拓本の版を
極むと、日本にて早く北郷と花せしものゝ、浪華の木村
巽斎即芙蓉峯であると、書いたる尚ほ出土の時定型
なりしもの、今の数字を欠損し、首行の才二十八字与十九行の
第二十二字と、その間を斜断し、每行每字時頭脚を揃へ
ねるのは何故であらうか、かと、北の碑を見るに、ハすして殺
して日本の書家、細井廣沢、沢田東江等の分がある。尚ほ同
じく高、北碑出土の地の郡陽縣の義城で、今の西南府郡
陽郡の石りとす、北碑三者共に出しと刻刊部の書苑

複原製

化未断本の北碑を弼城碑として収めてある。就て見る
べし、

○或る人の座右の銘がおもしろい

一 錐の如く目的と貫ぬく人であるといい
一 磨の如く時勢と共に進歩する人であるといい
一 明鏡の如く物事を見通しの出来る人であるといい
一 名刀の如く事に臨んで果断の人であるといい
一 蝋燭の如く心身を尽して世を照す人であるといい
一 鏡の如く頭脳明晰で公正の人であるといい
一 扇の如く伸縮自在で未度がりの人であるといい
一 物指の如く大いに秤り得る人であるといい
一 金庫の如く深く秘して春然自若の人であるといい

○毎年利加のワシントンに成木して盛んな花を咲かしてゐる
桜の先年日本から寄附したものだが、尾崎咲平君が
東京市長時代に市一面を空襲されこわく宮殿や其
の卵が多く附着してゐるのを、其の番殿を恐れて、
米国に新命の時の日本公使の尾崎市長に対し氣の毒がつれがあ
りのまゝの事情を報告し、市長はたのもしく考へれ
とその由伝へ書かれてゐる
桜の木を誠却し、而うも包まれ、其の実を採る
のは、ワシントン氏に米の米国の伝統的やり方
である。決して心配するのは「桜の
と戯れたとあるが、えいのワシントンと桜木」の苦し洗し

標原製

を思ひ出してエヤレルのだ。あるが河に好譲がある。
公米国の茂つてゐるのは、二月目の宮殿、二月目
は前面に微り、考る務和茂の清書し如何の桜の実
を採養し、苗を作つて苗を、徴兵は今長崎に無
事に採用されたと号米国ら法つてゐる。
○林首相が閣員を拡色しても第一の侯補とするとあれば
思儀を何の如き誠良しん才二侯補をヤット掃へて入閣
せしめたこゝが中も西下と四五を数へるので、人い事
二侯補内閣とする口を言ふてゐる。その原因は殺命
内閣と言ふとくこつての事が、猛宣の奥
が漸やく改まりつゝあるやうな思なれ、ぶいこと、思
ふ。

○宇垣一成の流産内閣は国民が盛んな同情を寄せたのも当然である。代の比較的花相が狀況を証明する。共に間接に軍部に対する国民の感情の表現である。流石模倣の軍部も国民の意向を看取して聊か態度の後退したようの趣が、その後の議会に現れた。

○予は日大槻磐渓先生の山陽記跋を読み無聊を慰む。山陽の小品文のものを試す、彼の人を揚ること先つ己の地歩を占むるの用手段也、之れを自ら人を絶つ人を絶つ人を絶対する。○其手段巧妙にして敢て人を誇ったるるが如く、こん度山陽の文の如き無らしらる所と云へべし、左の録する所一例也

跋米庵梁志論

米庵不宜書北論、書北論者、唯余為宜、余雖無良田廬宅、家豚鶩犬、不死須溝池、環匝也、面東山、不背山也、淑戮平林、濯流追涼、皆余所有、米庵所無、余有酒肉、米庵不能飲、則陳酒肴、亨豚釣鯉、唯用飲於人而已、余徒無耳、則米庵終宜書北也

磐渓八之丸を評して「倘非米庵不可、知米庵定有不滿之色、為之一喙」と云へるあるのもおもしろい。

自分の山陽の書幅を好んで見る。其の詩書を愛ずるのみならず、其の人物に識見を加へたるが故の如き自意

[illegible]内の補筆に成る山水に題して云く

酒間予宮敷山の所作腦以上、如九華帳裡、見李夫人影乎、及君彝考素、相視之、笑冉々来、訣人也

又

君彝以余最短於字、人物故先為之、欲使余放意作山、而余更愛川、醜拙信常、蓋念奴永新先唱中一彩、後唱者、豈得不舌縮聲顫、

左の題詩も亦予の愛、誦すること不倦ここ

況迂作、自是有云、我畫、或以為蓴菜、或以為楊柳、今余宮鵝、人又不認為鵝、蓋夕陽既沒、蒼煙罩林、皆此時、豈際黙々何新明翼脛毛、

山陽遠の對句一集、賦を有す、其の評論、亦頗る少くべきものあるも、亦文を解くこと、後人の所作を評して遠なるを以て、其の四つ

遠山中、又自有輝、況以方筆畫、為高、吳以多筆、為勝、況方淚痕、如嗜茶人、吳酣嬉淋漓、如愛酒人、酒不嫌杯盤狼藉、而茶則貴煙斜、軟心平、臨二家畫法者、應作如是觀、

山陽往々旅中の事を叙す、掃宮甚妙、宛として畫をみるの思いあり、左の詩、淺の如き、其一例也

題寒江獨釣圖

僕西遊、下筑後、の時方臘月、琴術舟艦中、如癡凍蝿、欲出瓢酒、抵敵寒威、顧無下物、見枯蓴間、適分

信府、就乞小瓶数尾、舟子又為撥寒荊、相供数酌而
雪霰忽至、不暇架筆、急蔽筆於頭、而相酬酢也、
今観此図、於南洞相公之座、憶往事、已五夜夢矣、
因為相公乗之、如相公居則深篋之、則大輿言蓋也
知人間所思有如此矣、

山陽の木米と友とし多の陶器に題して、陶と詩と吟
へ、[illegible]る一文、余の愛誦の小品なり

## 題陶器後

紫窯以天色為様、其淡而腴可知矣、哥窯以下、大
抵所受古此、自宣徳成化、釉法益巧、以錯彩勝故
宋窯如詩之有陶靖節、明窯如唐廣李杜高岑、
明末至清、以青花一種為工者、則宋詩也、紫窯粹

榛原製

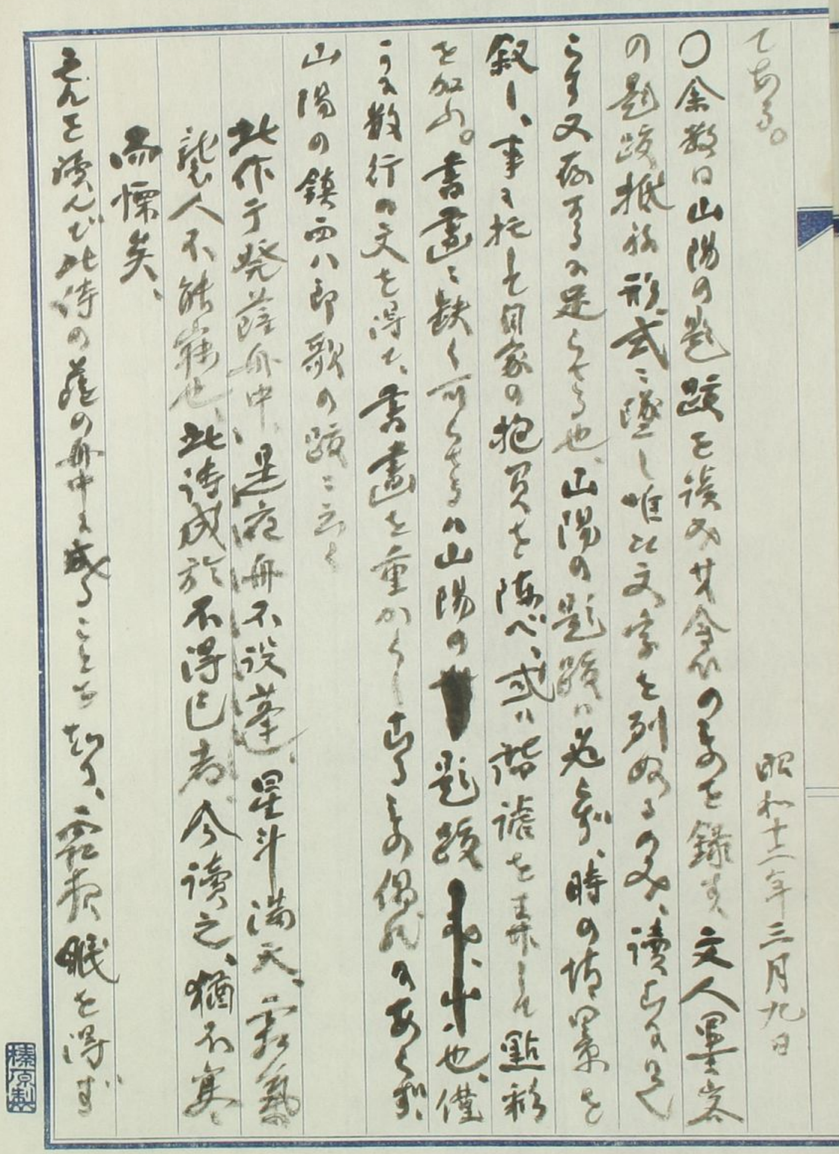
月費如瓊瑤、亦猶斧陶詩五家、輒真氣可玩、非
後人所能擬也

山陽の風流の性淡の如く、[illegible]敢て高
構を会とせず、往々目前の事、[illegible]文を為す、却
つて[illegible]如と元亨の、其文海[illegible]抱[illegible]故の如く、小石
元瑞の為情、[illegible]、[illegible]の如く、磐谷の朱拠こそ
山陽朱屋二先生と齊後情境如見

陳曾則書画共草、所如[illegible]録、而[illegible]
二行細書、[illegible]如[illegible]、石如[illegible]録、而[illegible]
為小石元瑞所[illegible]、石墨[illegible]秀[illegible]、欲[illegible]、北[illegible]
朱屋尤注目焉、[illegible]朱屋、辰観日社書畫
不可、朱屋、[illegible]我皆而起。
[illegible]機奪社、余掉[illegible]

○還暦宣村と自分の交がなくなる。自分が還暦の年の主業時代まで宣村はまだ在社してゐたことを思ふが、後ろの自分が所謂詩をあれば宣村を訪ねることがあつても、際を送られた長文の出簡、美しい護摩の巻紙に認めて、しやし浮山の文い今出版者としてある。自分が出よ」あるとて、北に宣村の素懐たる住してゐれば、ものみなば、有為がてきく酒を飲みかいて拝合が毎つた。ある時下村を訪の北の方、茅葺山の手紙を出礼と書うれることがある、女さま紙を山湯の悪口が書いてあつて浮雅へ珍簡である。つ此、自分が宣村移居の移居の長崎の華山の馬琴の無でいる者を送り者にたのの、赤成下で宣村のの北に居るのである。丹馬琴の病本数金郵が早大の図書館に出来た

元へ此の北に自分の病本時代であつた。宣村の還暦に郵送の世情山田伯爵から出来たことがあつたが持ち出したのを一まつ此、今年雑誌「海記」を山田の書いたものきざうを時元此のを渡が見て、宣村が勤王の家系の尾張であることを祖先を慈願大師があることを知つたのの大地震と母の手を抱えんにあつた此、母の尾張の時まで投げ出したのを幸ひに助つたと云ふことを知つた。彼女は庶子で兄の典三郎と云あがあり、兄があるく死んだのを、父加藤を博人にのを特の其名を宣村を命じたのであるそこで、彼の記録の高饒の人があるく三井と白木屋の一家を取り三木屋と云ふ名で最業を出つたのは自分の高尚であやこうれのと云ふ左を嫁に抜きまりを求めて、下は七北冊子の終りを附し



昭和十二年三月九日

# 竹のや主人饗庭篁村（上）

山田清作

竹のやは自分の身の上について語らなかつたので、親戚の誰に聞いても、委しいことは知つてゐません。何故そんなに語らなかつたかといふと、それにはいろ〳〵家庭の事情があつたからです。

竹のやは男の子としては五番目、姉を加へて六番目に生れた末子で、然も庶子であつた。長兄與平が早死し、その次の兄の與三郎も早死して、三番目の兄が家督を嗣いだのです。この人のことに就ては避けて何事も云ひませんでしたが、聞く所によると、讀み書きは毛蟲よりも嫌ひで、若いうちは大の放蕩者、後には拜金宗の凝り塊りであつたから、兄弟の間はあまり圓滿ではなかつた。竹のやは此の兄を家名を汚す者と考へ、又自分がかういふ兄を持つてゐることを深く遺憾として、誰にも親族關係を云はなかつたらしいのです。

饗庭家の祖先は、系圖によると世々近江國木津庄（高島郡）に住み、天台宗の高僧慈眼大師は此の一族から出たとある。後醍醐天皇の御代に木津庄が木津、饗庭の二つに分れた時、木津流家の次男重頼が初めて饗庭を姓とし、新田義貞に仕へて陪臣ながら勤王に終始しました。事敗れて一族分散しましたが、後裔は故郷に歸つて醫を業とし、宗家は代々饗庭榮庵と稱へ、明治十五六年頃まで續いて居ました。以上は竹のやが亡くなる前年にふと口がほぐれて私に話してくれたものですが、故人は固く家系を信ず、それを誇りとし、名を汚すことを何よりも恥辱と考へて居ました。佛教信者でも何でもないのに、上野の凋大師前を通る時は必ず佇立脱帽して慈眼大師に敬意を表し、子供を叱る時にも口數多く利かずに、たゞ「恥を知れ」と云ひました。

竹のやが續けた直話を私の弱い記憶によつて辿りますと、父は與之吉と云つて、文化年間に江州から江戸へ出て來た。當時は三井と白木屋とが盛大な呉服屋だつたので、それにあやかりたい野心から兩方の一字を取つて三木屋と稱へ、日本橋本町で呉服商を開業しました。一方では例の元三大師を云ひ立にして、東叡山の呉服御用な

どもつとめてゐました。一代にどれだけ儲けたものか知りませんが相當な財産が出來たのでせう。維新後下谷龍泉寺町に松前侯の下屋敷があつたのを、一手に買受けて、そこへ移つて質屋をはじめた。屋號はやはり三木屋、吉原と滿一つの土地ですから、男手代では間違を生じ易いといふので女店員ばかり使つてゐたさうです。

この人は別に風間があつたとも思へませんが、自然と趣味を解したと見えて、買受けた下屋敷には築山、泉水は勿論、奇石、名木、珍草などいろ〳〵あつたのをすべてそのまゝにして樂んで居たらしいのです。竹のやの珍草癖といふのも、子供の時からの目樣見眞似でさほどのものでなかつたのでしたが、日清役後の事、田ウコギに凝つて、百姓の櫛ぢいやに春をかつがせて田圃へ採集に出かけ、裏庭一ぱいに植ゑて忽ち新聞で評判を立てられ、此の藥草の見本を是非と望む市内遠國の人々へ無料で郵送するために、家内總がかりで荷作りしたり、野菊山菊のふらん限りの種類を庭へ集めてから意外に言囃されました。さて、父の晩年は生活に何の不自由もなく、毎日晩酌に三品宛、京町の會席金子から料理を取寄せ、竹のやはいつもその使番ださうです。

壯年時代の饗庭篁村

前申した通り、竹のやは庶子でしたから、幾歳頃父のところへ引取られたか、その點はついに閑漫しましたが、生れたのは雜司谷の實母の宅で、安政二年八月十五日、名月の晩の誕生でした。その時父が六十歳、母は二十歳、よく世間では老人の子は弱いなんていふが、私を見なさい、藥なんぞ飲んだことが無いよ、とよく自慢してゐました。

竹のやは後年まで、十五夜の名月に會ふと、感慨深げにそこらを散歩したもので、私も戸山ヶ原へ引張り出され、水溜りへ踏込んで弱つたことがあります。併し月を見ても花を眺めても母の事を思出すと涙ぐみました。それもさうでせう。八月十五日に生れて、十月二日が安政の大地震、母は梁に潰されてあへない最期を遂げたが、抱いてゐた赤ン坊は芥溜の側へ投出して助かつた。竹のやはその爲に世の中に出たわけなのですから……。それから幾年か里子にやられた、その家が竹村といふので、篁村の號は養育の恩を忘れぬために附けたのだと云ひました。

そこで何故香ばしくない兄が相續したかと云ひますと、父は前後二人の正妻に子が無かつたので、子種を取る爲だとか云つて妾を置いたが、妙な流儀で子を一人產むと直ぐ暇をやつた。だから六人兄弟が六人とも皆腹が違ふのです。長男の與平といふ人は早く亡くなつた、次は、二男であるのに與三郎といふ。なか〳〵の英才で、學問好きで、町人ながら引きを求めて昌平黌へ通つた。親父も大變之を愛して將來家を嗣がせようと思つてゐたのですが、本人は商賣を嫌つて、他家へ養子に行つたとか云ひます。これも早死をした。五男の竹のやに又與三郎とつけたのは、深くこの二男の死を惜み、末子を天才にあやからせるやうにといふことだつたのです。三番目が家督を嗣いで與三吉、四男(逸名)は非常な美男で、箱根屋といふ質屋へ奉公中に主人の娘に惚れられて夫婦になつたが、美貌に祟られて、藝者だの矢場女だのと身を持崩して命を縮めてしまつた。跡繼になつた與三吉も箱根屋へ見習奉公が振出しですが、辛抱出來ずに道樂者になり、臺屋か何かへ入婿になつてゐた。そのうちに父が亡くなり、家督相續の問題になつて、親類などは美男の四男がまだ達者だつたので、それに目星をつけたのですが、父の正妻が非常に賢くて正しい人で、兄弟の順序を重んずべきことを强硬に主張して、遂に臺屋から三男を呼戻した。三木屋の主人になつても與三吉といふ人の頭には金以外に何も無い、竹のやは本を讀んでゐるのを見つかると、よほど虐待されたものださうです。それを例の四男と、只一人の姉が蔭になつり日向になりして庇つてくれたが、姉は間もなく嫁に行つてしまふ。四男は早死する。どうにも家にゐられなくなつたのでせう、本材木町の箱根屋へ連れて行かれました。

この家は三木屋とは親戚以上に懇意だつたので、親同士の間に、男の兒を仕込むのは御互に交換してやらうぢやないか、といふ約束があつた、ですからその以前の長男二男を除いて次の三人は皆こゝへ奉公に行つてゐます。竹のやが十一歳の時に、箱根屋の主人がやつて來てもうちへ來たらよからうと云つたので、義理の母親に送られて行きました。これから十五歳までの五年間が、修養時代でもあり、又最も愉快な生活でもあつた。まア今日の小學と中學はこゝで修めたやうなわけです。

元來親々の約束で預るのだから、當前の小僧とは待遇が違ふ。商賣用の使は一切やらされず、仕事といふのが主人の稽古事の御供だつたさうです。その頃は質屋もなか〳〵繁昌した、中でも箱根屋の店は目貫の日本橋であり、又「オカケヤ」と云つて、大名や旗本の金を預つて運轉する業務を兼營してゐたので、儲かる儲らぬより、第一金が自由になつたのでせう。謠は山科瀧五郎、町人の癖に劍道は桃井先生の道場へ行く。小唄は疊屋の初代寅右衞門、俳諧は誰、茶の湯花道は誰といふ風に、第一流の師匠へ殆ど一日として稽古の無

い日はない。その御供だから樂なもので、月謝いらずに陽穀古が出來たわけです。後年酒に醉ふと、よく我流交りながら美音朗々と謠や一中節を謠じてやつてゐたのも、誰にも敎はらない俳句や川柳を捻つたのも、この時の聞きおぼえなのです。桃井の御供が子供心には一番嬉しかつたといひます。碁も子供としては強くふつたが、これは母親に叱られてやめたと云つてゐました。

それに箱根屋はなか〳〵大きな構へで、二階の一部屋が貸本屋に貸してあつた。あの頃自身の頭よりも高い「高荷」を背負つて得意廻りをした貸本屋です。明いてゐる本はいつ何を出して讀んでもいゝ特權を與へられたので、讀むは〳〵小說でも隨筆でも片端から讀んだ。夜分など番頭さんに呼んで聞かせる。一册の聞かせ賃百文の約束で、一晩に水滸傳三册も讀んで番頭に頭を掻かせたこともあつたと、竹のやが度々話しました。さうして貰つた金は皆錦繪に入揚げた。少年竹のやは當時蔦出しの芳年や芳幾に氣乘薄で、錦繪といへば五渡亭國貞が第一の贔負、だん〳〵買ふうちに奉書摺とまで向上して來たが、それでも四十八文位のものだつたから、天保錢一枚あれば二組買へたわけです。子供の癖に國貞なぞをと云つて、繪草紙屋のかみさんに不思議がられたさうですが、これには仔細のあることで、龍泉寺町の家にゐた時分、女食客が居つた。埼玉あたりの產れで、御殿奉公を勤め上げ、田舍へ歸るのも厭さに何かの緣故を便つて、饗庭の家へころがり込んでゐた。廣い家だから、食客の一人位何の事も無かつたのでせう。その人が長持に一杯錦繪を持つてゐて、それが悉く芝居繪だつた。その繪を端から出しては說明してくれたので、これが芝居好きになり、錦繪愛好者になる種を蒔いたのださうです。戲作好きになり、戲作者になる種は、箱根屋の二階の貸本に胚胎したわけです。

竹のやは十五歲の時にうちへ歸つたが、その後箱根屋もすつかり家運が傾いて、やがてあべこべにそこの主人が、龍泉寺町の家へ寄食した程の末路でした。十五歲から十九歲までの履歷は、全く茫漠としてわかりませんが、兄にはいぢめられる、獨立は出來ず、最も苦しんだ時代だらうと思ひます。その間の事でせう、龍泉寺町の家では、人家の乏しいあの邊が物騷で仕方が無いから、用心の爲に周圍へ貸長家を建てた。それから意外に家賃が上るので、黃金本位の兄が、これは貸家に限ると意氣込んで、築山を崩し、池を埋め、木を切倒してどし〳〵貸家を殖して行つた。竹のやも庭園破壞工事の手傳をしたことがあるさうです。それを考へ出すと冷汗が流れると申しました。庭に何かの老樹があつて、あれだけは無事に置くだらうと或る好事家が心配したが、やはり伐つて薪にしてしまつたといふ位、言語道斷の殺風景であつた。この三木屋長屋と稱するものが明治四十年頃には千五百軒、後には二千軒になつたとか聞いてゐます。細民街のトンネル長屋で、これを目がけの家賃で貸す、每晩手代が弓張提灯をつけて家賃取立に歩く、といふ慣例でしたが、さういふ長屋に不似合な事には長屋と長屋の間の道には、立派な御影石が敷き詰めてある。これはもと松前侯の下屋敷に澤山使つてあつた石を惜氣もなく敷石にしたものです。一番奥の或長屋に大した沓脫石さへ拔いてあつたのを私も見ました。

不遇の十五歲から十九歲までの間は、どこで何をして居つたか、私は直接に耳にして居りませんが、傳聞したところでは、一度眞言宗の寺へ入り、お寺で庭を掃く時にも、懷から本を離さず、ひまさへあれば讀んで人を驚嘆させたと云ひますが、竟に剃髮するまでには至らなかつたさうです。それから淺草の並木活版所の職工になつた事もあり、吾妻橋の袂へ行つて街燈の明りで本を讀んでゐて、圖らず身投女を助けた、といふ小說めいた話もありますが、直話でないから保證は出來ません。

この活版所の經驗によるものかと推測しますが、十九歲の時讀賣新聞の校正係に採用されて月給二圓五十錢、非常な勉强振と才氣とを認められて、增給に續いて編輯局へ引上げられた。さうして『むら竹』に收めたやうな短篇を、紙上に載せて好評を博したのです。

父の存命中は末子の竹のやを相當に可愛がり行末を案じたものと見えて、臨終に遺言として、近所の京町二丁目で可なり廣い地面を與へてあつた。それをばこんなものは邪魔だからと云つて無條件で兄へ返してしまつた。こゝらが竹のやの流です。ずつと後年になつて、赤城下に住んでゐた頃、兄がこの事を思出したものか、或は老境に入つて氣が弱つた爲ですか、公債でたしか二萬圓屆けて來ましたが、こんなに貰つちや多過ると云つて、例の流儀に半分返してしまひ、半分の中から又幾千圓だか兄の總領に借貸ひされたこともあります。

讀賣に拾はれてから、はじめは龍泉寺町から通つてゐましたが、やがて南傳馬町の風月堂の近所の路地の中に、兄から出して貰つた百圓で家を買つた。この時分の事ですから地面附ではないかと思ひます。小ぢんまりした家だつたさうですが、引越して見ると、床の間に掛物が掛けてある。それが七言絕句で、世の中がつく〳〵厭になつたから自殺する、といふ意味の詩なんださうです。そこでくる〳〵と卷いてしまつて置いて、家を買つた時に、又もとの通り掛けて置いた。こゝらも大分竹のや式です。

この傳馬町に住んでゐる間は、風月堂で萬事面倒を見てくれた。それは父の正妻が、本町の鳥飼（菓子屋）から嫁に來た人なので、鳥飼と風月とはごく親しい間柄でしたから、三木屋の息子さんかといふところもあり、風月の主人が文學者贔負でもあつたりして、殊に世話してくれたのださうです。

讀賣時代は朝日時代のやうに、殆ど社へ顏を出さぬといふやうなことはなく、雪が降らうと、嵐があらうと必ず出勤する。大雪の朝一番乘を心がけて出社して見ると、先着があつて、がつかりしたと云ひます。その上に本も讀めば、本も買ふし、寫し物なんぞもよくした。今のやうに本が自由に買へぬ時分だから、幸若の「高だち」の全文や、西鶴の妙所なども自分で寫してゐます。

讀賣をやめて朝日へ入るやうになつたのは、明治二十二年のやうですが、これは朝日へ口が出來てやめたのではない、何か社と衝突

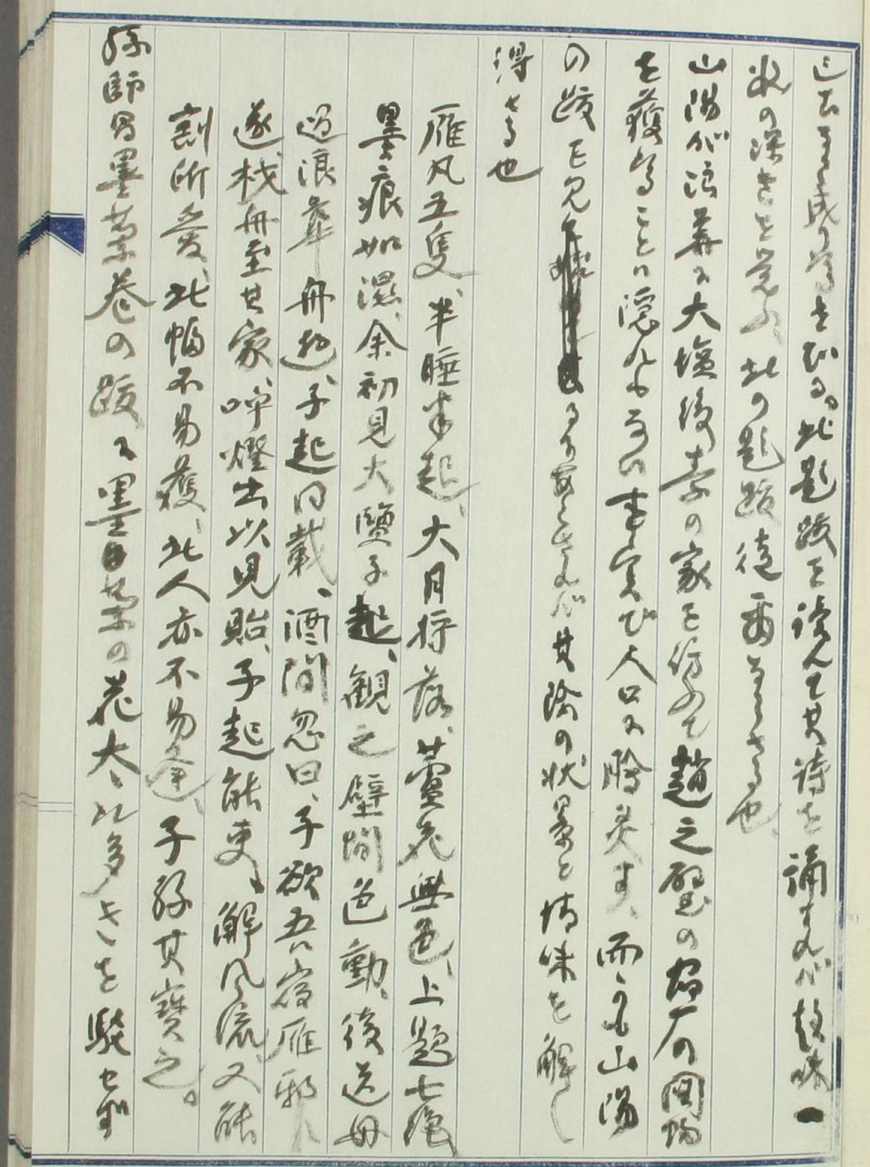
昭和十一年三月九日

したので、一二年は浪々のつもりといふことを書いた坪内博士宛の手紙が殘つてゐます。主筆の高田半峰先生が何とか慰留するつもりだつたらしく手紙をよこされた。ところが、その頃の高田さんの字は甚だ行儀が悪いもので、封筒へいきなり根岸何々と書かれたのが崩れ過ぎたり離れたりで、郵便局が「松山町」と讀んだ爲、伊豫の松山へ廻されてしまつて、十日もおくれて屆いた。高田さんの方では、返事もよこさぬ、不都合な男だ、といふやうなことで、遂に讀賣はやめてしまつたのです。

この邊の事情はよくわかりませんが、幸に直ぐ朝日に招かれて、死ぬまでずつと籍を置いたのです。此の社では樂になり過ぎて、本も讀まず本も買はず、後には寧ろ賣る方になつてしまつた。出ぶしやうになつて交際範圍も狹くなつた。

竹のやが他の文學者と違ふことは、非常に早起だつたことでせう酒飲といふものは、とかくだらしないものですが、竹のやはあれほど酒が好きだつたに拘らず、決して夜更しをしない。朝は鴉と一緒にといふが、ともすれば鴉より早く起る位でした。筆を持つのは朝起きて直ぐ、大抵午前中に片付けました。

酒の勢ひで書くなんていふことは決して無かつた。それに獨學ではありますけれども、昔の儒教風の感化を受けてゐたから、戯作者としては四角な文字のものも多く讀んでゐました。これは馬琴かぶれではない、馬琴はさほど好きでなかつたのです。支那の小說類も讀み――横文字は眞暗でしたが、自分ではどうかして西洋文學の味を知りたい熱望を持つて居つた。飲友達に巖野德三郎（依綠軒主人）といふ理學士があつて、この人から西洋小說を譯して貰つては筆記してゐる。原稿紙へ筆記したものが殘つてゐましたが、單なる梗概ではなく、大變委しい譯文です。何か竹のやの名で出た翻譯があるさうですが、これは無論巖野さんに讀んで貰つたので、翻譯といふより翻案の方でせう。（つゞく）



却て佛護し、多く花を着くるを、能人の目標格の如くなる
処を見るに俗を免れずと云ふ、北宋北卷一無彩色畫出
でて高からざる跋の已に一のくさぐさ所以、
北卷畫蘭、著花太多、夫畫蘭多花、猶美人之多簪珥多
簪珥則易俗、然亦其全身標格如此耳、多著花而不
覺俗、是以知其畫品矣、發問復月、在尾張旅寓樹
窓明燈、展北海湖、以書金釵紅裙之飲、
山陽筑前に河陶庵碑を見て欲して遂に見さりしこと
を恨む、北宋實の跋を見て人心山陽の遠きを知るとして條ハくさる
ものなり、山陽が其の楊本の日跋に云く
余西遊九回、甚欲一見所謂河陶庵碑者、踰赤關
右折赴筑、登壺坡坡、拊洞時見北海後史、至書柳驛

評訪河之士人、則已過矣、碑蓋在河濱蕭寺中、近路
不過十里、轎夫憚勞為不知者以告也、今歸西大坂見北
楊本於武藤子玉許、一展帳然、遂書之卷末、使後人
脚跟及筑者勿踏無誤也、
北跋先知、筑行記を後にかかし、北之跋として後ちくく又紀
行として後もへき歟、
北跋中畫跋殊に雅し、而も山陽の書跋抵抗の色を
為、左の跋の如きハ文章、船中書き遣るとて
しるし甚に味あり、
昔人論畫、称有墨無墨、畫無無墨、主墨無墨、其別如
二米王吳主墨者也、而沈董沿其流、至楚慶台石谷以下皆
董沈、專積墨為畫、以見易為拙、故羣傚之、而為俗

黄石翁(平矣)今日尾路故人(船)送我、玄北冊、論及於此、
遂甚、時(浮)帆影半欲、羣山在亡、亦一幅少墨法也。
山陽の遺跡(浮)文章に喻へつるもの多し、八石の山水并に梅井の
跋は別ちなし
余嘗跋為(云)山水長巻云、譬如大文家、要有
其大開闔、如此等(樹林)則力者之也、而筆法回所
謂狐子撲兎亦用全力者、又以修史法例之、大
軸山水則叙大戰大事也、梅井傳各人也。
山陽の此石樹等々の跋、すべて文章家の長篇を
喻くと、詳悉前跋を敷衍を進むべし
作山水樹等、如文章家作長篇大文字、開闔起伏
轉折(衝)接、皆有脈理、其中精神聚結處如

橋原製

錦嚢囊(囊)、叡志眼光書法注于此、而首尾乃有筆
減墨、雲霞煙渺、不至全幅拍塞無間、游目處
則樹巻結事異、然氣力足以運之、不可語此
唯八石翁一人、如此巻、能用筆、如有粗細不倫者、二要
之其運用自在、脈絡貫通、視之他手、靈妙殊別
矣、
予跋筆類山陽、若其時、山陽歿、跋を閑却し、筆之ん
及ハず、今こ迫人ぶ之ん、を悔ム、山陽の跋筆、すべて之ハ否、
跋跋集則ち其跋筆也、當時之ん、を精考、是跋考
一冊を添へべかりし、

三月十日記

山陽の跋、刻本にも流布するもの門人加賀、紀玉槎文敬
輯錄嘉永三年出版のものあり、上下二巻、收もる所数十類則

まんとも、尚遠きものも甚だ多からん、山陰の墓碑、今尽く発掘あつて、中に佳なるものあらば、余書画を秘する毎に其の題識を採録し、陶庵叢稿山陰に収めらるべき若干あり、刻本を漏れたるものを輯めて續編を作り、而して、余が近頃の題跋内閣版等の舊稿を御覧て大概盤渓の朱批本也、盤渓一跋を補ふ左のごし

子成常題余西游草云、暫来奉托精花、今日又獲尋東山残花、偶吉原来、則已書花山之作、走筆塞責、前公書派忙似忙、如余真百忙裏書死也、然々

此等不可謂書、以補之

盤渓の朱書、此跋の逸し、なるこの美し、或書載

○近刊の日本国考、協会会行の雑誌三月号の

読書欄、余の陶庵、頼山陽政治論を推奨せり

左の語を掲ぐ、

三月十日記

# 隨筆賴山陽

市島春城著

此書は大正十四年初版を出し、當時洛陽の紙價を高からしめたもの、卷末に收錄された和田萬吉博士と内田魯庵氏の批評紹介は遺憾なく眞面目を傳へて居る。讀者は先づこの部分から這入るのが便宜であらう。

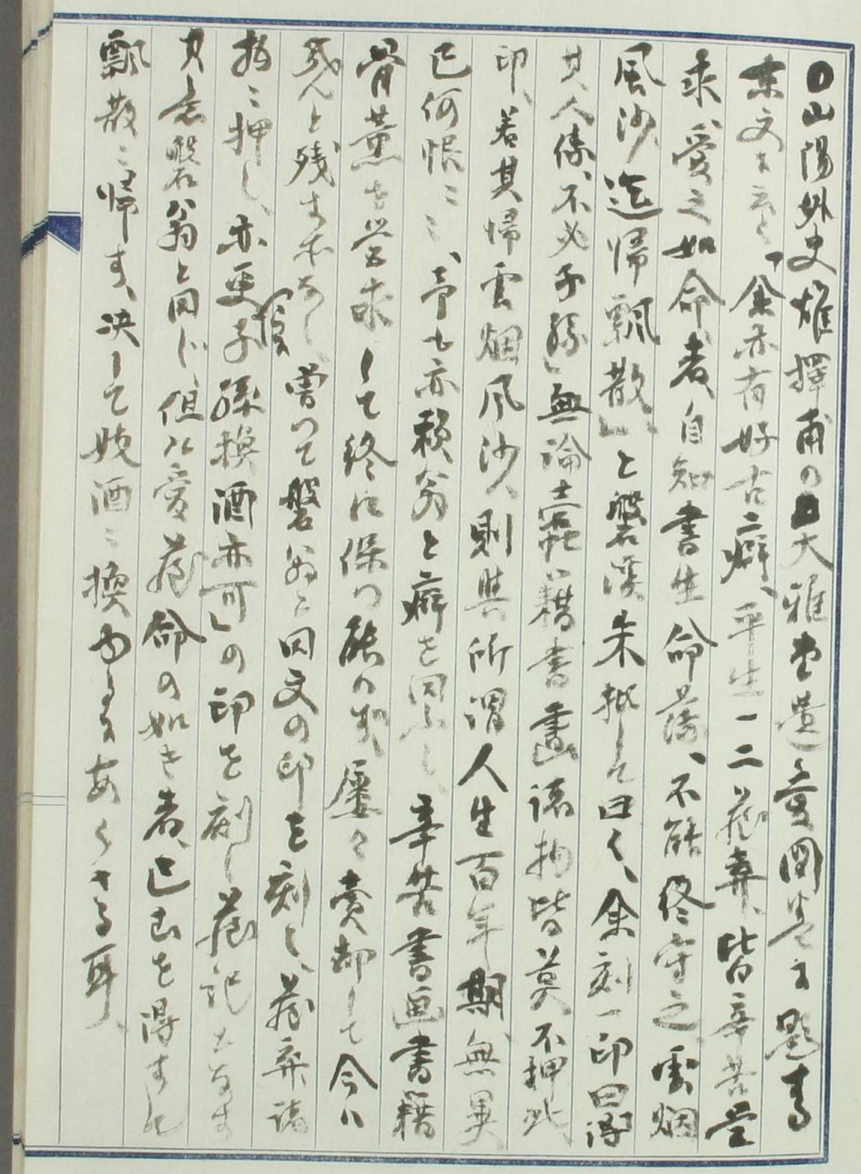
所謂功成り名遂げ、悠々自適、老を養つて居られる春城翁は近時、年に一・二冊宛の隨筆を讀書界に送つて居られるが、山陽研究に於ても亦依然その手を緩めては居られない。昭和二年第七版以後の渉獵を追加し三六版を改めて四六版とせられたのが本書である。標題下に記された「改訂決定版」の文字は翁の命名か否かは不明であるが、翁の山陽研究も一先づこれを以て完成したと見てよからう。翁の數多い隨筆中最も異彩あるものとして迎へられるのも偶然ではない。

山陽その人が現代人にどの程度に訴ふるかは疑問である。殊に青年學生の如きは日本外史を讀破する機會と興味を失つて居る。然し山陽はこの國の憂國史家として又愛國の詩人として永久に國民の誇りとしてよい人物の一人である。著者は山陽に對する褒貶の極端論を斥けて次の如く言ふて居る。

私は、山陽を以て最も國民に親しみのある先輩とするものであつて、山陽に買ふ可き處は常識があり、人間味があり、多趣味・多藝で、且つ頗る氣格の高い處にあると思ふ。從つて一概に之を崇拜することを非とすると共に、その若い頃の瑕瑾をいつまでも叫んで之を罪することを欲しない。私は、山陽を國民的性格を遺憾なく發揮した愉快なる文豪として大衆と共に親しみ、且つその人氣を長く續けたいと思ふ。

ど。著者の意圖はまた本書推薦者の意圖でもある。

（昭和一一、六、一九　杉並區高圓寺六ノ六五九　翰墨同好會　南有書院　四六判　六一八頁　三・〇〇）



○予過日書畫骨董雜誌の稿を送りて北海松浦武四郎の遺事一冊を錄して世に出す。其明石市大藏氏未知の人船舶送致せらるゝ一函を受け七月廿七日、武四郎が休石天滿宮碑前に碑を建つるつもりにて、幹旋を托し字畫簡の字を解しあり、其文意を考へて碑の東面を作り大阪出版へ出したるに、碑石の文字に「湖山の立つて、石標の表に「雲濤廿五年十五年」休石天滿宮碑前」湖山士明と愚書とあり、側面に二行書きて発起人市中松浦武四郎とあつて、現に此石標存在せるあり。武四郎が廿五年の書簡に「絵馬を奉献のつもりの送るあるが、以上の石標を廿五年の建と誤ること此の如き面白しと雖も、武四郎の執心想あるべし。寄せられし書簡は巻末の如く出す。

三月十日記

○予の旅家紙屋の冊子に竹岡門人の兩條あり京都のみに頃手を入れし一張の琴がある。其の銘に白鶴が竹の洞樹蔭に書をかき、山陽が贊をしてある。皆兩条の友であるの北僧の有名なる北僧が何者か琴を買いしものなり。人しいこと琴の所在が知れなくなりたるが、後年明治の岡井信之丞が冊子に好つたのを代金が充実したる岡井がどうして北琴を不持しあるかと云ふと、岡井の家が微禄したのが家什を賣立て比折信之丞が買れ去つたのである。多分冊吳が貸したるが先方なくなりたのである。信之丞が冊子の買つたのであるが、あらう。信之丞の冊子に存する琴の栖の寸尺を測つて見ると、全く合するのみ、是を冊子に貼りつけるのみ、北岡の番地の私の隣家なる青いとしことが出

るが、自分は丹呉の為め東京で上は箱を作つて寄せられたことがある。
実は國井家も丹呉家も昔は琴を弄し、丹呉家から琴
を借りも其後は他の國井も之に依り琴を譲りそれから傍へしそれ
ことも思はれる。越後では蒐集家の名琴を藏してゐる蒐集家
がある。自分の知る所でも以上丹呉の外に自分の同姓新潟の
旧家前の家に大雅堂蒹葭の琴があり、其の一連
大雅の美事な字が書かれてゐて、自分は樂器を解しないが
其の美事な見物を今も眼底に髣髴する。他の名琴は國
井伴之亟家に在つて何の名高いそれへ浦上玉堂の愛
琴もある。自分は其を見たことは無いが、近刊の南画鑑賞
浦上玉堂特輯號を見ると古川北華が書いた浦上玉
堂は玉堂琴と題する文中、此琴のことが委しく

榛原製

記されてある。

扨てこの「玉堂琴」は以前斯界に於て果して何所にあるかと、暗中模索の態であつた。「玉堂琴」と稱するものが可なり多くあつたが、皆僞物であつた。この本物は私が初めて世間に紹介したのであるが、この紹介によつて岡山その外の研究者から續々手簡を郵してこの私の紹介に疑惑を解いたと言つて來た。それはもうづうつと以前の昔である。

「玉堂琴」があるのは私の親戚の越後岩船郡保内村字羽ヶ榎村の素封家國井伴之亟氏の家寶になつてゐるのである。この國井家は越後屈指の素封家の上に、代々文學、書畫、茶、琴を好み、文人墨客を愛した家である。故に南畫を多く所藏する點に於て天下稀に見るものであらう。この國井家に「玉堂琴」があることは私が幼年の時から聞いてゐたのであるが、いつか觀たいと思つてゐた。それに所藏幅も觀たいと思つてゐた。

先年歸國した序に招かれるを好機に、國井家へ出かけて行つた。老主人が非常に悅んで自ら迎へて與れられた。午前九時頃から午後の六時頃まで畫を觀たけれどなかなか見盡されるものではない。心身共に疲れ切つて了つてもう觀る勇氣もないので「玉堂琴」を出して貰ふことを請ふた。遂に待ちに待つた「玉堂琴」が私の前に運ばれた。私はぢつと見入つた。一種高雅な氣が漲り渡つた。無論玉堂が構造を說明してゐる通りである。そして山陽が「一角を損した」と言ふ損した一角を漆につけてある。桐の二重箱の中に羽二重の袋がかけられてある。箱裏には秋琴が山水を畫き「嘉永癸丑年初冬寫爲必清主人(伴之亟氏の祖)秋琴方外翁」とかいてある。袋には雲泉の高弟石川侃齋が山水畫、卷菱湖が書を認めてある。實に尊い名琴たるを失はない。これに添ふて「覺書」が二通ある。

覺

一金四拾兩也
右は此度華琴御預り被下候に付代金慥に請取申候以
嘉永四辛亥冬十月二十五日　　會津浦上舍人印
羽ヶ榎
國井清之助殿

譲渡し一札の覺

一華琴　壹面
但有玉堂清韻名
此代金五拾兩也
但前金金四拾兩は元代金
金拾兩は此度請取分
右は拙者儀手元不如意に付去る亥年差出の琴一面貴殿に相渡し金四拾兩借置候外當又此度貴殿に頼入爲増金拾兩只今請取貴殿に譲渡申候實正に御座候依て永々貴殿御手に御所持被下度候然る上は拙者方子々孫々に迄彼にて故障之義申間敷候爲後日譲渡證文一札如件

嘉永六癸丑年十月　　會津浦上舍人印
羽ヶ榎
國井清之助殿

これによつて國井家の所藏の琴が「玉堂琴」たることが解るであらう。

この國井清之助と言ふ人は羽郕と號し、書畫を自ら作り、茶を好み、且つ琴を彈した風流人で、特に琴は秋琴の弟子であつた。越後屈指の素封家であり、風流の人であるから國境の大山脈を越えて會津から秋琴が琴を教へに來て、よく長く宿つて遊んで行つた。そして手元不如意の爲めに、初め質に入れて、それから讓つたのである。山陽は玉堂の碑文には春琴が此の琴を持つてゐると言つてゐるが、或は春琴が死んでから秋琴の手に入つたか(春琴は弘化三年五月二日六十八歳に死んだ)、または春琴よりも琴については本職であり、且つ玉堂の琴系を繼いだ秋琴に讓られたのか、とにかく秋琴の手に入つたことは事實である。

終りに秋琴の弟子阿部祐順の遺記した「彈琴法相傳記」なるものを紹介して置く。

心──杉浦琴川（東都人諱延職幕府世臣）──小野田東川（諱延賓東都人）

杉浦家（宰臣）──多紀藍溪（諱安元東都人幕府醫官）──浦上玉堂（岡山世臣）

──吉田

──秋琴

──袖爾（名里子京師人賓人吉田笠山の妻）

の書でも畫でも作者獨自のものを許されることは甚だ少ない。南
畫は自由畫であるから、作家が思ふままに其の胸臆を展べ
得て差支ない所があるが、それも獨自を許されるのでは無い、師
承があれば既に獨自では無い其時代の氣息氣に支配され
てゐるのだ獨自ではない。超然として何んの感化も受けず、一
切の粉本を離脱し、目前の真山水を描き無視し

て別に一境地を開く畫でなければ、獨自の畫と云ふことが
出来ぬ。此の意味に於て南畫界に其人を求むれば、浦上
玉堂は其の庶幾い、彼れは全く稀有な存在である。彼れの畫山
の命題に囚しものを米法山水と云ふのは、[illegible] 當らない。
彼れが眼中米法などは無かつた。彼れの畫は多墨の畫で
満紙塗抹したところに技巧があるとも見えぬ。古拙と云ふこと
の高さを [illegible] 拙ではない。おのづから風致があつて
冒すべからざる品格がある。古怪と云ふのが寧ろ當つてゐるかも知れな
い。彼の自ら云ふ所によると、真に六法を知らず畫山水を学ばず
ることを恥とせず。彼れの畫は古怪である。彼れの人物古怪である
反映であらう。彼れは吾支那の隠士で、白髪文章 [illegible] 鶴髪
の服を着して、常に瑟琴を抱いて [illegible] 性亭に立ちて [illegible]

榛原製

物を落（白く）を脱して繁墨を絶し、白面（しれる）をすると、彼人（しれる）と
四位（自）と云へども、我（小性の）鐵面を臨
恵まれ、而して玉堂に数年の歳月を累ねしものなれども、
鐵筆の妙、無比なるを、嘗て寒月書屋の時
迫（作味）、玉堂
八自家の書を人に模倣せしめ、又他人の書のあるを
欲する時は、微瞳を帶び書筆を弄するも、
味を深くして放筆なり、僅に一書を為すこと
あるも、胸中神と融合するあらざれば筆を収めて拙
劣しとす。その人が動もすれば心義を毎雑にせやつて
とする所も無雑の書を作ると推測するに大
なる誤解なり。落筆まもなく他人の及ばざる苦心をする法

かく奥妙と自然の天趣が備はり充い氣韻が生動する
の作家の稚態を脱し、其書を見れば、或の高遠
なる清雅の作となるを知れども、新しく見ることを敢て
不堂ひ、玉堂の心胸の一點の俗氣が無い、世の僧侶の流
衣を優美俗体を藪よりあが多いが、玉堂の心境は超俗の境
なるを更に清なるこあがあるから、其の筆端に現は
れたもの超俗飛躍あるのも怪しからず。石濤の畫の
繪素の書、法苑の僧雄とする所、玉堂の如きは士大夫
の書として稱する見る在在とも称すべきまい。偶々玉堂愛
琴の事を憶ひて偶々叙すること。

○浦上玉堂の春琴秋琴の二子があつたことは、脳想ちしの
この主原者所である者所の春沙秋沙の二子があ

ありし比。共に春秋を名乗りてあり。異なるのは前者は男子にして後者は女子である。春琴と春沙とは共に画をよくし、北辰も相似たるあり。尚休和氏と称する口マンスがある。春琴の妹なるかきと云へるがあり、美しく成長の奥に仕へるあり、或る美しい侍と恋に落ちし比。不義は御家の法度で、命が無い。父の玉章は美を惜んで、娘の命を救ひ、致致仕を以てしし。えん玉章の脱藩の理由とされてある。未所の女春沙も加賀藩の奥に仕へし。荒殿のお手が掛つて、懐妊したりで、愛搗を窮し、世に相談すると、未所が少きつけ、逐電の換へて短刀を懐に自刃を誓しれりで、娘は自殺したと云説がある。えん似寄つたロマンスがどうも共に疑はしい。かきと八蔵田鉄之進と云ふ良人があつて一子もあり、家も栄

粋人があつて、夫婦となれるあらうが、其辺が明かでない。春沙と就ても自殺した説もあり、荒殿の子を孕んだと云ふ説もあり、逐電したとも云ふ。春沙が加賀から戻つて家居の時、烈公がおとづれ、春沙が月琴を弾じたのを感んこみ、納れて妾とした云ふ説もある。更に女の深名が北の、いつの世でもいい逸話家や院本家は艶物を拵へてみて、或は真実らしく(事実を捏造して)伝説をおもしろくこしらへ物がたり、北辰のようなるかも知れん。豊太閤は禁中勝家を亡ぼして戦利品として淀君を得た。北政婦人は勝家に嫁したかの達丸子で、豊公は其母に恋した。脇坂氏を吟味した。丈でもどうもそうらしい。利休は娘で、利休は公の命を拒んで遂に自殺したとあつた。北等のロマンスは捏造(事実を捏造)

院本来の新命令ならばおもろしいが（本当の）事実に勝ちものと思わるるに足りる。

○日本図書館少の使命が果して其様な書を集める如く書籍の購使を任ずべき超然独立を選擇して奮めること■ならばあるとすれば私は美濃リ一二要求したいことがある。それは孔子の石碑等多数の書物の内、大きく度々出しるべき書物のみでも人の注意を惹くものの名若がいくらも隠れてゐるが此数のものを特に標出して欲しいと言ふが要求の一つである。外国から輸入の本に就ても同様のことを要求したい。亦他の注文の或る大事件が起つたときに参考とすべき図書や文献を列挙して貰ふたい。今日の実所やうな物文献を図書館に就て調べることは極切である。西洋では簡易な図書館の出張所のようなものが市中にいくらもつて、何か大事件が起る、例へば大地震等があつたときに、それに関係ある書籍を出すべき図書を、ツラリと並べて置くから得失の手続を取らずに入ることが出来る。これらのものは流石に調法だが、日本でもそれを倣ふたいが、図書館や書庫もまだそれを真似てやらず、新聞の新聞に、書目や発行所を列記して紙上陳列をやつて貰ふたいものである。

日本図書館少れ何か書けも頼まれて数字等を述べ行数の制限があつても、コンナ簡単の事でも書くのが関の山だ。

三月十二日

關東廳

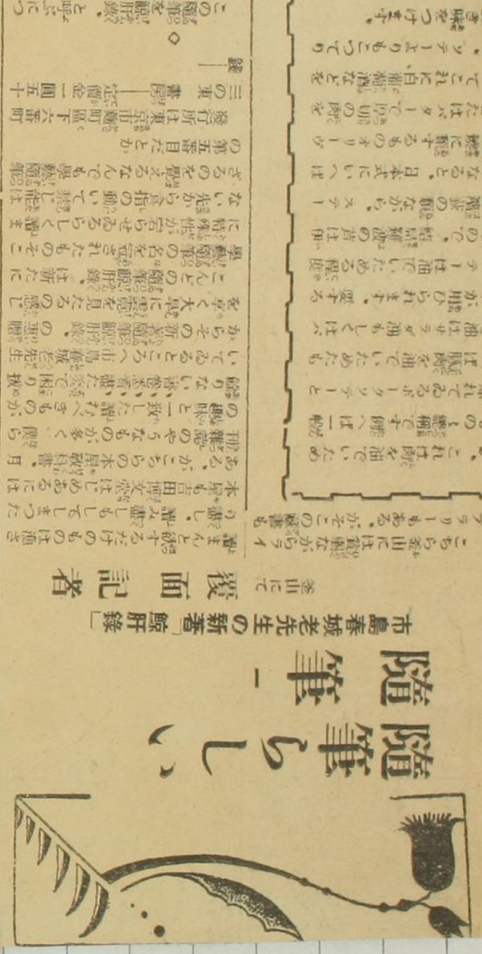
以下
10丁
白紙

第十八回同窓会幹事の皆さん　於　箱根

# 隨筆らしい

市島春城老先生の新著「隨筆」刊行

後面記者



# 隨筆らしい

市島春城老先生の新著「隨筆」刊行

後面記者

# 隨筆ら

## 隨筆 二

市島春城老先生の

釜山にて

この著での感興第二は回顧錄を見げたい

桃園時代の「東會回顧」、「運輸の回顧」は著者政治生活の一面を物語つてゐるものだし青春時代の回顧長岡の回顧この二篇は著者が高田新潟、「讀賣」各新聞社での記者生活當時の懷古錄だどこにも著者の呼吸、臭ひが横溢してゐる

○

その中での長岡の回顧、中に僕に關して筆をとられてゐる一項のあるのを讀んでみて發見いささか僭越、恐縮の念に驅らるその記文に曰く

自分は長岡の北越新報の記者となつたことは無いが、長い間私の隨筆前漫談を掲載した點からいふと、私も三年位記者として筆を把つたと同樣である、東京に通信員として派されてゐた同新聞の記者が、毎日訪ひ來るのでそれに筆跡させたものが數百篇の多きに及び、その後は自ら二百篇隨筆を執筆して連載したこともある、その關係で新聞を通じて私を知るものは頗る多いのである、それのみならず長く主筆であつた關魚川——太郎——も自分の紹介で入社したのだ、丁度東京において早大の騷動があつた時、關は毎日私の家に來て秘書役を勤めてゐたが、この頃は關の内政困難の極度に達した時で、本人は平氣であつたが細君が泣き込んで來た前日恰もよし廣井君——故一元の社長——から關を主筆に迎へたいといふ申込があつたので渡に船と魚川は同社へ入つたのである

その頃の僕は十二年半の大毎社生活から鬱然去つて東京に飄零落托の客となつてゐたそれは日々夜夜隱し酒を飲み耽つてゐて畫は口を拭つて知らぬ顏の半兵衛を極めこんでゐる猫を冠つた大阪人の仲間入りはとても〳〵出來かねたからであつた僕は性分としてもこんな虛僞、假面の沼には棲み得ない魚であつたのである

も出版の今昔、は堂々たる雄篇わが國出版史を雄辯に物語つてゐるもの書物の敵、に至つては讀書子の著者若先生にあらざればいふことも出來ない、書くことも出來ない新に論じて驚拔卓越、他の追隨を許さざるものが存する

これ雄篇、佳篇を外にして一寸、僕の心を引いたものに紅葉山人の日誌、がある佐渡小木の藤とのお糸婆さんに會ふて以來は急に山人に一種の憧れを持つやうになつてゐる僕のこの頃では紅葉のことゝしもいふと關聞等事でも心を動かされずにはゐられない僕ではあるが

この他三馬の浮世風呂を讀んでにしたつて讀書の處則ち書齋、にしたつて讀の良寛、にしたつて興味滿點だ

後者の丙子雜俎、雜俎と題せられてゐるほどで何れも短篇、だが四十九篇と も小粒ながら 山根はひりゝつと辛いの感がされる

中でもみさご、の辯の如き木堂の諧謔、の如き紅雨、の辯の如き三閑の川柳、の如き頼山陽の微時の如き新快絶項——續く——

だが一時の客氣から斷然など稱して大風を引揚げてはみたものゝ人間は權から離れては一日半日だつて生きて行き得ないそこで春城老先生に合掌哀願早大の高等でなく中どこの居候となつたわけでその際の春城老先生と廣非故社長との間の取極めで――僕には少しも話すことなしで――彌縫的に僕を北遊社へ賣りこんだのでもあつたがこんな記文を書まされては僕だつて勢ひ懷古の仲間入りに引き込まされて行かざるを得なくなる

○

郷土自慢、この項を書んでは僕も著者と郷土を同じくしてゐる越後人ではあるがいさゝか愚高々の感を引き起させらるとんな風に書かれてあるかといふに、富饒のところに學者の生れるのも自然の數でこの地――越後のこと――には種々誘るに足る人が出てゐる自分――著者――からいふもおかしいが、わが家の家祖倚海は鄰黌が孔子と仰いだ人であつた蔵地といふ僧は少年時に早く大關を驚かすの天才であつた山口坎山なる算數家はその頃日本第一の算數學者長谷川西晴の高弟で三千の門人がありそして師が沒するとその學統を繼いだ人である醫には伊藤仁齋及門の三浦氏があり世々漢方を宗とし澤田宗伯現して一時その後を承けた人も三浦氏であつた蔵家には抱一門人の池田孤村がありまた大倉雨村がゐる著述家として越後野史を著した小田島危武などがあるこれ等はたいてい誘るに足るべきものであらうとさつとかうだ

尚山口坎山について

水原の天神町に山口吉六と申すものがあり、これが坎山先生の家に相違ない、只今の主人は水原驛に日雇稼ぎをしてゐるもので、明治元年九月生れ、本年――昨十一年――六十八歳、その老母が坎山先生の長女で、位牌には高學蘊尚信士、明治十九年一月歿、五十八歳とある、如何にも凡庸の戒名とは思はれぬもとこの家は、近村須走村山口金之丞の女に、婿をもらひ天神町に分家したもので、その倅が即ち先生、先生の娘が今の老母で、これも婿取である

こんな記文も附け加へられてゐる――續く――

古屋――といふ饅を食ふたことを思ひ出し同行者に得月樓といふ割烹店はまだあるかと問ふ――日本ラインに探勝した時――たちその家は名古屋で今も名高い割烹の老舗だと聞いて急にその家に行つてみたくなりそこ〳〵に歸路に就いて得月樓に上りとみ五十餘年前の往事を追懷、忽るかに坪内君に書を寄せて感懷をいふたことがある。

――――――

く、君は紅葉とは異つて物に頓着しないから好き、嫌ひなどはないと云はれた、然るに自分からいろ〳〵のことを持ち出して聞くと、中にはおのづから好惡があつて、隨分抱腹に堪へないやうな話もある、まづ食物についていふと、好物は自然薯のとろゝ汁と、鰻位なもので、總じて新しいものでなければ嫌ふ新らしいといふのは貯へたものに對していふので雁語類は最も嫌ひといふことである、骨董書畫などの類に至つては絶對に所持するを欲しない（中略）、翁は右の次第だから、自家の衣服には絶對に構はない、細君が御に居つていふのに、主人は着古しの衣類が一番よいと申すので、そればかり用ゐます、つまり體によく合ふからと見えます

と（後略）

こんな風に書かれてゐる。

○

坪内博士思ひ出の記文中に著者は、嘗て帝大同窓時代修學旅行をした時に暑中休暇で家に歸つてゐる坪内君を訪ふて半日話し暮した揭句君に伴はれて得月樓――名

# 市島春城老先生の新著「鯨肝錄」

釜山にて　覆面記者

著者の春城老先生に世元來懷舊の癖の相當濃厚なのがあつて少、青年時代から中老時代へ掛けては各所の大中名川、深く根底に掛からざるはなき有樣であつたのだそんなためか旅び日記既ち大隅侯追懷記から初度の旅、旅の今昔等多くの快文字が回顧錄を埋めてゐる僕は讀んでみて大隅侯追懷記の叢華版式旅日記にも眩惑の感を持たせられたのであつたが初度の旅――と東海道、中山道から甲州街道を四十餘日間旅びしたその日記と旅の今昔とに一だんと大なる興味を覺えて讀まさる

○

次でこの回顧錄でその讀後の感嘗に世及補舍における坪内逍遙君と逍遙博士の對觸、との二つがある著者、春城老先生の友人坪内博士の思ひ出で誘いく回か聽かされもしいく回か讀まされてもゐるが兩者生前只ならざる訳柔、書いてゐる記文内の事柄その事もさることながら友情の發露、羅はしい人情美が何時も〳〵文字の外に横溢溢溢としてゐる點に感激に次での感興が持たせられる

春城老先生と坪内老博士、二人の仲は天下の知己君奥吾といつたやうな間柄で春城を知るは坪内を措いて他になく坪内を知る亦春城の外にはないといはれたものだ

その記文の一せつに曰く

或る夜、鯨と酒を酌みながら君――坪内博士のこと――の好き嫌ひを聞かせよ、と云ふと、釜云

樣原製

# 盲人に關する史料

中山太郎

昭和十二年三月 國學院雜誌

文字に緣遠い盲人關係の史料が、多數保存されてゐるとは、少しく案外でもあり、また少しく皮肉のやうにも聞えるが、これには相當の理由が存してゐる。成る程、盲人は文字を讀むことも書くことも出來なかつたが、盲人の組合には當道座といふ機關があり、然もそれが古く京都には職屋敷が存し、後に江戸には惣錄屋敷が設けられ、前者には職事と稱する晴眼者が二名づつ世襲して、一切の記錄を擔任し、後者では屋敷内に祀つた辨才天の祠職の者が、同じやうに記錄に從事したので、代々の盲人の史料を書殘してゐる。次には清華の久我家が、鎌倉期から此の當道座を管領として支配して來たので、その關係文書が同家に少からず傳存されてゐる。

以上の二つだけでも、盲人の史料は相當の量に達してゐる所へ加へて如何なる理由か代々の學者が、盲人の事といふと好んで記錄にとゞめた。從つて日記とか隨筆とかいふ類に、多くの史料が載せてある。それから更に面白いことは、盲人はその性質からか境遇からか、頗る健訟の傾向があり、これに關する記錄が殊に多く保存されてゐる。

そして、盲人の史料は、大別すると、當道座を中心とした盲人の生活に關するものと、次は琵琶・琴曲・三絃などの音樂に關するものと、更に鍼灸導引などの醫術に關するものとの三つであるが、こゝには是等を押くるめて述べるとする。猶當道座以外の盲僧の史料に就いては、省略する。

## 一

私は、十七八年前に、我國の盲人の制度史を書かうと思ひついて、先づ上野の帝國圖書館に赴き、目錄を檢索したところ、僅に當道大記錄と題せる一冊だけしか存せぬのに、驚きの眼を睜つたのである。勿論、當道要集とか當道新式目とかいふ在り觸れたものは、史籍集覽のうちに收めてあるので、私も夙くから寓目してゐたが、大記錄一冊だけには、全く失望せざるを得ぬのであつた。そこで故人となつた太田爲三郎氏に尋ねて、松屋叢書のうちに當道考があり、視聽草に江戸惣錄傳のあることなどを敎へてもらつたが、とても是れだけの史料で、當道六百年の消長を記すことは覺束ないと考へた。

然るに紀州德川家の南葵文庫には、勝海舟伯及び依田百川の藏書が委托されてゐると聞いたので、同文庫において杉山和一撿校の著述といふ瞽官紀談を讀むことが出來た。そのうちに柳田國男先生より、詞曹雜識から盲人の史料だけ抄錄したものを借覽し、更に學友嶋田筑波氏の紹介で、和田千吉氏が武藏野撿校の藏書を讓り受けたもの數種を、同じく借覽することが出來て、大に自信を强めた次第である。殊に私の手許にも諸方から買入れたものが集り、それやこれやを基調として、盲人史を書くことにした。此の頃に盲人の營むだ高利の金貸し證文を手に入れたいと思つたが、その折にはまだ一通も發見することが出來なかつた。

相州の江ノ嶋には、杉山檢校が生前には辨才天を信仰し、死後にはその分骨を埋葬したので、多くの檢校たちが同じく信仰したが、そんな關係から永堀檢校（小石川區長として知られた佐藤正興氏の實父）が、當道座解消後の記錄を同社に寄附したことを耳にし、その文書の謄本を學友の清野久雄を煩して入手した。更に曩に日本盲人傳を著はした石川二三造翁を二度訪ね、門外不出といはるゝ史料を見せてもらうなどして、盲人の史料の決して尠くないことを知ると同時に、それまでに寡見に入つた史料が、京都方面に多くして江戸關係に乏しきことを知つた。もう少し詳くいへば、私の見た盲人史料は、京都の職屋敷で取扱つたものが多く、これに反して江戸の惣錄屋敷で取扱つたものが尠いのである。勿論、通說に從へば、職屋敷は始め全國の盲人を監督したが、後に惣錄屋敷が設けられ、關東八ケ國だけの盲人を監督したといふのであるから、時代においても地域においても、前者が後者より古くもあり廣くもあるので、此の結果は當然のことゝも思はれるのであるが、これには猶ほ別な方面から考ふべきものがある。

それは明治四年十一月に、檢校勾當といふ官が廢止され、當道座も解消し、職屋敷も惣錄屋敷も潰れてしまつたのであるが、その折に職屋敷は管領である久我家も控へてゐたので、種々なる記錄類を整理して同家に差出し、殘つた物も當時の役檢校などが克明に自宅に持ち歸つたものと察しられる。然るに惣錄屋敷は廢止と共に記錄も什具も散逸して、遂に一物もとゞめぬまでになつたものと想ふ。現に惣錄屋敷の遺跡である本所千歲町の杉山神社に往つて見ても、書附なら一通、品物なら一個でも殘されてゐぬので、さうとしか考へられぬのである。それに是れは私の迂濶であるが、塙保己一檢校の後を承けた溫故學會こそは、盲人の取締役を勤めた塙檢校ゆゑ、盲人關係の史料が必ずや澤山に存することと思つたが、案外にもこゝには目ぼしい物は存せず、埼玉縣の生家には告文（檢校の免許狀）があるだけだといふ。塙檢校は盲人ではあるが天下の學者である、これを普通の盲人扱ひにしたのは私の迂濶であつた。

◎

當道座で金科玉條と頼むだ當道要集の記事に、無稽の附會の多いことは先覺の定論があり、少しも疑義の存せぬ所である。殊に仁明天皇第四の皇子人康親王が、御眼疾のために山科へ御退隱あり、禪師の皇子と申上げたといふ條は、三代實錄や伊勢物語を曲解したもので、盲人の學問では荷が勝ちすぎてゐる脚色である。そこで私は此の大膽なる附會は、當道座の創立者である明石覺一檢校の所業であらうと考へた。覺一が將軍尊氏の緣者たる地位を利用し、官符を挾んで全國の盲人に呼びかけたことは明白であるが、それと同時に覺一が和歌の嗜みが深く、且つ琵琶の名手であつたのも事實で、彼が福岡縣の國幣大社高良神社に寄附した平家物語は、一方本として今では國寶になつてゐる。これ等の諸點から推すも覺一こそ脚色家たるの資格を有してゐたと考へるのである。覺一の詠歌が後醍醐天皇の叡感に入り、雨夜の檢校の名を賜つたといふ件が、どこまで信用されるか心許ない限りではあるが、兎に角に盲人界における勢力家であり大學者であつたことだけは、信用しても差支ないやうである。殊に誰の作爲が判然せぬが、兒島高德が隱岐に赴く際に、覺一の弟子と僞りその手形によつて往復したといふ話は、全くの作り話に過ぎぬとしても、これを覺一に附會する所に彼の勢力が窺はれるのである。

平家物語の異本は、山田孝雄博士に從へば八十一種の多きに達してゐるといふが、盲人が琵琶にあはせて彈奏したものは、八坂本と一方本との二つに大別されるのである。此の一方本の由來に就き當道要集に『平家物語に三本あり、第一を淸書本と申し、雲井の書と申て禁中の御文庫にあり、次に中書本と申て公卿殿上人の翫びとなる。第三を草案書と申て地下人の翫ぶ所なり。一方の平家は上より下し給はる所の淸書本なり』



といひ、更に『八坂本とは文義格別なり』と誇らしげに云ふてゐるのも所詮は覺一の勢力をひけらかすだけで、兩本とも左迄に文義格別とは、信じられぬ。

◎

盲人が不具者なるために、神社や寺院へ收容され、團體的の救助生活を送つたが、これに關する史料も相當に殘つてゐる。紀年的のものでは梁塵秘抄口傳集に仁安の頃京都左女牛八幡宮へ、盲人が大勢集つてゐたことが記してある。當道要集に洛北の賀茂神社に盲人の救田があり、同社では盲人を宿泊させたとあるのも、左女牛八幡と同じく盲人を收容救助したのを、かく語り歪めたのではないかと考へる。人康親王の領地を盲人に賜り、毎年薩隅日の三國から貢米が來るので、在京の盲人達が伏見まで出迎へ船の綱を曳いたのが、後世の漕入れ式の起りだと傳へてゐるものゝ、これが事實か否か疑ひなきを得ぬ。人康親王は病氣のために出家し、無品となられたのであるから領地があつたとは思はれぬし、よし領地があつたとしても、それを盲人達に賜はるとは腑に落ちぬ話である。これも救田米の施入を、大袈裟に語り傳へたものとしか受とれぬ。

紀州の熊野三社でも、盲人を收容救護したやうであるが判然せぬ。未見の書ではあるが熊野本宮天夜尊御舊跡緣起といふのは、何か此の事と交渉あるかに考へられる。それに平家物語の六卷本を、熊野祭神から授かつたといふ傳說もあるので、熊野と盲人との關係を、詳しく知りたいと思ふたが、遂にその意を果さなかつたのは遺憾である。平安末期に僧增基の書いた庵ぬし（群書類從本）は、熊野に集つた落伍者の生活を、かなり克明に記してゐるが、盲人の事は見出されぬ。もう此の頃には、盲人は琵琶の樂人として、細々ながらも獨立の生活を營むことが出來たのかも知れぬ。

◎

室町期の盲人は生活の基礎が築かれ、不具者ではあれ多數なるが故に勢力を占め、我意を張ることも珍しくはなかつた。これは覺一檢校によつて改革された當道座の配當が增加したこと、平家琵琶の流行につれ收入が多大に達したこと、高利貸を營むで資財を蓄積したことが、その主たる原因であつた。そして是等の事は、看聞御記・師守記・大乘院雜事記などに見えてゐるが、その中でも文明十二年二月に、大和國の盲人三百余名が蜂起したとある一條は、如何に戰國殺伐の時代とはいひ、盲人の團結力の强烈を思はせるものがある。

それに當時の盲人の檢校級の者は、それぞれ勢力ある大名に取入り、然もその內意を承けて細作をしたのである。目の見えぬ上に琵琶を彈奏することは、野戰攻城の退屈を慰めるには誂向きである。それがため平時にあつては奧深く出入することを許され、戰時においては陣中に起臥した。武田信玄が盲人を利用した話や、毛利元就が嚴嶋の戰ひで奇捷を博したのは、陶方から入れて置いた盲人の間者を、逆に利用したからだといふ話などは、共に史上に載せてあるし、又これと同じやうな話は他にもある。そして此の事は時代が降ると、基督敎の傳導に利用されることとなり、後には晴眼者までが魚鱗を以て眼を掩ひ、盲人を眞似て布敎するやうになつたのである。大友宗麟の家臣田原源藏が盲人を裝つて傳導した話は、長崎緣起略記に載せてある。新村出博士の研究によると、我國に在留した外國の基督敎の牧師が、吾が國語を修めるために、官許を得て英譯開板したのは平家物語であつて、然もそれは盲人から敎へられたものだといふ。是等の交涉が盲人布敎の原因となつたものと思ふ。

◎

室町期における公家の生活は、極度にまで逼迫した。これに反して盲人の收入は年毎に多くなつた。そこで此の盲人を管領してゐた久我家から、度々その組合である當道座へ御用金を申付けるばかりでなく、檢校

勾當などの瞽官授與に就いての幾分かの手數料、及び年頭禮を納付するやうに言渡した。此の收入は久我家の窮乏を救ふのに充分のものがあつたが、さて斯うした收入のあることは、一方には同じ公家仲間の嫉妬を買ひ、一方には當道座中にも異議を唱へる者があり、それこれが瞽結爆發して、遂に天文六年の新儀事件を見るに至つた。

そして此の事件始末は、同九年に書かれた座中天文物語に詳記してあり、今にその原本が前田侯爵家に殘つてゐるが、これに據ると盲人の勢力が意外の所にまで及んでゐることが知られるのである。始め久我家では盲人中に新儀を企てる者があり、又それを利用しようとする公卿もあつたので、それ等を彈壓する意味で、天文四年に後奈良天皇の綸旨を賜はり、そのうちに久我家で盲人を支配するのは、古く後白河朝からの事だといふ一句を挿入した。然るに此の一句は久我家が勝手に拵へたので、事實で無いと當道座では主張し、その結果、後奈良帝の御祖母南御所に仕へてゐる惠玉庵といふ老女に、座中の田寺撿校が最負を受けてゐるので、此の老女の手によつて、畏くも禁裏の消息を窺ひ、女房奉書の形式で、久我家の管領權の脆弱なることを發表されたのである。

此の事件は全く久我家の不利に終つたやうに、同書には記されてゐるが、多少の疑ひがある。何とかして、久我家側の記錄を發見して、此の事件の眞相が知りたいものである。

## 回

江戸期になると盲人の記錄も、文運の暢達につれ俄に增加したが、特に貴重なものは久我家に保存された百餘通の文書である。これは學界に始めて紹介されたもので、明暦から寛文にかけた久我家對當道座の大訴訟なども、その詳細を知ることが出來たのである。

當道座に加入せぬ盲僧の存在や、當道座と盲僧派との關係なども、又の興福寺に屬する一派があつたので、同寺の古い記錄にも載せてあり、更に盲僧の事だけを記した書類もある。盲僧は九州に多く居住し、その他は長防の一部と紀和勢の一部とに存在したゞけで、團結も弱く、人數も少く、且つ財的にも苦んでゐたので、常に當道座から壓迫され、盲人同士に不似合な長い年月に渉る訴訟を續けたりしたが、結局、大きいものには呑まれるの譬ひで、いつも下積にされたのである。

明治四年に瞽官が廢止され、當道座も解消したが、その前後の事情も久我家の文書に徵するのが確實であり、且つ最も明白に知ることが出來るのである。盲人に關する史料といへば、極めて限られた狹い範圍のものではあるが、今のうちに整理し複本を作るなり、又は活版に附すなりして、永く保存したいと考へてゐる。（完）

### 蟬丸は幾人も存した

蟬丸の名は、平安朝に流行した「蟬歌」の名手なるより負うたもので、從つて此の名で呼ばれた者は、山城近江の境なる會坂の蟬丸以外に、猶幾人かの蟬丸が在つても不思議はない。そして二中歷を見ると、その第十三藝能歷、管絃人の條に左の如き記載がある。

信賴蟬丸。會坂蟬丸　盲者云々

此の信賴蟬丸の名は、如何に解釋すべきかに就いては、多少の議論は伴ふことゝ思ふが、兎に角に會坂の蟬丸以外に蟬丸の存したと云ふ結論には疑義は無い筈である。斯うして幾人かの蟬丸が居つたにも拘らず、蟬丸と云へば會坂のそれとのみ考へられるやうになつたのは、或は此の者の藝能が世に秀でた爲めかも知れぬが更に今昔物語の記事や、小倉百人一首の普及などが、與つて力あるものと信じたい。（續日本盲人史より）

ある夜ちまたを歩行[illegible]住[illegible]四
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

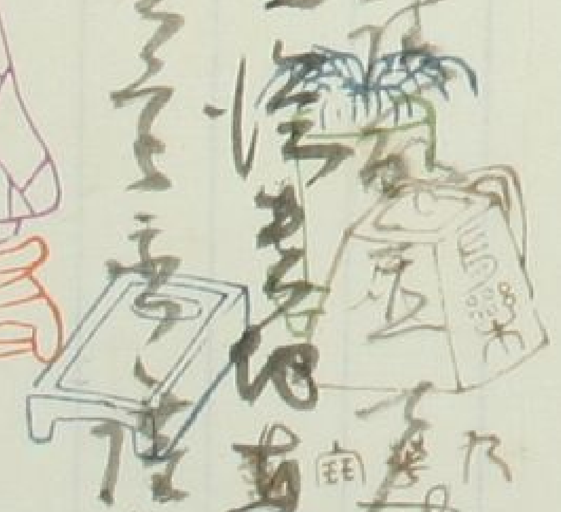
にあつまる[illegible]伴ひ来る

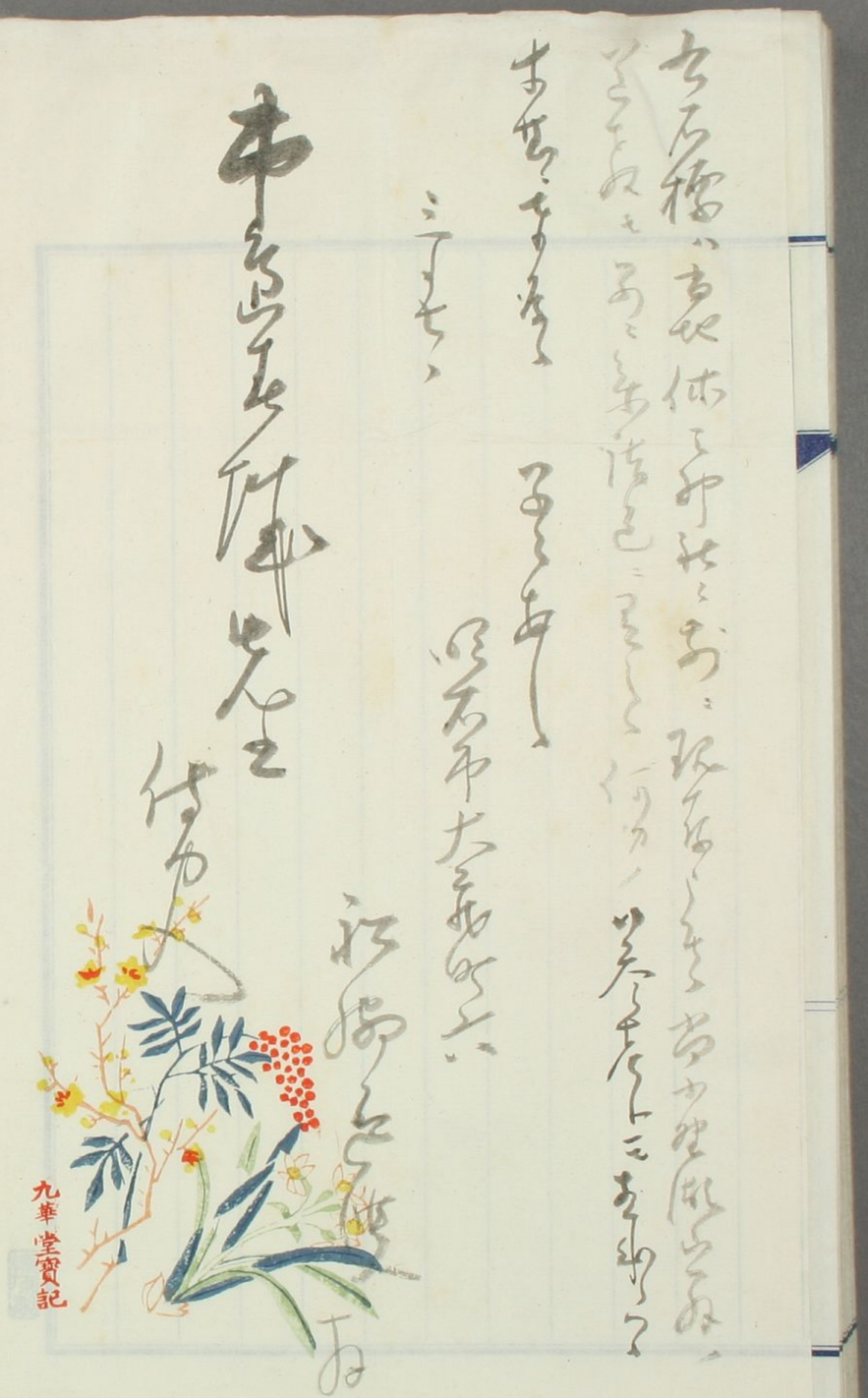
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]四月二十八[illegible]
[illegible]
此京大阪三十六人[illegible]同月廿日比集諸[illegible]大垣

淡路都志に集諸先生[illegible]貝[illegible]從大阪表帰[illegible]一[illegible]石上
[illegible]

聖跡第五番
休石天満宮前
第十五番
淡路人東京[illegible]
[illegible]

為石標[illegible]
天満造幣寮ニ而[illegible]
[illegible]一石
次ニ四月三十日五月一二日比ニ集[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]建碑[illegible]西宮[illegible]






# 竹のや主人饗庭篁村（下）

山田清作

さういつた風で、四十歳位までは非常に勉強したものらしい。たゞあれだけ芝居好きであつたに拘らず、脚本は甚だ不得手で、例の「つり的」といふ喜劇の外には殆どありません。「太田道灌」は筋書程度のものですが、書きかけて見たものゝ、どうも中に女が出せない。何とかして女を使ひたいと思つたが、うまく點出することが出來ないので、默阿彌さん――竹のやは決して人を呼棄にしなかつた――に相談した、さうしたら默阿彌が笑つて、さう素人が勝手に女を使ふやうでは、狂言作者は飯の食ひ上げです。出來たら御見せなさい、私が中へ嵌込んで上げますから、と云つたさうです。

世間では竹のやと云ふと、江戸の名殘の通人の中に算へて、狹斜通でもあり料理屋なんぞを始終食べ歩いてゐたやうに考へてゐるやうですが、その方面にかけては實に眞暗で、書いたものを注意して見ても藝者やなんか一向出て來ない。第一藝者がどんな言葉を遣ふものかすらよくは知らなかつたのでせう。その方面も通人とは云へませんで。生來舌の感覺は鈍感な方でしたが、評判通りの左利きでしたから、看は二の次でほんの一寸箸をつけるだけ、晩酌の膳に一二品あれば、それが何でも文句は申しませんでした。しかし東京育ちですから、天麩羅に滯燒に鬻麥に豆腐が大好物で、油が上等だとか小骨が切れて居ないとか、香りがいゝとか、豆臭いとか、いろ〳〵と申しました。それから、すしでは鼈河岸の毛抜ずし、中でも玉子の輕い味が氣に入つて、家庭でイリ卵をする時にも、其の味を眞似させました。赤城下に居た頃、半井桃水さんに招かれ、神樂坂のどこかで鰌の天麩羅を出されて、通人の食ひ物には驚いたことがあります。總じて江戸つ子ぶつたり通がつたりするのが嫌ひで、べらんめえ言葉を下品だと云つて、ひどく厭がりました。序に申しますが、何が嫌ひだと云つて地震と生意氣と海老茶式部が一ばん嫌ひでした。

酒も溺れてしまつてゐて、これでなければ飲めない、なんていふことは無かつた。坪内先生などは、たつた五勺程の晩酌に白鶴一壺張りでしたから、饗庭君は酒でさへあれば何でもいゝんだね、と云

つて笑はれたものです。それに向島時代は、酒屋へ内金々々で入れてゐたやうな始末で、餘計文句は云へなかつたでせう。あの頃はまだ世間がゆつたりしてゐたものか、月末になると酒屋の若い衆が手紙を持つて來る。寄出しぢやありません、もう少し内金の高を殖して戴けないか、といふ歎願なのです。併し借りたのは酒屋だけで、存外氣の弱い人だつたから、外の拂ひは綺麗でした。

とにかく竹のやは自分が忠臣の血筋を受け、元三大師（慈恵大師の事をいつも斯う稱へて居た）の血筋を受けてゐるといふことを、常に頭に置いて居つたらしく、自身の言葉も行儀も慎しみ、子供達を戒めるにも「恥を知れ／＼」と口癖の樣に云ひました。話は極く不得手で客と對坐してもシラフの時はかうやつて手をこするより能が無かつた。氣の弱い人だけに、人の好き嫌ひは甚しかつたけれども、嫌ひな人だからと云つて、面會を謝絶するほどの勇氣も無い。自分の方から人を尋ねることは晩年ありませんでしたから、自然各方面の交際は疎くなる。手紙もあまり書かない方でした。

以前は池の端の心正堂の筆でなければ使はなかつた。いつか愚妻にかういふ筆は無いかと云つて、心正堂へ聞かせにやつたら、これは昔饗庭篁村といふ人が使つた筆です、と老店員が答へたといふ笑話がある。無筆だ／＼と云つて字は書かなかつたけれども、筆だけはやかましい。千藤流の字を書く筆でなければ使はなかつたらしいのです。原稿紙は榛原の罫のある、改良半紙のを死ぬ近くまで使つてゐました。新聞社の方からそんなのは來ないので、白辨で榛原の

を用ゐたのです。

悪筆に就てはこんな話があるが、西南戰爭が長引きさうだといふので、讀賣から從軍記者として行くことになつた。その時は洋服を著て、仲間の記者等と一緒に泊り／＼で飲んで行つたのですが、東海道は靜岡か濱松邊の或宿へ泊つた時、そこの亭主が扇面を持つて出て先生方どうぞと願つた。皆尻込して書かうとしない。癖に障つた竹のやが血氣と酒の勢で、富士を詠込んだ狂歌を書いてやつた。すると亭主が扇面と竹のやの顔とを見較べて、默禮して引下つた。その時位きまりの悪かつたことは無い、醉も何も醒めて冷汗をびつしよりかいた、それ以來揮毫といふものはせぬことにした、と云つてゐました、その狂歌もはつきり聞いたのですが、遺憾ながら今記憶にありません。

それからもう一つ、これはずつと晩年の話ですが、下谷の文行堂に統に書いたものが出た。慥に眞筆に違ひないから、私が買つて置いて見せると、暫く考へてゐましたが、これは幸田さんと月ヶ瀬へ梅見に行つた時に宿で醉拂つてから書いたものらしい、そんなものがどうして東京へ流れて來たか知らん、と云つて驚いてゐました。大きな文字を書いたものとしては、恐らくこれが唯一のものでせう。百圓で買ふから譲れ、と冗談を云つてゐましたが、亡くなつてから私が表裝させました。「梅に月それで我等が死ねる也」といふ句です。「死ねるなり」が人に嫌はれて文行堂では長く賣れなかつたさうです。短册だけは人に頒まれて、いくらか書きました。

話が又前に戻りますが、南傳馬町の家は二年位のもので、それから根岸へ移つた。音無川の前のところで、この家も買つたらしい。後に幸堂得知さんがこゝに住まはれたやうに聞いてゐます。その次が東大久保、これは今内田伯邸のところ、即ち高千穗學校の隣地で軍人向に既がついてゐました。坪内先生が書生に捜させて下されて手紙で知らせて下されたものです。東大久保に移つたのは、東京專門學校文學科の爲に、近松の淨瑠璃を講ずるやうになつた關係だらうと思ひます。

根岸時代には所謂根岸黨なるものがあつて、高橋太華、岡倉天心南新二、森田思軒なんていふ人達と交渉がある。比較的賑かな時代ですか、不幸破鏡の歎を招きました。つまり文學者の生活といふものが理解出來なかつたので、折角三百圓ばかり溜めた金が、親友に融通して返らない、といふやうなことも、その一原因だつたやうです。大久保に移つたのが明治二十四年、二年ばかりたつて數寄屋橋近邊へ移りましたが、これはほんの僅な間で、今度は寺嶋村、百花園の近所へ引越しました。こゝには三年位ゐましたが、そのうちに小梅町に地面付の賣物があつて、そこを買つて入つた。好事家の建てた家ださうで、庭には數寄を凝らした泉水もあり、石も澤山使つてある。どうしてあの大きな石を、あの田圃の中へ持つて行つたかと怪しまれるほど、石が使つてありました。土地臺帳によると、宅地の外に畠と田と、裏の方には山林（榛の木林）があつて、夜なんぞはそこに梟が啼く。あまり氣味のいゝところではない。場所は

三圓の裏ですが、今ではその西端を向島の幹線道路が貫通し、全く昔の面影がありません、隣家は大川平三郎さんの屋敷でしたが、これも跡形なしになつてゐます。

この小梅の家を買ふ時に金が足らず、公正證書で金を借りることになり、その保證人が坪内先生だつた爲、私が先生の代理で、登記所から公證役場まで皆行きました。こゝで三度水害に遭つて、遂に引越すことになつた。隣の大川さんへ話を持込んでくれた人があつたけれども、値段が折合はず、藝者あがりの美しい御妾に買つて貰つた。且那は後に句佛上人とわかつた。その金で今までの借金を拂つた樣子でした。この向嶋の負債整理に就て、坪内先生の書かれた「饗庭家負債整理案」といふものがある。改良半紙の罫紙四枚位のもので、文學者の手に成つたとは思はれぬほど、こまかく行亙つたものです。先生にその話をしたら、そんなものがあつたか、一度見せろ、といふことでしたが、どこへ行つたか、どうしても見つかりません。併し先生がそれほど心配されてゐるのに、向嶋へ洪水見舞に行つて見ると、本人は内心はとにかく表面は平氣で、人を相手に刻々に増して來る濁水を眺めながら酒を飲んでゐる。先生が腹を立てゝ一ついかゞと差された盃も響利も濁水の中へたゝき込んだなどゝいふ話もあります。

水害と云つても、あの邊のはずつと上の方の堤防が切れるので、水勢も極めて緩漫なものですから、床の上へ四斗樽か何か並べ、その上に又床を高く張つて、疊を置いて坐つてゐる。また水が增せば

もつと高くする。その上で又酒がはじまるのです。方々から御見舞の食物を頂戴しても、大概八九月の頃だから忽に腐つてしまふ。結局次男一人を留守番に殘して避難するといふことになるのですが、何度も遭ふうちには自然經驗が出來て、一番終（明治四十三年）の水の時には、いち早く本を運んでしまつた。以前はよもや〳〵で見てゐて、せつぱ詰つてからやるものだから、つい濡らすこともあつたのです。

朝日新聞社は實に長い社員だつたけれども、會議でもある時の外は出たことはありません。原稿が出來ると郵便でなしに女中に持たせてやるので、今と違つて交通機關の發達しない時代だから、向嶋から京橋瀧山町までは、鐵道馬車を利用してもなか〳〵大變です。けれども竹のや自身は若い時は足の達者な人で、かういふ話がある。箱根屋から家に歸つた後、十六七歳の頃の事でせう、義理の母に何より好きな鮮しい鮎を食べさせたいといふ一心から、午前二時頃起きて新宿の大木戸まで來る。さうして多摩川から擔いで來る鮎を待受けて買つて、日の出ないうちに駈けて龍泉寺まで歸るといふのです。自分がこんな調子だつたから、女中を使にやるのを仰山とも思はず、女中も亦その頃の者は二里や三里平氣で歩きました。

朝日の月給は入社の時が百圓、亡くなるまでそのまゝでした。最初のうちは小說なんぞも書いたが、後には劇評だけしか筆を執らなかつたし、一向出勤もしないのだから、社の方としては長く置いてくれたのが破格の優遇でせう。それに又社の創業記念とか、勤續何年表彰とかいふ機會ある毎に、別の手當が出たゞけです。續き物はあゝいふ調子である上に、挿畫が嫌ひと來てゐるから、甚だ受が惡い。自分の子供達でさへ、お父さんの小說は頭からしまひまでノベタラに書いてあつて……も無し、明地も無し、讀みにくゝつて面白くない、と云つたものださうです。

劇評は招待で行くと情實を生ずるからといふので、社の方で棧敷を一間買つたものですから、よく家族を連れて行つた。社の方からは相手に山本笑月さんなどが來てました。以前は棧敷で飲ませましたから、始終舞臺ばかり見てゐやしない、横向になつて酒を飲んでゐる。あれでは芝居の事を忘れてゐるのかと思ふと、急所はチヤンと睨んでゐるものと見えて、劇評にはアラが拾つてある。西洋臭い新作物を厭がつたのは、かういふ要所に對する時間の測量がむづかしかつた爲もありませう。一體が陽氣なタチだから、ロシアかぶれの陰氣なのだの舞臺の唄い芝居は厭がりました。

文學者の好嫌は大分烈しかつたやうですが、役者や何かの藝に對しては少しも偏頗なところが無かつた。よく醉拂つていゝ機嫌になると、金太郎は可愛い奴だ、なんて云ひましたが、それが爲に特に染五郎を褒めたといふやうなことも無い、誰を贔屓といふことも無く、全く技藝本位でした。役者の方から來れば拒まないが、此方から楽屋へ訪ねて行くやうなことは恐らく無かつたらうと思ひます。

劇評は「竹のや劇評集」として東京堂から出版されたものゝ外にまだ何倍かの分量がありましたが、四十三年の洪水の時に入物がひつくり返つて、すつかり滅茶々々になつてしまつた。それを後に山本笑月さんが大骨折つてあらかた整理して下さつたのです。晩年は社の方でも時勢に應じてなるべく短くしてくれと云ふし、自分も氣が拔けて切拔かせなくなつてゐました。まだ出版されない切拔の殘りは櫻庭家から早稻田の演劇博物館へ寄贈し、今そこにありますから、誰か根氣よく調べてくれたら、もつと年代や順序がわかるやうになるだらうと思ひます。

自分の著書などには至極冷淡で、殆ど何も保存しなかつたし、雜誌なんぞに書いたものも、多くはその時きりで反故にしてしまふといふ風でしたが、藏書は長い間にいろ〳〵買集めたものがありました。まだ龍泉寺にゐた時分、どこから聞いたものか、わざ〳〵本を賣りに來た人があつた。二本立の本箱に珍本が一杯、下に附いた抽匣は草稿が入つてゐた。その草稿は悉く種彦の自筆で、藏書もやはり種彦のものであつたさうです。咽喉から手の出るほど欲しかつたが、自分に金は無し、本の大嫌な兄貴のうちにゐる時分だから、どうにもならない。あれはどうなつたか、惜しい事をした、と云つてゐました。

馬琴の遺品は自分の金で買へる時分だから、無論即決で買つた。二十一二歳位の若い女に、破落戸風の眼の鋭い男がついて來たさうです。女は馬琴の曾孫琴嶺の孫に當るのですか、東京を引拂ひ北海道へ行くに就いて、路用の爲に賣るといふことで、瀧澤家の系圖や馬琴の雅印などもその中にあつたが、これは私が貰つても仕方が無いから、と云つて返した。併し後で考へて見ると、あんな男がついてゐては、長くは持つて居なからう。いつそ印だけでも貰つて置けばよかつたもの、と云つてゐました。元結でからげた反古紙の束を開いて見ると、それが皆馬琴宛の手紙で、渡邊華山だの、平田篤胤だの、山東京傳だのといふ人達のもあつた。こんなものは澤山ありましたが、髮を結ぶ時の手拭きに使つてしまつたといつたさうです。この手紙の中の逸品は後に市嶋春城さんのところへ行きました。錦繪は竹のやへ譲る前に、持主が近所の子供達に頒けてしまつたさうです。卷物に貼つた中には寫樂の繪もあつたが、これは竹のやが剝がして誰かにやつてしまひました、竹のやは國貞嫌で、寫樂は嫌ひだつたからです。

文學の方では八文字屋嫌で、馬琴崇拜ではなかつた。八文字屋の物の外に愛讀しましたのは、山岡元鄰、井原西鶴、近松巢林子、古川古松軒、石川雅望、建部綾足等の著書でありました。支那小說もよく讀みました。藏書には呉服の値段札に似た紙札をぶら下げて置いて、棚に積んであつても見わけがつくやうになつてゐましたが、多くは早稻田大學の圖書館に入り、殘後に殘つてゐたものは、淨瑠璃本だけ大阪朝日新聞社へ、其外はすべて某書店の手を通つて横濱の渡邊和太郎さんの文庫へ入つたので、あまり散佚しなかつたわけです。「櫻庭文庫」といふ藏書印は、全部捺してあるわけではありません。

書くものも三十臺にはひとりでに動いて、例の滑稽も突出すやう

に溢れ出して來たものださうです。坪内先生は、自分も興が乘れば敢へて人にひけを取らぬつもりだが、饗庭の生れつきだから、と云つて感歎されたことがある。坪内先生は何を書いても、必ずあとで直されるが、竹のやはすべて書き放しで、直すといふことはしなかつた。併し晩年はさう行かず、書くのに相應骨が折れたやうです。

竹のやの知己として、始終面倒を見て貰つたのは、坪内先生の外に高橋健三さんでせう。朝日へ入るやうになつたのも、事によつたら高橋さんの斡旋ぢやないかと思ふ。先妻と別れて後一年ばかりの間幼女（今は愚妻）を同氏に預つて貰つたことさへあります。この外親しかつた人としては、岡倉天心がある。飲友達としても大に意氣投合したのでせう、岡倉さんの手紙は澤山殘つてゐました。竹のや二度目の結婚の時、岡倉さんが美術學校關係の數人と共同で、橋本雅邦の「蓬萊山」を祝つてくれた。これは雅邦さんが美術學校で畫き、岡倉さん自身乘馬で持つて來られたものでしたが、どうしたものか後に贋だといふ鑑定を受けて、處分するのに困つたことがある。雅邦は、そんな密畫をしかも裏金に畫いた例が無いといふのです。實際謹嚴すぎる位の畫なのです。

それから古い時代に最も親しかつたのは、南新二、高畠藍泉、小中村清矩さんとも大分親しいやうでした。寺島時代に一番屢々見えたのは幸田露伴さん、小梅時代には何と云つても幸堂得知、右田寅彦の二氏でしたらう。池邊三山氏には、朝日の主筆として大分世話になつた。竹のやはこの點に就て認識を缺いたやうですが、社内に老人排斥が企てられた時なぞ終始擁護の立場に在つたのは池邊さんだといふことです。

旅行も若い時分に引替へて、晩年は外の事同樣、不精になつてゐました。幸田露伴氏、右田寅彦氏、其外畫家もまぜて四五人一緒に旅行した時の銘々自筆の繪卷が出來てゐて、亡くなる一二年前に、この繪卷と、短册類を一纒めにして安田さんに買つて貰ひましたが惜しいことに震災で燒けてゐます。

前の雅邦の畫が賣れた後でした。夫婦と私と孫どもと五人づれで紅葉の箱根へ行つたことがある。環翠樓へ著いた晩は非常に混雜して土藏横の古い部屋に入れられたが、翌日は三階の特等の座敷へ替へてくれたので、いゝ氣持だ〳〵と云つてやたら飲むのです。はたの者が心配して、大きな容器を取寄せ、德利の替り目に見えないやうに半分減らす。さうしてその罎を押入に忍ばせて置いた。醉拂ひには氣がつくまいと思つてゐると、豈圖らんや翌朝默つて押入から出して、默つて飲んでゐました。

けれども酒量はさう多かつたわけではない。私が知つてから毎日の量は三合乃至五合でした。晩酌をはじめるのが、冬は四時チーン夏は五時チーン、と定まつてゐて、膳立がちよつと遲れても御機嫌が悪い。四時にならぬ前から、そこらをうろ〳〵して待ちかねてゐる位でした。午後になつて何も書けなかつたのは、頭が半分以上酒の方へ行つてゐた關係もあるかも知れません。七時か八時には酒が

濟む。濟めば相手の客がゐても構はずに、臥床へ入つてしまふのです。酒間に子供を相手にして何か唸る。謠は鉢木か小袖曾我、義太夫は關取千兩幟、一中節は蕣門松といふ風に大體きまつてゐたが、小袖曾我と關取千兩幟の時は、やりながらきつと自分で泣いたものださうです。

酒の上の話はいろ〳〵あります。岡倉由三郎さんの話に、兄貫（覺三さん）のうちにゐた時分、何が困ると云つて饗庭さんを送つて行く位困つたことは無い。丁度コレラの流行つた年の夏の事で根岸は近所の日暮里の燒場があつたから、向うから棺がやつて來る。その度にヒョロ〳〵しては、棺に突當らうとする。引止めようとしても、酒の力で引張られるので往生した、といふことでした。一體陰氣が嫌ひで屈托心配することに堪へ得ず、何か煩悶があると、酒を飲んで忘れようとする。所謂極樂蜻蛉です。亡くなる前日は丁度私の伜の誕生日だつたので、大に愉快だと云つて飲んだ。さうして腦溢血を起して人事不省のまゝ遂に起たなかつたのです。幾度となく醫者が、また酒を飲むと命がありませんよ、と警告したのを聞入れずに、心ゆくだけ米のソップを飲んで、大正十一年六月二十日即身成佛を遂げた勸善院篁村清節居士は、いま染井の石の下に安眠してゐます。

晩年の饗庭篁村

竹のやは戲作者と見られるのを厭がつて、人に對しては禮儀正しかつた。手紙を書くにも、同輩以上の人には必ず與三郎と書いて、篁村だの、饗庭だのと書いたのはありません。それからをかしいのは自分で惡筆と稱しながら、印を捺させるのが非常にやかましかつた。雅印ぢやない。認印でもさうでした。自分は手がふるへるから人に捺させるのですが、それがなか〳〵むづかしいのです。

よく猫を抱いた寫眞がありますが、猫は最初は寧ろ嫌つたので家族が飼ふから、自分も中途から可愛がるやうになつた形です。たゞ犬でも猫でも、決して人間にあるやうな名はつけない。若し同じ名

の人があると氣の毒だといふのです。コッポ博士が來朝して、大に猫の功德を說いた後、コッポといふ名をつけたのは、外國人で差合が無いからでせう。「とん子」だの「小ちやらん」だのいふ名をつけたものもあり、親にまさる子猫だと云つて「鯱子」とつけたのもあつた。坪内先生も、この行届いた注意に感心して、その例に倣はれ、私の家でもモラとか茶毛とかいふ名をつける事にしてゐます。

竹のやは子供の時分に、寺子屋に行つたといふ話も聞きません。全部獨學自修だつたのでせう。文章では生涯にたつた一度半紙二枚の短文を成嶋柳北先生に添削を受けたことがあるさうです。一中節の稽古も、二日目に直されたのが癪に障つて、やめてしまつた。何によらず直されることは嫌ひだつたのです。

向嶋の庭園に別れるのが餘程つらかつた樣子ですが、赤城下へ移つた披露に「逃げたなと云はれて顏を赤城下飛んだところであへば逢ふもの」といふ狂歌を作つた。こゝに五六年ゐましたが、電話急設の事から家主と氣まづくなつて、引越したのが東大久保四〇二番地西光庵入口の貸家なのです。今度はシ二番地で、サア行かう庵の鱗へ來たから、こゝで死ぬと云つてゐましたが、その通りでした。

西光尼院の落花を見て

蝶となりて毛蟲も飛ぶよ八重櫻

といふ句はこゝで出來たのです。

竹のやは向島閑居の前までは、まだ〳〵勉强する氣があつて、日本文學史を書いて見ようといふ思ひ立から、先づ江戸文學に關する材料を買ひ集めたり、借りて寫したりしたさうです。私が親類になつた頃はその準備工作も頓挫してゐましたが、どうだ饗庭の畢生の仕事を手傳つて完成をはかつてはと、坪内先生から御勸めを受けたこともありましたけれど、私は職務に逐はれて居ましたし、その内にだん〳〵目がわるくなつて立消えになりました。晩年は朝日に劇評を書く外、時に頼まれて報條の文案、俗曲の歌詞など書いたこともある。今日の銀座のモーリといふ主人が朝日新聞を退社して、手始めに蛤の時雨煮を賣出す時に書いてやつた宣傳文などは、世間ではあまり知りますまい。大正十年、英國皇太子御來朝の時、帝劇で踊を出した。その歌詞が創作としては最後のものだらうと思ひます。

竹のやと私、さうですね、私が坪内先生の玄關にゐた間、隔月ぐらゐに余丁町へ來訪する顏を見ましたが、直接に口をきいたのは小海町の屋敷登記の際が最初、一面識もなかつた其の長女と、明治三十九年秋新築落成したばかりの坪内邸で祝言の杯を擧げるまでは赤の他人でしたから、古い事は何も知りませぬ。欒庭家相續人たる英二郎君からお話申上げたら、もつと目鼻がはつきりするのですが、此の人は父と方角ちがひの帝大法科を出てから二十年も朝鮮に在任し、今零下三十度の北鮮で郡守を勤めて居ますので、急に應援を頼んでも間に合はず、折角の御需めによん所なく生前直話の聞取控と愚妻の記憶とを取交ぜて、牛の涎のだら〳〵と述べました。話下手ですから御筆記の御骨折をお察し申します。辻褄の合はぬ所とムダは御遠慮なく御削りを願ひます。

竹のやの手紙ですか、筆が速かつた癖に筆不精で、葉書ですらなか〳〵書きません。私は少し貰つたかも知れないが、保存してないのです。たゞ一通愚妻宛のものが殘つてゐる。これは明治三十九年十一月、愚妻が里歸りをした後で、本人の云ふ通り珍しくよこしたものです。

珍しく手紙さし上候樂しく御暮しの由こなたにても樂しく存候一昨日は皆樣御出にて皆樣樂しく御悦び下され是又大悦びに候昨日まで悦び足して一日遊び申候朝倉樣へは瀧樣御出なかりしゆゑ其分の御膳と御引物そつくりさし上げ候ところ御二人とも大悦びまた百姓の爺さんにも御馳走し赤飯を多く贈り候ゆゑ是も大悦びに候幸堂氏も御存じの「浦島」新作に付大倉より謝禮おそくあゝちやま始め皆々心配致し居り候ところ漸く此程都太夫の手を經て百圓禮がまゐり幸堂氏大悦び是も必竟御加筆御心配ゆゑと右の禮心に一日袴を着けて豪所方周旋それゆゑ調五も配膳もよく行屆き同氏も滿悦にて御座候飯田町樣よりも昨日御悦びの御禮手紙まゐり候あゝちやまも御悦びに御座候斯樣の嬉しさ御身に集り候事なれば是を忘れず夫家を大事に御つかへなさるべく坪内樣御夫婦を第二の親と思はるべく候鶴泉寺伯父へは御前樣方よりの御土產に料理引物添へて贈り申候母の話しに御御手紙にて山田君菊くるみ和へ御意に協ひ候よし是は感心の事にて父も是が一番よしと褒めたるにて候是はむき胡桃を摺り曬砂糖（或は味淋）酢にて加減したるものなれば試みに作りて御覽なさるべく候好元氣は父が例の御祈禱なれば無論の事なれども折しも河岸よく魚の揃ひしは嬉しく甘鯛の味噌漬漬味よく今朝まで賞味致し候山田君言傳とて母へお話しありし燕石十種の本の事當方に二三部あれど誤寫多き俗本に御座候されども御用にもならばいつにてもさし出し可申候是等の事は遠慮なく申越さるべく候亂筆よろしく推讀あるべく候

併し御身が此まねをして亂筆難解の手紙など書きてはこまり候暇もあらば手習讀物よろづ心をつけらるべく候　かしこ

竹

山田節どの

圓十郎の熊谷これはまた云もおろか。敦盛を呼びかけ自ら名乘、オヽイ〳〵オヽイと三聲目は誠に遠ざかり行く敵を鞍壺に伸上りて呼び返す如くにて怖しきまで勇まし。……敦盛が鎧脫ぎ捨て覺悟の體に力なく立上り、氣を引直し力足を踏んでし鏡のやうなる眼に涙一杯保ちたる自然の感情、敦盛に顏を見上させず、一人唇を噛での悲歎、これなれば敦盛の身代といふ底を破らずして大によし。平山に靡を掛られハット心づき首打ち落し其首を平山の見る方へ差向け、平家の大將敦盛を討ち取りたり、勝閧々々といふ勇しさ、勇しきだけ夫だけに悲哀の情溢れて、評者此ところは暗涙に霑れ、歔欷するまでに至りしが何條是しき、我子を恩義の身代に討ちてすら泣かぬ武士を見て我女々しく吸上げんやと子供らしく考へて、鐵毫の熊谷を堪へ力に涙を噛み止めたり。實に絕技絕藝なるかな。（竹の屋劇評集明治三十八年十月明治座略評より）

# 良二千石物語【一】

## 楠本から關屋まで

### 六十五年間に二十九人の知事

本縣の良二千石、關屋現知事で二十九代である、手つ取り早く歴代知事の名と任官年月を示すと

楠本正隆明治五年五月、永山盛輝同八年十一月、篠崎五郎同十八年四月、千田貞暢同二十二年十二月、園田安定同二十四年四月、渕田益則同二十九年二月、勝間田稔同三十年四月、千頭清臣同三十三年一月、柏田盛文同九月、阿部浩同三十六年二月、清棲家敬同四十年一月、森正隆同四十五年三月、伊澤多喜男大正元年十二月、安藤謙介同二年三月、飯仲鎮同三年五月、渡邊勝三郎同六年十二月、太田政弘同八年四月、小原新三同十二年六月、三松武夫同十四年十月、藤田庄平昭和二年四月、力石雄一郎同三年二月、星崎勇次郎同三年五月、三松武夫同四年七月、黒崎貞也同五年八月、中野邦一同六年十月、小幡豊治同十二月、千葉了同七年六月、宮臨梅吉同十年一月、關屋佑之助同十一年四月

### 話しは

ズッと湖る、楠本正隆が今日の新潟縣全部の知事として任命されて來る以前の越後佐渡の管轄は實に錯雜交してゐたものであり、即ち新潟府が新潟縣と改められたのは明治二年二月二十二日で柏田英が知事として任命されたのである然るに同七月二十七日には越後府を水原縣と改め新潟縣を合して越後全國の管轄領地及び牧地を管轄し、壬生基修が知事に任命された、同八月二十五日には水原縣を割いて再び柏崎縣を置き新井亨信が縣知事となり、同十月三日樋口公允が壬生に代つて知事となつた明治三年三月七日に水原縣を廢してまた新潟縣を置き三條が依然として知事であつたが六月十九日松崎晋厚が代つて知事となり、同十月二日長岡縣が廢されて柏崎縣に屬した、當時所謂區域や知事の變更々逃げ猫の目の如くに變つたものであつた

×

### 明治四

年七月十四日新旋田、黒川、三日市、椎松、鮫島、前島、村上、高田、清崎、與板、柳谷の十縣が廢して縣を置いた以上十縣に在來の新潟、柏崎の二縣を加へて越後は實に十二縣となり郡縣の制漸く緒についた然るに同十一月二十日に至つて各縣を廢して改めて新潟、柏崎の二縣に纏め（佐渡には相川縣あり）新潟縣は瀧縣（現在の東瀧縣を除く四郡）岩船の二郡を管轄し柏崎縣は鄕城、魚沼、刈羽、三島、古志の五郡を管轄し そして小松時亨が改めて新潟縣令に任ぜられた

×

斯くて明治六年六月十日更に柏崎縣は廢されて新潟縣に合併し楠本正隆が最初の新潟縣令となつたのである（縣令の名が縣知事と改められたは明治十九年である）

續いて明治九年四月相川縣も廢されて新潟縣に併合しこゝに完全に今日の新潟縣が成立したのである（寫眞上初代楠本正隆、下二十九代關屋佑之助知事）

# 良二千石物語【二】

## 平均壽命が一年

### 短命、三ケ月の力石知事

さて二十九人の知事の中任期の最も長かつたのは永山盛輝で明治八年から十八年まで約十ケ年の長命であつた。續いて清棲家敎の五年、龍手出安定、大田政弘等の四年で最も短命であつたのは力石雄一郎、中野邦一の二ケ月、伊澤多喜男の三ケ月。千頭清臣の六ケ月余や力石知事の如きは本縣へ赴任の御驅走食べに來たやうなものだなどといはれたものだつた、中野知事は若槻内閣の突然の瓦解に殉死したもの、千頭知事は遠い鹿兒島へ左遷されたのであつた。

×

**廢藩** 置縣以來六十五年、其間知事の更迭する二十九人、平均壽命が二年と本の値である。昭和に入つてからは十人の知事を送迎し一人の壽命平均一年と値かでしかない即ち藤沼、力石、尾崎、三松、中野、小幡、冥加等何れも三月乃至一ケ年で其間千葉知事が約三ケ年の壽命を保つたのは異數であつた、即ち藤沼より小幡に至る時代が政黨黎明金時代で内閣の更迭が即ち知事の更迭であつたのであつた。

**初代** 縣令補本正藤は薩石なづむには容易でなかつたらしい即ち外務大丞といふ偉い役から本縣へと特に派遣された補本は學制の改革、殺制の制度驛がズバリ〳〵と道邊にあつた住宅から徒歩で縣廳までテクツたものだつた、勿論今日の如く自動車のあらう筈もなく、人力車たつて縣内に何台あるや無しやの時代であつた。縣令さんが籠で三國峠を越して四日掛つて東京へ行かれたと聞いて、其早きに驚いたといふ時代だから古い話だ。

**柏田** 盛文は小柄な極く人なつツこい人であつた、そして敎育に非常に熱心で時々官房主事の一人位連れて市内の學校を參觀したものだつた。今日の知事や課長等の學校視察のやうな嚴めしい雰風の學のものではなかつた。其熱心な敎育知事が敎科書疑獄に連坐したことは誰もが驚かぬものはなかつた。柏田がその標に溫厚の人であつた從つて御入來になつたのが岡部浩である、これがまた打つ変つた人物であつたらしい何といつても風容易に聽すべく也も看過時代の遺風容易に也なく維新の新政も當時の四民の驅行した、人民は惟呆氣にとられてたまげてゐた、殊に柏本は布令を出して驅變を驅行せしめた、命令よりも大事のやうに――即ち今日の婦人が髮に雰囲気をもつてゐると同じ程度に大事としてゐた頭のチョン髷を落すのだから人民の感嘆の聲はイヤ一通りでなかつた。「驅令でもあんメ……」と彼處にも此處にも感嘆の聲、ピストルを失つた淋しい頭を今更に撫でまはして涙を落したものだといふ。

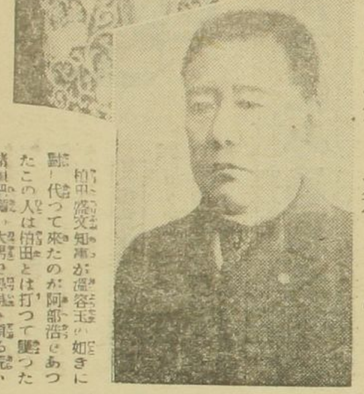
×

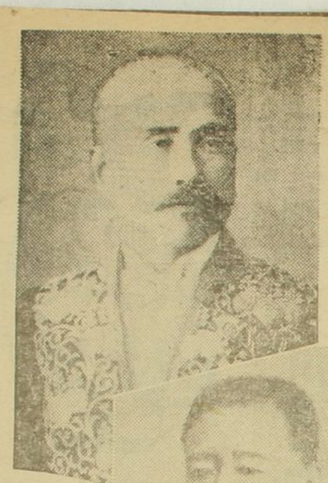
**其頃** は勿論官舍などはなかつた三代縣令永山盛輝の如きは何んでも今の神宮側、即ち新知事であつた、當時阿部學の武勇傳は有名なものであつた、こゝに其一つを紹介しやう（寫眞上永山盛輝、下力石雄一郎）

# 良二千石物語【三】

## 上品な清棲知事

### 野武士型の森さん



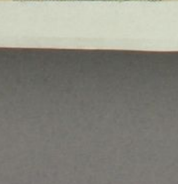


植田盛文知事が溫容玉の如きに代つて來たのが阿部浩であつたこの人は植田とは打つて變つた驅る荒い精悍肥滿の大男で驅馬

知事であつた。それでも植田の後へ來たといふのか敎育の方は熱心でよく市内の中學校を廻つたものの近頃の知事などには見られない圖である。然るに阿部知事が就任日市内の某中學校に乗り込み理敎授を見た。處が其時丁度地理の先生は南米のパタゴニア人種の說明してゐた「パタゴニア人種は赤顏巨軀の大抵六尺近いものばかりで……」などゝ阿部浩をモデルにでもしたやうな話をしてゐたので、阿部は大きな顏を一層ふくらませプン〳〵いつて敎室を出て行つた際で地理の先生は遁退何ひを出さうかとまでいつたとやら。

×

**阿部** 知事の無愛嬌で剛腹なことは有名であつた、就年内務省の吉原地方局長が新潟へ視察にやつて來た、この吉原といふ男は目から鼻へぬける程の如才ない圖轉脫君士であつた其一例として氏が以前香川縣の内務部長に任命されて赴任して行つた時香川縣は連日の豪雨で各地に洪水で十年來一度の大取水……日出井日出……



獨唱「映畫の會」

知事と一緒に……

知事は「ウム」と出て……

知事の……

## 柳沢支通

新興俳句の一人

俳句作家に多くの俳句を送つて……

# 良二千石物語【三】

## 上品な清棲知事

### 野武士型の森さん

柏田盛文知事が温容玉の如きに對し代つて來たのが阿部浩であつたこの人は柏田とは打つて變つた精悍肥滿い大男で眼鏡の荒い

知事であつた。それでも柏田の後へ來たといふのか政實の方は熱心でよく市内の中等學校を廻つたもので近頃の知事などには見られない圖である。然るに阿部知事が或日市内の某中等學校に到り地理教授を見た。處が其時丁度地理の先生は南米のパタゴニア人種の説明をしてゐた「パタゴニア人種は赭顔肥滿で大抵六尺近いものばかりで……」などゝ阿部浩をモデルにでもしたやうな話をしてゐたので、阿部は大きな顔を一層ふくらませプン〳〵いつて教室を出て行つた後で地理の先生は遁退伺ひを出さうかとまでいつたとやら。

## ×阿部

知事の無愛想で剛腹なことは有名であつた、或年内務省の吉原地方局長が新潟へ視察にやつて來た、この吉原といふ男は目から鼻へぬける程の如才ない圓轉脱居士であつた其一例として氏が以前香川縣の内務部長に任命されて赴任して行つた時香川縣は連日の豪雨で各地に洪水で十騎であつた氏は直ちに草鞋穿きで知事官邸へ馳せつけ只今着任しましたこれから直ぐ水害視察に行つてまゐります。

と知事に挨拶ソコ〳〵に出張したといふ逸話を有してゐる程の人である、吉原が阿部知事を新潟に訪ふたのだから悪からう筈のないのだが何分阿部の剛腹不遜の態度はさすがの吉原をも我慢せしめることと出來ず官邸の應接間に大口論、大取組を演じたといふ話が殘つてゐる。何分二言目には「原が」「原が」といつて原敬をかざしてゐたもので驚嘆はその「原」「原」に恐縮してゐたものだつた。

## ×其威

風四邊を拂つてゐた阿部知事も秋風一度吹けば休職となり、代つて來任されたのが清棲家敬知事であつた、閑院宮殿下の御兄上君のことゝて萬事が上品で穏和で、昨日までシベリヤ嵐、吹き捲られた縣民内は春風駘蕩の春を迎へたやうな和かさであつた。その和かさは明治四十年から四十五年まで續いた、處が其後へは阿部浩以上の野武士が乗込んで來た、それは有名の森正隆であつた。

## ×森は直情徑行、世評などに遠慮

氣兼ねする等のことは、生れ落ちる時薬と共に放り落して來た男である、思ひ立つのと行ふのとが一緒で共に文字通り疾風迅雷であつた。東京から着任すること、三日の中に三縣長の首を飛ばす、三、四人の披肺を血祭りにする、縣下二十五人の中等學校長中十八人の更迭を一時にやらかすといふ空前にして絶後的の大鉈を振るつたものだ、驚派的觀念の非常の強い人であつて當時縣會議場で議長平松遮那一郎が暴漢に殴打された事件は有名の話であつた。その標的の人物の非常の憤なる反動を有してゐた、涙脆くて、氣の毒の境遇のもの等に對する任侠的行動は昔の親分そつくりであつた。荒し廻つたことは荒し廻つたが仕事したこともしたらしい。（寫眞は上柏田知事と下阿部知事）

簡手出安定、大田政弘等の四年で最も短命であつたのは力石雄一郎、中野邦一の二ケ月、伊澤多喜男の三ケ月、千頭清臣の六ケ月余で力石知事の如きは本縣へ赴任の御馳走食べに來たやうなものだなどいはれたものだつた、中野知事は若槻内閣の突然の瓦解に殉死したもの、千頭知事は遠い壱岐島へ左遷されたのであつた。

## ×廢藩

置縣以來六十五年、其間知事の更迭する二十九人、平均壽命が二年と本の僅である、殊に昭和に入つてからは十人の知事を送迎し一人の壽命平均一を保つたのは異數であつた、即ち藤沼より小幡に至る時代が政黨黄金時代で内閣の更迭が即ち知事の更迭であつたのであつた

## 初代

縣令楠本正隆は薩石道邊にあつた住宅から徒歩で縣廳まで通つたものだつた、勿論今日の如く自動車等のあらう筈もなく、人力車たつて縣内に何台あるや無しやの時代であつた。縣令さんが籠で三國峠を越

知事であつた、當時阿部等の武勇傳は有名のものであつた、こゝに其一つを紹介しやう（寫眞上水山盛郎、下力石雄一郎）

# 良二千石物語【四】

## 今様彌次喜多八

### 無軌道知事の出張

森知事ほど[illegible]させた男はないと同時に彼ほど珍談を多分に提供した男はない。當時この無軌道知事のお供をつかつた中村官房主事も後年ひつくり[illegible]侍の辛さを筆者に物語つたことがあつたが、その物語りは實に立派の小説であり人生讀本でもあつた。

**彼は**

よく地方へ出張したことは無い、後年官臨知事も貴族院議員など徒らなる肩書を羅られた苦しさから三等車に乗つてみたことも見受けたが、この森無軌道知事に至つてはそんな生優しいものではなかつた、人の悲い彼は地方有志の出迎の人々を面喰はせるのが面白いのだそれ處か夫等出迎人をスッポかしてサッサと車で先方へ先着し、ガッカリして帰る出迎への人々をつかまへて「知事の出張を乞ひながら何處で馬鹿々々してゐる」と雷をまづ一喝喰はせるのであつた、彼の地方出張の際は何時も脚絆に草鞋であつた、腰には梅干の入つた握飯をブラ下げてゐた、御大がさうなのだからお伴の官房主事も仕方なしに脚絆草鞋の揃飯拵袋であつた、この無恰好の即席彌次喜多八は此處彼處にと珍談の種を播遍した。

**大正**

元年の夏であつた中郵城郡矢代川が大氾濫して沿岸の被害甚大であつた郡長郡吏多の二人は例によつて例のごとき委員三等車で出かけていつた。一方郵城の人々は今日は知事さんがお出でだとて間髪を入れず底からヤレ祝付だ仙臺平だと取出し禮服嚴めしく直江津驛へ出迎へた、殊には時の清水郵城郡長の如きはあの暑い日に山高帽を御丁寧にもフロックコートに山高帽といふ服裝で今か〳〵と知事の到着を待ち構へてゐた處へ列車は徐々着いたが二等車にはそれらしい人は一人もない、どうされたのかと出迎への人々は大驚きである、それを遙か後方の三等車の窓から眺めてゐた無軌道知事は會心の笑を洩らしてゐた、そして靴が落脱していそ〳〵と降りさうに尻を出口の方へ向けた時人の悪い彼は初めて列車から降りた、そしてそれ等の人々を多門將軍張りに中央突破して前へ突き出た。驚いたのは仙臺平の連中だ、「ソレ知事さんではなと目をしばたたけばこは如何に草鞋姿、それのみか腰には飯をブラ下げて御座る、まるケ馬へでも出かけるやうな扮

**出迎**

ひの連中オッ魂やら面喰ふやら、急性七面鳥の如くに顔色を變へて狼狽した、清水フロックの守の如き先の堂々たる風度にも似せの時ばかりは猶く處を知らつたとは無理もない。それ顔頭の珍光景よろしくあつて機關車の列車の到着を待ち構へた處へ列車は徐々着いたが二等車にはそれらしい人は一人もない、どうされたのかと出迎への人々は大驚きである、それを遙か後方の三等車の窓から眺めてゐた無軌道知事は會心の笑を洩らしてゐた、そして靴が落脱していそ〳〵と降りさうに尻を出口の方へ向けた時人の悪い彼は初めて列車から降りた、そしてそれ等の人々を多門將軍張りに中央突破して前へ突き出た。驚いたのは仙臺平の連

# 良二千石物語【五】

## 無斷出張十余日

### 森知事の無軌道振り

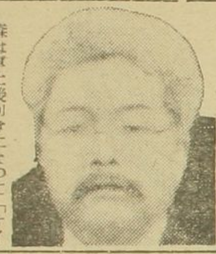
森知事は上京する時でも地方へ出張する時でも必ず突發的だ、それで何時も官房主事を面喰はせてゐたものだ、然し中村主事も後には心得たもので何時命令降下されても今からでも遅くないやうに動員をみたいの出張用の道具は用意してゐたといふ、その頃西郵城で能生水産學校のことか何かで、是非知事に來て貰ひたいと叩頭百拜して郵城へ乗込んでゐたが旋毛曲りの森は、要求が切であればある程知らん顔の年兵衛を極め込んで、あの尖つた鼻を一層ツラせてフフンとセセラ笑つて相手にしなかつた然るに成日どうした風の吹き廻しか急に「中村これから郵城へ行くから用意すれッ」と命令降下だ、それがから四時の退廳時間過ぎてのことだ、中村主事も困つた親爺を買ひ込んだものではある。

**それか**

ら二人が、車に乗つて郵城を出たのは彼是五時、萬代橋を渡つてゐる時潮風に吹かれて頭の調子でも變つたのか森は車上後向きになつて「オイ中村！頸城は止して岩船にしやう」と云ひ出した。猫の目の變るやうな森の氣性を飲込んでゐる中村は「それも結構でせう」と三太夫を極込んだ。然し本の一二日の出張と思ひ郵廳始め何處へも知らせずに出かけたこの出張が後で郵廳では大騒ぎだ、知事は官房主事を連れて出張したらしいが一体全体何處だ？七日になり十日になつても歸らない東京へ行つたのかと思へばさうでもないらしい、西頸城かと電報で照會すれば「イヤ來て下れ有難いからお頼み申す」など驚た返事が來る官邸でも令夫人からお三どんまで誰一人白髮先生の行方を知つてゐる者はない

**只得意**

なのは森一人で「オイ中村、岩船から瀬波へ行かう、瀬波から御幡峠越すも乙だらう、それから聚生島へ渡つて洒れたての鰹の刺身を食べて來う、關谷へも入つて見やうなど太平樂を唱へ、郵に十何日を下越の天地を！



森は車上後向きになつて「オイ中村！頸城は止して岩船にしやう」と云ひ出した。猫の目の變るやうな森の氣性を飲込んでゐる中村は「それも結構でせう」と

タウチ廻つて歸つて來た。その頃電話もなければ通信機關陸はらず實に神代のやうな呑氣の時代である、斯く知事が下越の官民に震撼させたことは後に分かつたやうなものゝ留守へ重要の書類や至急の電報など來ても何んとも手もつけられず馬鹿みたいに十余日も空費して待つてゐたとは思ひ切つた太平の民である。

**さて話**

は先へ戻るが森が中村と車を一頭中走らせて岩船町近くになつた時漸く夜が明け初めた、中村主事は幾らか何でも岩船の人々を面喰はせる氣の毒と思ひ前以て電報で知らせておいた岩船の人々はそれ知事公御光來と、町長はじめ町會議員町の學校の先生から分署の警官まで町端れまで出迎へた。それを遙か遠くに眺めた森は何事か腹にたくらんだか薄氣味の悪い笑ひを見せながら「オイ車夫、あの出迎への者共の處へ行つたら全速力を出せ、決して止つてはならぬ」と多門將軍が匪賊の大軍を中央突破するやうに命令したものだ、氣の毒なのは岩船の人々、朝早くから起きて出迎へに出、イザ御入來となれば風を喰つて行つて終ふ、遠くへ消え行く二台の車を見送つて徒切りしたり地團駄踏んでゐる仕方がなかつた。

森はこういふ廚氣の持主であつた

榛原製

# 良二千石物語【六】

## 車で葡萄峠突破

### 蠻勇森知事　翌日は粟生島へ

折角町端づれまで出迎へた船橋町の人々をオツぽかして得意滿面の森知事は、瀬波近くに來た時觀覽試驗場へと車を寄せた同場は當時觀覽會の直後梅沼比の盛力奔走によつて出來たもの。政友でなければ天下人にあらず位に驕奢紛々たる森にすれば、試驗場そのものがすでに氣に食はないのであつた彼が車をわざ〳〵寄せたのも腹に一物なければならぬことは當然である、然るにさういふ事があらうなどとは夢にも知らない藝木場長は長は場内を隈なく案内し且つ同場の成績を嬉嬉々言上に及んだのだ、森は何時にも倒せずウン〳〵と不思議にも溫順しく聞いてゐたそして再び車乘つた處を一待てツ、一言いふことがあるーとてわざ〳〵車から下りて一同を集め、例の大音聲を張り上げて「一体この役所は有害無用だ先刻の藤木の説明はあれは何だ、小出の支所は無用の長物で廢止したこれも廢止するから其つもりで用意してゐたらよからう」と怒鳴りつけさつさと車乘り「オイこれから瀬波だ」と一路瀬波へ走らせたものだ

**瀬波**　養心亭へ着いてからも無軌道は收らない岩船部長はじめ換方一有志が御一饗伺ひに上つても絶對面會謝絶らぬとの嚴命それでゆつくり休養するのかと思つてゐれば翌日の午過ぎにまたも突風の如く「中村」これから廻木へ行かう」といふ、云ひ出したが最後擬子でも動かぬ彼の事だから手事もハラ〳〵と仕度をすればもう午後の四時、これから天下の雄所葡萄峠を越えるのかと思ふと身の毛も逆立つやうだが、太平粟なのは森ばかり「オイ峠に狼でも出たら我讓が退治てやる」など御機嫌いと掛つた時は新潟から連れて來た車夫も渡石に連日の疲に飽き惚らない、苔橋南溪や芦蕉が此峠を越えた頃と少しも變りもない甚だ寂寥さ、森に木彫する晨の聲谷に激する溪流の音には蠻勇知事も流石に淋しさを覚えたとて遂あらう勝木へ着いたは正に夜の十二時とは突風知も疲れて宿へのめり込んだといふからよく〳〵であつたのだらう

×

然るに翌朝起きると彼はまた蠻勇森に回復してゐた、中村主事は今日は一日休養とでもいひ出すかと思ふてゐると森は「オイ中村これから粟生島へ渡らう用意せ」と出發命令を出したものだ中村もその剛倫の精力と活動振りには舌を捲かずにゐられなかつたらしい村長や村の人々に囲まれんの漸くのこと船の仕度は出來、村長重等も乘せて船は粟生島へと向つた、この日天氣清朗にして波も高くなく蠻勇知事愈々北海の孤島へと着いた

**物好**　きからとはいひ知事が北海の孤島粟生島へ行つたのは蓋し卒前にして劍後であらう彼は御機嫌顔ろよく何時に似せず愛嬌時いてゐたといふから粟生島は余程風の吹き通しのよい處であらう、其翌日も海は風ぎ一行は無事岩船へ着いた岩船の人々は前に懲りず港港やつて欲しさの一念からも出迎へやら何やら大騒ぎだ、すると森はまたも夫等の陳情に對して「馬鹿ツ貴樣等は我等の顔さへ見れば港々といふ岩船等は港港出來ん」とプンプン怒つてゐたといふから困つた親爺だ

榛原製



# 良二千石物語【七】

## 女にもてた坂知事

### 熱烈で氣焔吐く太田知事

中野城水

森知事のあまりの政友獨善振りに内閣は、伊澤多喜男を本縣知事に就任せしめ、森のゆがんだ施政を根から覆へさうとした、然るに其伊澤が大正元年十二月に來て翌年の三月桂内閣の瓦解と共に消え去つたのはあまりにはかない運命であつた。若しこの伊澤に僅か時日を與へたならば縣政に多分の變動を與へたに相違ない、伊澤の後に來たのは安藤謙介であつたがこの人は森や伊澤の如く政黨に關係した人間とは人種を異にし至つて中正にしてまた人間が大きく出來てゐた嘗か新潟と沼垂との合併したのは安藤の代であつたやうだ体格もガツチリとして健康其物のやうであつた。後年彼が横濱市長に轉職中新潟市の職員が訪問した際彼は「横濱市長になるには冒險の頑健のものでなければならんこう一日に午餐夕食の歡迎、歡送會の食事詰めでは堪まらんよ」といつてゐたさうだが、その安藤も到頭胃病でやられて終つた。

×

**代つて**　來任したのが坂仲輔だがこれも驚色のない實學家肌合の人であつた、穏和な公正な感じの悪い人ではなかつた。男ばかりか大分異性にも待てたものだつたが、大阪の藤田組に惡望されて本縣を去つた。坂の後に來たのが渡邊勝三郎で、何んでも内務省の地方局長か何かから轉じて來たので全然事務家で小さい事でも何んでも突つついて揚繰り返すといつた風の男であつたが、この男到頭義善組合を掘じくつて大騒の騒ぎを捲き起した、當時義善組合は新潟市の名望家櫻井市作の主宰するもので相當成績を擧げてゐたものではあつたが大きな穴があつたらしい、渡邊は何んといつても安藤や坂の後へ來たのだから面が悪い、前二人はあの樣に輪廓が大きく堂々たる大人風であつたに比し、渡邊は全然事務家的だけに小さく見られたのも仕方なかつた。

×

**渡邊**　のあとを受けて乘込んで來たのが太田政弘である、當今六尺ゆたかな大男、それが梅鉢の五つ紋付羽織した姿などは世に立派なものであつた、姿も立派だがやることも偏倒なかつた、大正八年四月に來て大正十二年六月まで四年余の長年月の間縣政は至極圓滑であつた。吹かなければ飲めないやうな熱燗や斗酒なほ辭せずの大酒を煽つても亂れることはなかつた。本縣から愛知縣へ轉任したのが好運の始まりで其處で加藤高明に知られ縣視察となり、貴族院議員となり、關東、關東總督とまでなつた。新し本縣へ來た知事の中では出世頭の方であらう尾崎のごときは今では政友會本部へ行つてゴロ〳〵してゐるのや、三松の如き淋しい最後等に思ひ合せると琥石に光彩陸離たるものがある。（寫眞上は渡邊、下太田兩知事）

# 良二千石物語【八】

## 人間小原の立派さ

### 極端に違つた三松知事

大井知事の後へ來任したのが小原知事、三知事であつた。この人は人間として多分の魅力をもつた人で歐篤知事と相手としてみるにはあまりに清廉で極端であつた。知事といふより寧ろ人間小原として圓熟にも人にも親しまれ尊敬された隨つて凡てを知事といふ肩書きで物をいはせる近頃の知事等には到底出ることの出來ない人格者であつた。俳人鳥兎として時々發表する彼の俳句には情趣掬すべきものがあつた。彼は風呂が好きだつた「元旦や湯槽を出づる男かな」等の句があるが、彼の面目躍如たるものがある。

×

彼は

はまた謠曲も好きだつた、地方へ出張するときでも彼の鞄の中には必ず謠曲の本が入れられてあつた程だ、彼の聲は謠曲に適へられたじけ洗練された巾のある、味のある聲であつた、したがつて彼の演說は聲其の物から既によい感じを聽衆に與へた。

×

人間小原として味ある、彼は知事驚の際が驚きに、時代で、政友會事など稱せらるる程であつた。

×

さうしたのであらう自分から辭表ひた、去つて彼治と政黨」なる物語つて金權白な小原の論れはまたこうら聞かと思はせらざれば人に

大正十二年の關東大震災にイの一番に

米を

輸送して震災の人々をして飢に泣かしめることなきを得せしめたのは小原知事の働であつた、彼は知事として出色のもうだつた。蓋し本縣知事では遠き桶本時代は別として太田、小原時代は政黨の實の果がつたことはあるまい、小原が來てからこの驚の際が驚きに時代で、政友會事など稱せらるる程であつた。

×

彼が三松の使つた米田官房主事を其儘引續いて使つてゐた邊りは政黨知事には珍らしい寛容の薄いよく縣政の刷新に努めた。彼が

人であつた、彼は人を使ふに凡て人物本位であつた。其米田が小幡知事が來るや否や解官されてしまつた、即ち二回に亘つて三松の主事をやつたことから民政と睨まれたのであつた、當時の縣廳員もかうした村正の刀みたいのものを振廻はす長官を頂いては、事務を取るより機嫌を取つた方が安全と、いふ加減の其日暮しをやつてゐたのも無理はない。

×

藤沼の後へ來たのが力石であつた

年齡

も若く手腕も冴え、何處から見ても清新の感じを與へてゐた藤沼の代りに來た力石が、見るからに至極一毛無しのツルツル頭顱のお年寄りと來たのだから當はこれは〳〵とばかりに光頭を仰ぎ見るばかりであつた。それで彼は虎鬚を漆黑に染て五月の鐘體みたいに得意になつてしこいであつた。この鐘馗樣、姿の殿めしさに似ず、陽性の森、陰性の三松のやうな辛辣味はなく、地方へ出張してけ歡迎會議會席上、侍つた紅裾に目尻を下げて悦に入つてゐるといふ好々爺振りであつた、尤も此人は仕事も何もやス暇はなかつた、在任五六十日で

大阪

知事に榮轉したのだから。然し其大阪知事も厭敬一度兜觜に觸れば忽ち其椅子を失ひ東京へ出て尾崎等の浪人共と倶樂部めいたものを作つて機嫌邊に殿會式だか擧げたやうだつたが、それも木の葉の間、世の鐘馗樣は彼世の鐘馗に會ひに行つてしまつたのは氣の毒である。（寫眞上三松下力石縣知事）

# 良二千石物語【九】

## 手腕、理想の人藤沼

### 當色濃かな三松、尾崎

城水生

小原知事が歐篤知事として代つて來たのが三松知事であつた、三松は歐篤の民黨知事で小原知事の代りとしてはあまりにも世界の異つた人である、性格で頑固で、獨斷でその上黨本位と來たから實際の處堪まつたものではなかつた、これは

三松

が三原目に來任した時だつたが尾崎知事が縣廳改革につき位置を奮、廳跡とし、用廳樂まで行つたのを、三松が來て現在の地に新築するといふ大權車を押したものだ、三松が新くするには相當の理由もあつたらうけれど其猪勇には人は眉をひそめたものだつた、尤も三松の前の尾崎がこれも大權車を押したのだから

小原知事以後は歐篤知事が代る、さうした事をやる中に自分等の墓穴を掘つてゐることを知らずにゐた。

×

只其

中に藤沼知事だけは流石此間まで內閣書記官長として快腕を揮つた人だけに群鷄の一鶴だつた、勿論政友知事ではあつたけれども三松や尾崎、まては力石や黑崎みたいの無茶で理想とをもつてゐた、浮草稼業といはれる程其日暮しに陷りたる知事といふ職務を落着いて

# 良二千石物語【十】

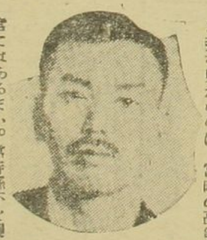
## 犬猿の小幡、双川

### お土産に教育疑獄

城水生

若槻内閣が倒れて犬養内閣が組織され、世は政友会の天下となつた。解散を電報で叩きつけた中野知事は早速退職し、入れ代つて來任したのが小幡豐治知事であつた其時の内務部長が今の關屋知事で警察部長が双川喜一であつた。双川といへば富時民政黨を震撼させた男で其無鐵砲、無軌道振りは一寸常識には考へられない位であつた。第一其赴任の時から大脱線だつた。第一前觸れも通知もなく單身本縣へ乗込み來り、新潟へ着くや縣廳へも知事官舎へも顔も出さずに直ちに鍋茶屋へ登樓したのだから驚いてゐる、其處へ電話ひ縣警察部呼んだものであるこんなところ見るとまるで官吏だか政黨員だか分らない。

双川×　も双川なら小幡も小猿だ。民政系らしい事務官、警視、警部を大根、蕪菁の如くに斬り、新潟署長には何處で何うして來たのか岡島とかいふ前代未聞の珍署長を任命したりしてみたそれで小幡、双川の御兩人は仲が良いかといふに犬猿も音ならずと來てゐる。縣廳の高等官食堂でも小幡が入つてゐれば双川は行かず、双川が行つてゐれば小幡は顔見せない、蓋し食堂で二人が仲よく會食してゐる姿を見たものは、富時の高等官にはあるまい。富時縣下を襲動した教育疑獄事件の如きも實はこの二人の夫婦喧嘩の飛沫か教育部に富つたといつてもよい双川は小幡と兩師範間激化の緩和を計つてゐる矢先、其鼻を明かしてやらんとして斯くは多數の視學、教員を檢擧し、本縣教育史上試ふことの出來ない汚面を天下に暴露したのであつた。この兩者の間に挾まつて中正穩健の態度を執つてゐたのが關屋内務部長で、悍馬の如きこの二人の間に事を處してゐた關屋部長の苦衷は一通りのものではなかつたらう。



この×　小幡知事の時に選擧が行はれたのだつた。犬養内閣の意を体しての小幡、双川の武者振りの壓かつてこと等は今更いふだけ野暮で、凄惨悲壮の風は戰陣を壓して民政候補といふ候補は枕を並べて討死し、政友候補の九人が九人まで當選し、御丁寧に公認候補でない出馬候補まで當選するといふ實に小幡、双川にすれば十二分の大成績であつた。民政の平松實藏が双川に追ひ捲くられ居るに處なく遂に病氣と稱して新潟圖大へ入院した……昔にすれば高野山へ逃げ込んだやうな一事をもつてしても、如何に當時の選擧がひどかつたことが想像せられるのである。

然し×　世は永しへに拳ならず、五・一五事件は犬養内閣の大崩壊となり、同時に政黨退潮の第一歩を踏出した。昨日まで威風四邊を拂つた小幡も双川も直ちに賊となり再び昔の院外團となり落ちたのは自業自得とは云ひ、轉々人生流轉のはかなさを思はせずに措かない。政黨知事はこの小幡が最後で、昭和七年六月縣民は千葉了知事を迎へたのであつた（寫眞は上小幡知事、下双川部長）

# 良二千石物語【十一】

## 兩師範統一の癌

### 明朗二相、黒崎、中野

城水生

二度の勅めの三松知事が休職となつて代つて來たのが黒崎眞也知事であつた昭和五年八月に來て翌年の十月京都へ轉勤して行つたので期間も短かつたし手腕も冴えてもゐなかつたので、これといふ仕事は殘して行かなかつた。たゞ一つ大きな波紋を擲げるやうとして中止したのは師範統一であつた。新潟、高田の學閥の爭ひはその因や遠くさう一朝一夕に黒崎の考へたやうに簡單には行かなかつた、殊に黒崎の計畫したのは新潟師範學校といふ名は其儘存置するが、校舎は高田へ持つて行くといふ、即ち實上は高田へ合併するといふ突然であつたので、世論沸騰しやうとしたが黒崎は形勢非と見てかサッサと引込ましてしまつた、本人の責任であつたかも知れない。

あの×　當時學務部長に松枝といふ男がゐて、天來の吞氣坊で、縣下幾千の教員が、教員過剰から讀百又讀百で懷え上つてゐた時にも拘らず、本意標は今日は守門、明日は妙高とスキーに夢中になつてゐた、そして學務の事務は殆ど知識がなかつた、さうした部長によつて立案された統一案であるからテンデ最初から問題にならず、只黒崎知事をして汚名を負はせたのみであつた。この松枝は栃木縣だから再任してからも病氣は癒らなかつたと見えて到頭日光の山麓でスキーで轢れて、縣下幾千の教員が、教員過剰から讀百又讀百で懷え上つてゐた時にも拘らず、本意標は今日は守門、明日は妙高とスキーに夢中になつてゐた、そして學務の事務は殆ど知識がなかつた、さうした部長によつて立案された統一案であるからテンデ最初から問題にならず、只黒崎知事をして汚名を負はせたのみであつた。この松枝は栃木縣だから再任してからも病氣は癒らなかつたと見えて到頭日光の山麓でスキーで轢れて

中野×　那一知事として來任した。民政知事ではあつた性に比し彼は陽性で行ふに明朗直觀であつて行つた兩師範統一野知事によつて一刀に師範の存在の必要なはしなかつた。黒崎の如き人物は、中野知事の時に選擧が行はれたのだつた。犬養内閣の意を体しての小幡、双川の武者振りの壓かつてこと等は今更いふだけ野暮で、凄惨悲壮の風は戰陣を壓して民政候補といふ候補は枕を並べて討死し、政友候補の九人が九人まで當選し、御丁寧に公認候補でない出馬候補まで當選するといふ實に小幡、双川にすれば十二分の大成績であつた。民政の平松實藏が双川に追ひ捲くられ居るに處なく遂に病氣と稱して新潟圖大へ入院した……昔にすれば高野山へ逃げ込んだやうな一事をもつてしても、如何に當時の選擧がひどかつたことが想像せられるのである。

然し×　世は永しへに拳ならず、五・一五事件は犬養内閣の大崩壊となり、同時に政黨退潮の第一歩を踏出した。昨日まで威風四邊を拂つた小幡も双川も直ちに賊となり再び昔の院外團となり落ちたのは自業自得とは云ひ、轉々人生流轉のはかなさを思はせずに措かない。政黨知事はこの小幡が最後で、昭和七年六月縣民は千葉了知事を迎へたのであつた（寫眞は上小幡知事、下双川部長）

日本畫壇近代の巨匠寺崎廣業氏逝いて二十九年、その高風を追慕する知友門下の發願に依つて、故人の胸像を東京美術學校内に建設の運成り、二日二十一日除幕式擧行された。胸像は内藤伸氏の製作にかゝる。晴快の春光の下に擧行するもの畫壇の諸名家、令孫郁子孃により除幕式を行ひ發起人總代として正木直彦氏、野田九浦氏の經過報告終て胸像を美術學校へ贈呈の式に入る。川合玉堂氏の贈呈辭、芝田校長の答辭。寺崎家代表して寺崎廣戯氏の挨拶、鳥谷幡山氏の門人代表の挨拶監澤博士來賓祝辭あつてめでたく式を終つた。

# 良二千石物語【完】

## 千葉の腕、關屋の德

### 鰻香嗅いだ宮脇さん

城水生

千葉知事の就任は昭和七年六月で今更事新しく書き立てるまでゝはないが、折角こゝまで續けて來たついでに書いて見る、千葉知事は頭腦明晰、決斷、秋の水の如くに澄んでゐた。その頭腦の良いことがかへつて千葉に禍ひした、彼は自分の頭腦なり手腕なりがあまり冴えてゐるために、部下のする仕事がもどかしくて仕樣がない。ヘマになつて見えてどしやうもない、それが彼をして部下に十分手腕を發揮せしむることの出來ない因をなした、從つて彼は内務部長みたいに補佐の地位にあつたら、どんなに名部長として謳はれるやら知れないと思はせた。現に彼が小原新三知事時代に内務部長として本縣に奉職してゐたが、腕を嗅らせたものであつた。

千葉 知事の時代の大きな事件といへばまづ空飛事件を擧げなければなるまい。之等は内務と警察とが二人三脚みたいに歩調が揃はぬからの失態で、即ち縣内の不統一を暴露したもので、千葉知事はこれには余程困つたらしい。然し根が頭のよい、彼の事であるから何うにかかうか繕りをつけたが、彼は自ら進んで答辯の驛會議席では自ら進んで答辯の衝に當つた。内務部長の畑のまでも引受けるといつた風で先の三松知事の鎧對に答辯しなかつた事は實に比し、立派的であり且つ明らしくはあつたが、其爲に却つて舌禍を招いたこともあつた。兎に角公人としては手腕の人であり、個人としては親味ある人であつた。

千葉 知事は運命は長い方であつた、昭和七年六月に來て十年一月まで三年間勤めた。代つて就任したのは宮脇梅吉知事で、これは本の一年ばかりで休職になつてしまつたから、これといふ事件もなかつた、若し强いていへばまたもこの知事によつて師範統一問題が刺激された位のものであらう。彼は最初は統一は理想なりとて余程油が乘りかゝつて來たが、四圍の情勢必ずしも樂觀を許さぬものあると共に、鼻の先に鰻の香ひがプン〳〵しはじめたので逃げ腰になつた、即ち北海道長官に擬せられたからである。それでこんな七面倒の統一問題で紛糾させた責任を取逃がしてはたまらぬと思つたのであらう自分でいひ出して自分で引込めてしまつたのであつた。彼がその鰻に嗅ぎ慣れも夢と消えて休職となり淋しく本縣を去つてしまつたが、こんなことならと後で鼻を噛んだことであらう

宮脇 知事の後に來たのが關屋延之助知事であることはいふまでもない。來月で滿一年になる。小幡知事時代内務部長として來たことがあるので、今度は二度目だけ、縣内の事情に精通し、孜々として實績を擧げることに努力してゐる。この德望に假すに千葉知事の手腕頭腦を以てしたなら鬼に金棒であらう。尊いふものもあるけれど、まだ在任一年だ、氏の手腕は今後に期待すべきであらう【寫眞上宮脇、下關屋兩知事】(完)

【註】先に本縣知事二十九人と書いたが北川信從知事を失したことを發見、從つて關屋知事は第三十代の知事である、なほ文中、安藤、小原、藤沼に關するものに多少誤りあることを讀者より申來つたが、それ等はいづれ訂正を新にして讀者にまみえることにする(寫眞上から千葉、宮脇、關屋の各知事)

童寶美術院展

機關人形　西澤笛畝

音頭　津田信夫

# 良二千石物語【完】

# 千葉の腕、關屋の德

## 鰻香嗅いだ宮脇さん

城水生

千葉知事の後任は昭和七年六月で今更事新しく書き立てるまでゝはないが、折角こゝまで續けて來たついでに書いて見る、千葉知事は頭腦明晰、識見、秋の水の如くに澄んでゐた。その頭腦の良いことがかへつて千葉に禍ひした、彼は

自分の頭腦なり手腕なりがあまりに冴えてゐるために、部下のする仕事がもどかしくて仕様がない。ヘマになつて見えてどしやうもない、それが彼をして部下に十分手腕を發揮せしむることの出來ない因をなした、從つて彼は内務部長みたいに補佐の地位にあつたら、どんなに名部長として謳はれるやら知れないと思はせた。現に彼が小原新三知事時代に内務部長として本縣に奉職してたが、腕を鳴らせたものであつた。

### 千葉×

知事の時代の大きな事件といへばまづ空襲事件を擧げなければなるまい。之等は内務と警察とが二人三脚みたいに聞東が揃はぬからの失態で、即ち縣内の不統一を暴露したもので、千葉知事はこれには余程困つたらしい。然し根が頭のよい彼の事であるから何うにかかうか繕りをつけた、彼は常に縣會議場では自ら進んで答辯の斷に當つた。内務部長の畑のものまでも引受けるといつた風で先の三松知事の鷄對に答辯しなかつた事は明に比し、立派的であり且つ男らしくはあつたが、其爲に却つて舌禍を招いたこともあつた。兎に角公人としては手腕の人であり、個人としては親味ある人であつた。

### 千葉×

知事は運命は長い方であつた、昭和七年六月に來て十年一月まで三年間勤めた。代つて來任したのは宮脇梅吉知事で、これは本の一年ばかりで休職になつてしまつたから、これといふ事件もなかつた、若し強いていへばまたもこの知事によつて師團統一問題が刺激された位のものであらう。彼は最初は統一は理想なりとて余程油が乘りかゝつて來たが、四圍の情勢必ずしも突飛を許さぬものあると共に、鼻の先に鰻の香ひがプン〳〵しはじめたので逃げ腰になつた、即ち北海道長官に擬せられたからである。それでこんな七面倒の統一問題で紛糾させた責任の一部は新知事に負はせたいものである。

### 宮脇×

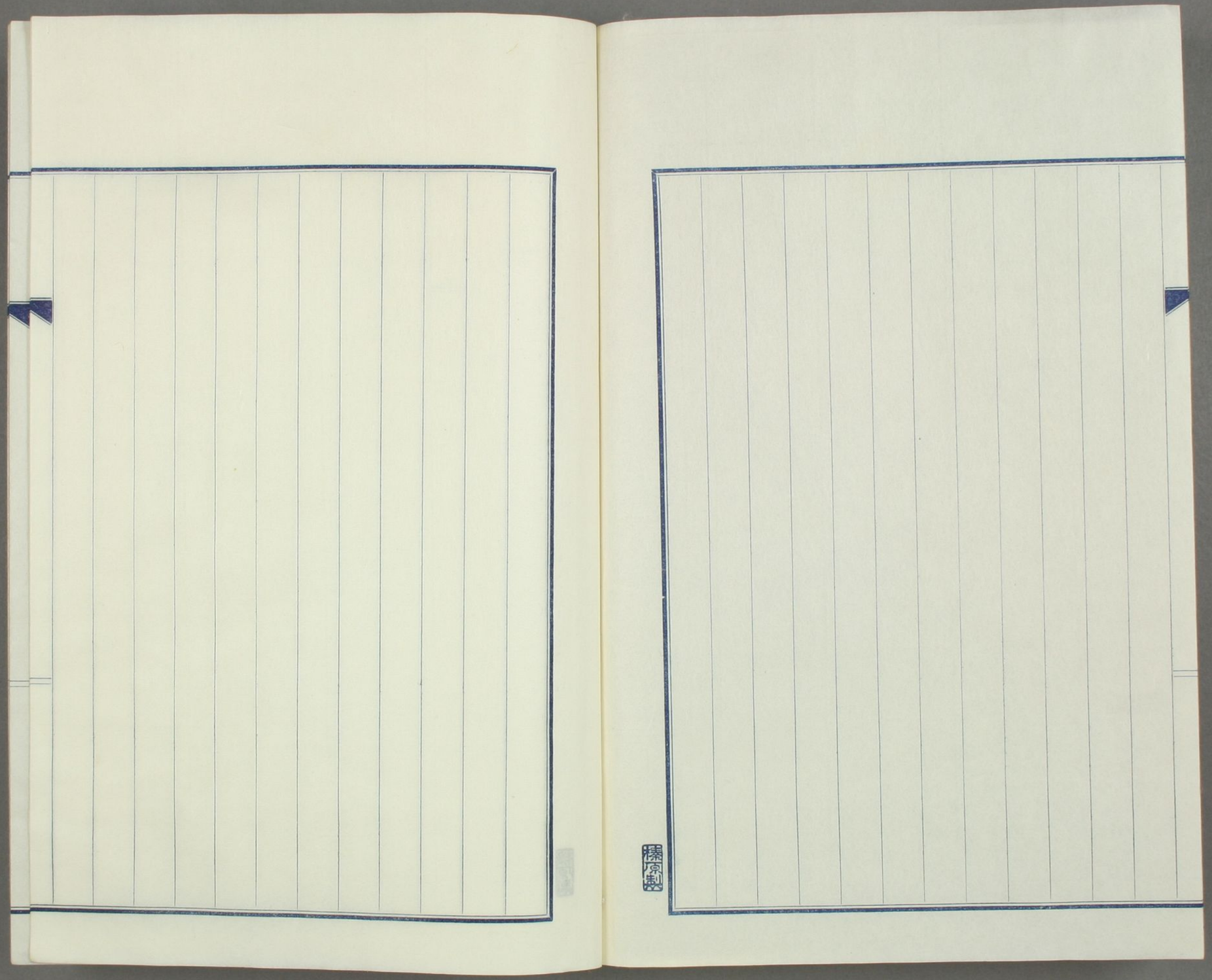
知事の後に來たのが關屋貞三郎知事であることはいふまでもない。來月で滿一年になる。小幡知事時代内務部長として來たことがあるので、今度は二度目だけ、縣内の事情に精通し、孜々として實績を擧げることに努力してゐる。この關屋に對すに千葉知事の手腕頭腦を以てしたなら鬼に金棒であらう等いふものもあるけれど、まだ在任一年だ、氏の手腕は今後に期待すべきであらう【寫眞上宮脇、下關屋兩知事】(完)

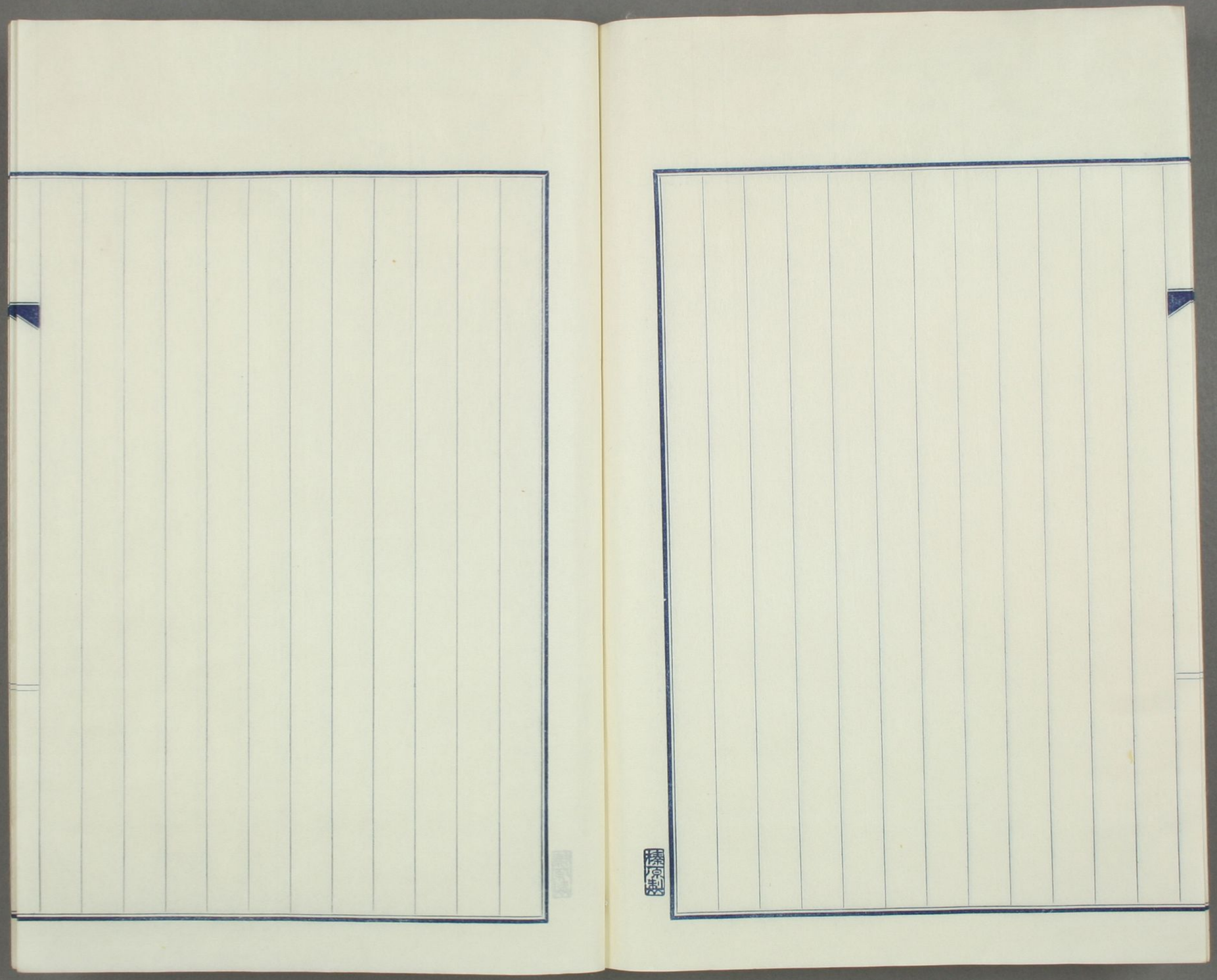
【註】先に本縣知事二十九人と書いたが北川信從知事を失したことを終見、從つて關屋知事は第三十代の知事である、なほ文中、安藤、小原、藤沼に關するものに多少誤りあることを讀者より申來つたが、それ等はいづれ機會を新にして讀者にまみえることにする(寫眞上から千葉、宮脇、關屋の各知事)

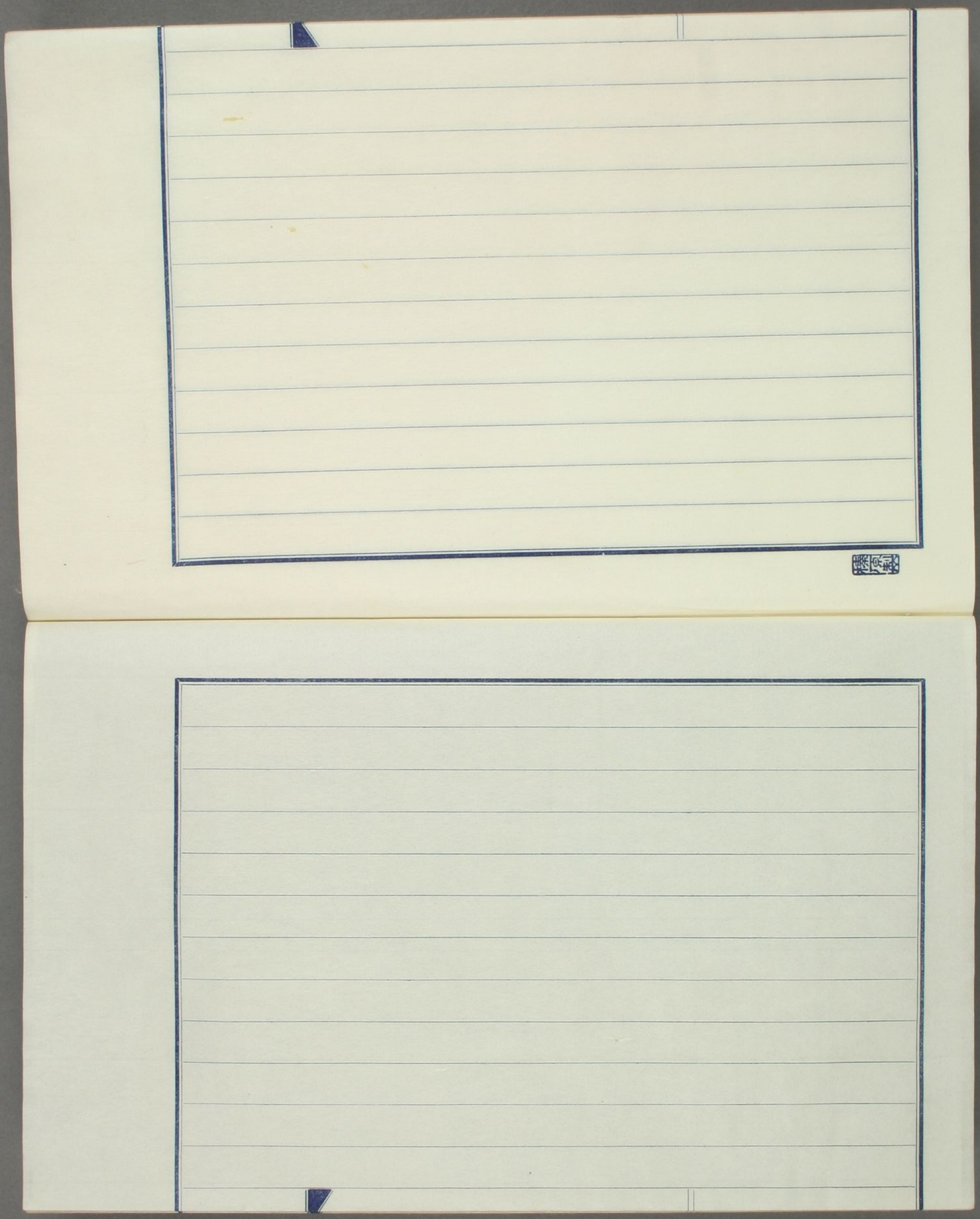
蕪村、田老秣馬

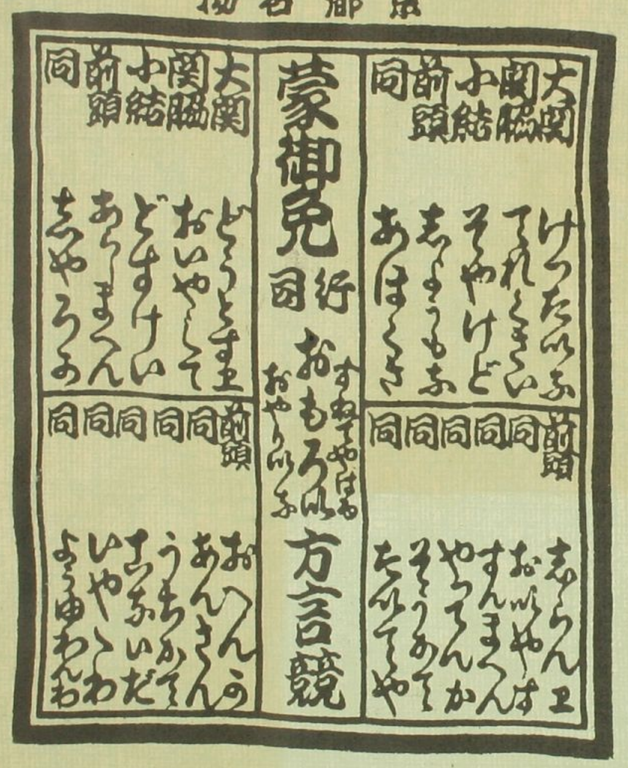
絹本着色
竪三尺六寸、
巾一尺五寸三分

榛原製












新學說
珍學說

# 江戸のその昔には アイヌが繁衍

## 地名に殘るアイヌ語

東京の昔は江戸であり、江戸の昔はアイヌの棲んだ處であることは既に考古學者の立證する處である更にアイヌの繁衍して居た處であることは、地名に殘つて居るアイヌ語によつて說明することが出來る。例へば『八景』と『戸越』などがそれである。

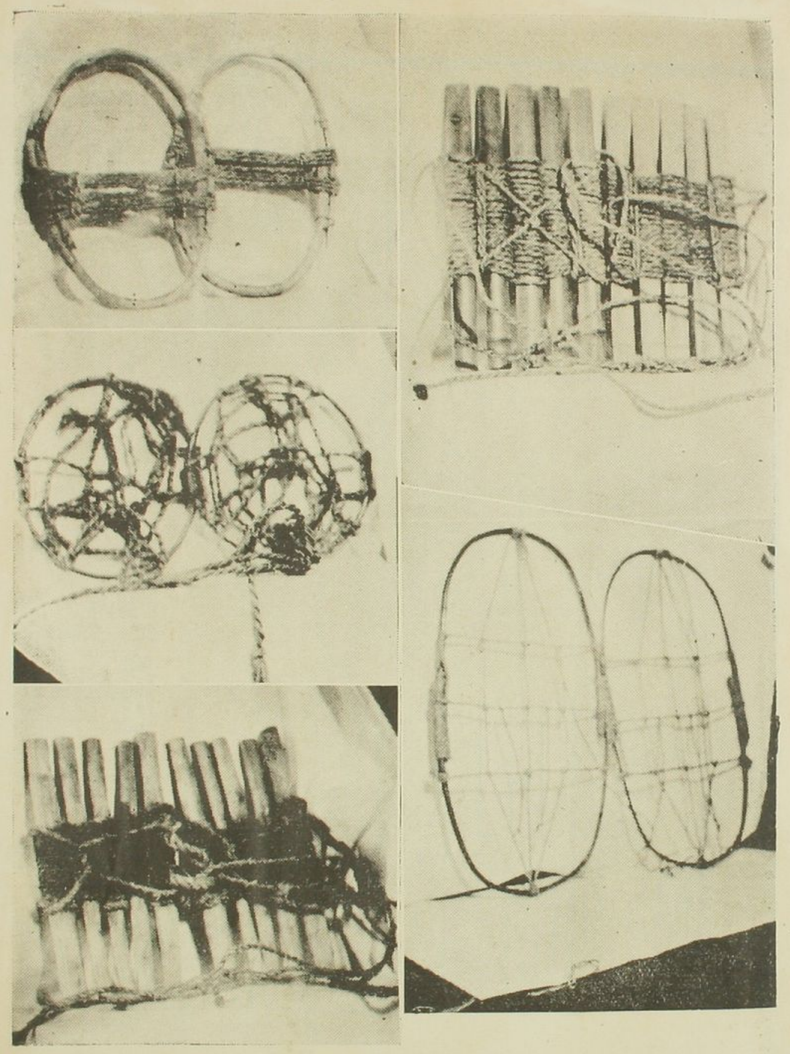
**八**

景を今日ではハッケイと讀み、近江八景などと同樣、强ひて八つの景觀に結びつけて居るが、これはハッケイではなくヤケイと讀むのがほんとうである。齊藤月岑の江戸名所圖繪には特に『やけい』とふり假名をつけてある。醫王山桃雲寺の項にも八景の二字にわざ〳〵『やけい』と讀ませてあるし、又『音聞瀑』の說明にも木原山八景坂を『やけい』と讀ませてある。もつと古い長祿後間もなく書かれた書物には『やんけ坂』と書いてある。ヤンケ坂に至つては完全なアイヌ語其者であり、最早彼等の遺唱たることは否定出來ない。ヤンケとはアイヌ語の『祭ぢ上る』であり『酹上げする』である。處によつてはアイヌのヤンケに對し、矢向の文字を當て嵌めたり、矢木とやつたり、矢來としたり、又矢華を用ひたりして居る。越後では八木と敬稱して居る。先住民族が江戸地方に繁衍して居た頃、今の大森の八景坂のあたりを陸揚げ地として居たものらしく、古書によると『德雲寺の總門東向にして海に面す、八景坂の崖下の排田畑は海にしてこの下まで浪打寄せたりしとなり』とあり、其は上の道を往來せしなり』とあるが、この地がアイヌによつてヤンケと呼ばれた狀況は充分想像することが出來る。

**戸**

越の地名も亦アイヌ語である。戸越はトゴシと讀んで居るが、これはトクシの轉化と考へられる。アイヌ語でトは『湖』であり、クシは『越す』即ち湖沼を越した向へか又はその手前と云ふことを意味する。今の戸越の地名を中心にして考へると、當時先住民族の稱した『トクシ』即ち湖は、或は今の洗足池あたりであるまいか。それについても思ひ出されるのは五反田と云ふ地名である。これはアイヌ語のコタンパ（部落ある處）から出たものであるまゝ、。東海道の御殿場はアイヌ語のコタンパから出た地名として、今では鄕土學者に承認されて居ると云ふから、既にトクシの戸越があり、ヤンケの八景がある點から考へてみて、コタンパ位はあつてもよかりさうなものである（黑龍江人）

榛原製



（一）スカリ　（二）丸カンジキ　（三）爪カンジキ　（四）竹カンジキ　（五）木カンジキ

雪中樏各種（赤紙裏の説明参照）

# 口繪説明

雪中用具カンジキ類（樏、古語カイジキ、掻敷かといふが不明である又たカジキ）

（一）スカリ　大カンジキである、普通「丸カンジキ」を穿いた下へ二重に穿く、魚沼郡より東頸城郡に亘る深雪地方で用ゐるが昨今は道路の開けた爲め稍々減少の傾向がある、名は古名ツカリの轉で和名抄刑罰具の部に集――賀奈都賀利とある、賀をカと讀むのは同書の用例で金ツカリ即ち鐵集は足械の類でなければならぬ、併し鐵製のものでない足具のツカリが古代にもあつたことは之で確めらるゝと思ふ、雪中用が泥中用かそれは分らぬ、緣邊は山竹、大きさは長徑八二、六短徑四五センチ、縄を引いて歩行するのであるが、その長さ一〇六センチ、北越雪譜「縋」と書いてスガリと讀ましてゐるのは宛字である（南魚鹽澤鈴木晙太郎氏寄贈）

（二）丸カンジキ　同地方でスカリの上へ穿くもの、之も緣は山竹である、徑三三、二センチ（中魚千手町採集）

（三）岩船郡三面村の爪カンジキ　小判形で緣はクロモヂの木、スキーのやうに前後が反つて辷り止めの爪がついてゐるのが特色で、前後は一定し中央に張つてある縄をトナリといふ、高根村あたりではそれを藤の皮等で作る、氷つた雪の上を行くもの、長徑三三、短徑二二センチ、爪の下部三六センチ縄の下にあり寫眞によく見えない、（丹田二郎氏寄贈）

（四）蒲原平原の竹カンジキ、北蒲原郡堀越村、孟宗竹を割りて編む、横に穿くのである、長徑三九、五短徑二一センチ（高橋弘氏寄贈）

（五）同木カンジキ　中蒲原郡横越村之は適當の木を削つて用ゐる、長徑三七、二、短徑一五、六（五十嵐寅吉氏寄贈）

尙ほ他に各種の式がある

## 高志社北海支部開設

郷友清田惇作君の厚意で札幌に高志社北海支部が出來、北海大學教授農學博士伊藤誠也氏（五泉町出身）以下數氏が參加せられました、北邊開拓に成功した人々の第二世以下に郷土との貧緣を繋がしたいといふ御希望だ相です、追て各地にかういふ計畫が欲しいものです

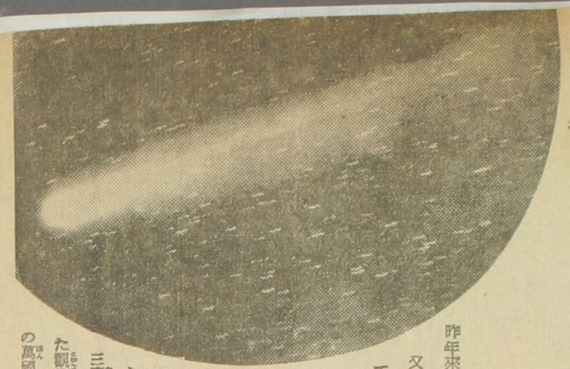
札幌市南九條西四丁目
事務所　清田惇作氏方

二月十六日の朝日

# アマ天文家の頭上

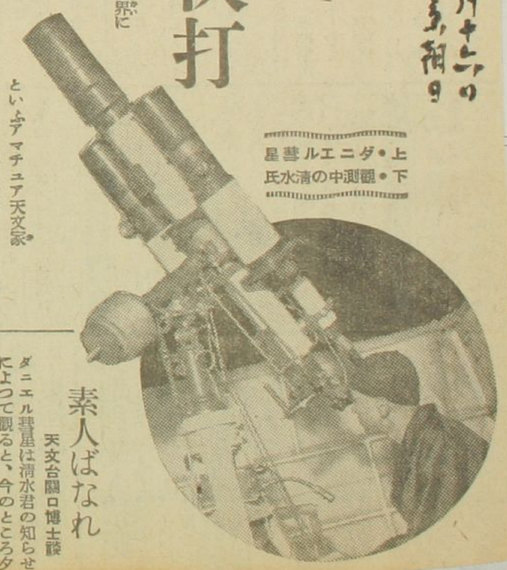
## 一世年〝雲隠れ〟の彗星輝く

## 世界學界に快打



昨年來新星發見で世界の天文學界に向つて盛んにヒットを放つてゐる我が天文學界に又しても無名のアマチュア天文學徒が登場、多年「行方不明」を傳へられてゐた彗星を見事數千萬の星群中から探し出して再び世界の學界に快打を放つたと云ふ快ニュース――話の主は靜岡縣島田町の清水眞一氏

平常からその熱心な研究振りによつて斯界には相當名を知られた人であるが去る一月三十一日自ら撮影した天體寫眞の中から問題の極めて小さなダニエル彗星を發見した、このダニエル彗星といふのは一九〇九年十二月アメリカのプリンストン天文台のダニエル氏によつて發見され、理論通りに行けば其後八年にして又歸つて來る筈と考へられたものが、杳として行方知れず、學界では奇異の目を以て殆しく注視してゐたものであつた、ところがこの彗星は十三等星と云ふ頗る光力のにぶい小さな星であるだけに專門學者にとつても發見は中々難かしく天文學者注視のうちに今もつて「行方不明」とされてゐたが、偶清水氏が覗いた小さな望遠鏡の中にその姿を把へたので早速これを三鷹村の東京天文台に報告、同台で念のため愼重な調査をすると成る程有る有る確にダニエル彗星である、その熟練した觀測振りに舌をまいた同台では早速この程關係方面へその報告を發表すると共に天文學界の總本家――コペンハーゲンの萬國天文聯盟中央局宛にも報告の手續をとつたが、アマチュア天文家のお手柄はこれで昨年來四回目である



上・ダニエル彗星
下・觀測中の清水氏

### 素人ばなれ

天文台關口博士談

ダニエル彗星は清水君の知らせによつて觀ると、今のところ夕方南の空高く見える星ですが、何しろ十三等星といふ余程小さなものですから發見は中々難しい、これを小さな望遠鏡で觀測し寫した小さな寫眞の何千もある星の中から探し出したのだから星に對する知識も余程確りしてゐなくてはならず觀測の技術もうまいものだ、素人ばなれがしてゐますよ、三十年前に一度發見されてはゐたのですがその後行方知れず、どうしたもんだらうと不思議に思はれてゐたホ

ーキ星です

### 篤學の藥屋さん

【島田電話】ダニエル彗星を再發見した清水眞一氏は靜岡縣島田町五丁目の藥屋さん、五年前から自宅屋上の望遠鏡で天體の觀測と撮影を續け天體寫眞では天文台でも一歩を讓るといふほどの學者だ、何しろ微光星とて齊田を一時間もかけての苦心の撮影で十センチの望遠鏡としてはまさに最大能力だ

その原板六枚が早速東京天文台へ送られたものだが清水氏は語る

私は東京天文台の指示で機械的に動いただけです、神田さん（理學士）の監督の下に私がカメラマンをつとめて牡羊座のスター

が出現したと云ふ丈の事ですよ

### 小川前商相カニに食傷

小川前商相は數日前から盛に食傷して胃腸を害し稻田博士の手當を受けてゐるが、一兩日中に聖路加病院に入院する豫定

# けふ佳辰をトして 文化勳章令制定

## 日本文化發揚一新紀元

### 科學藝術勳功の榮譽

〔勅令〕朕文化勳章令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十二年二月十一日

内閣總理大臣 林 銑十郎

文化勳章令（勅令第九號）

文化勳章ハ文化ノ發達ニ關シ勳績卓絶ナル者ニ之ヲ賜フ

文化勳章製式

章 金橘花徑六・六糎 花蕾白色盛上七寶、重瓣間菱金地濃紫色七寶、曲玉白色七寶、地赤色七寶、金橘葉寶 葉綠色七寶、寶淡綠色七寶

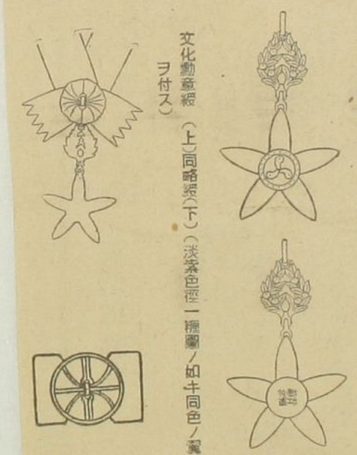
鈕 金小形稻圓

綬 幅三・七糎 織地淡紫色

文化勳章ハ綬ヲ以テ胸部中央ニ之ヲ佩ブ

付則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



文化勳章綬（上）同略綬（下）（淡紫色徑一糎圓ノ如キ同色ノ寶ヲ付ス）

文化勳章 表（上）裏（下）

政府は國田内閣當時よりの懸案として科學、藝術その他文化的方面に功績あるものに對してその勳績を表彰すべく文化勳章の制定につき賞勳局と協議を進めてゐたが、漸く成案を得るに至つたので、上奏御裁可を仰ぎ二月十一日紀元の佳辰を卜して勅令を公布した

### 精華を發揮

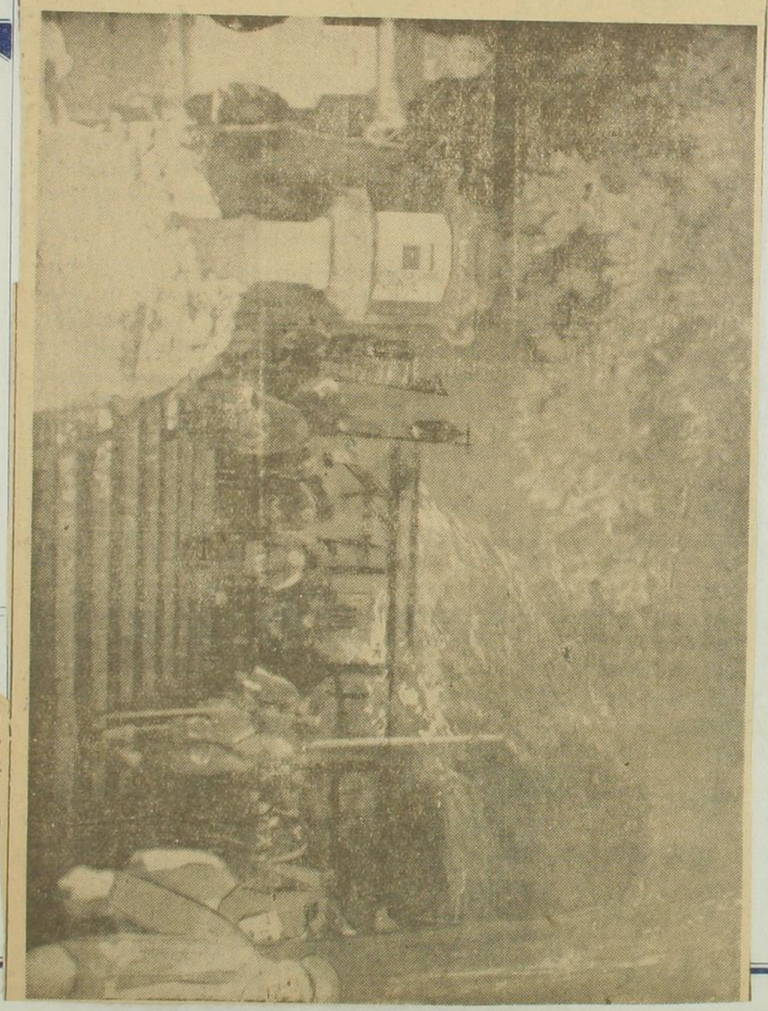
林首相謹話

本日紀元の佳辰に當り、新に文化勳章制定の勅令が公布せられました、文化勳章は科學、藝術等文化の發達に關しまして偉大なる貢獻を爲した者に賜はり、其の勳績を宣旌せられ、且又文化の創造を御奬勵遊ばされる 聖旨を以て制定

### 勅語

紀元ノ佳辰ニ當リ祝宴ヲ開キ各國代表者並諸大臣等ト此歡ヲ偕ニスルハ朕ノ滿足スル所ナリ茲ニ友邦ノ元首ノ健康ヲ祝シ併セテ交際ノ益々親密ナラムコトヲ望ム

けふ紀元の佳辰、宮中にかせられては天皇陛下には黃櫨染御袍の御束帯とな



光上しつゝあるこの寶手

(明治廿五年三月廿五日)

夕刊

# 北越新報

二月六日

發行所
長岡市坂之上町二丁目
株式會社北越新報社

編輯兼發行人 印刷人 小林昌司

謹賀
大川酒
中越酒造

てはフランス、ソヴエート間の相互援助條約がこれを阻害して居る事を指摘し佛ソ兩國間の相互援助條約の廢棄又は停止を要求するものと觀られて居る

## 日大拓殖科 生徒募集

東京市日本大學では既報の通り移

# の奥様となつて

## 内閣の助ゞ り拜

# 北陸に誇る大伽藍 けさ燒野原化す

## 名刹乙寶寺烏有に

### 積雪に水利の便惡く 國寶三体も類燒

北蒲原郡乙村北陸第一の名刹乙寶寺大日如來堂より五日午後八時半頃出火せるを附近の村民が發見警鐘を亂打し急を告げたが目下積雪三尺の爲附近消防組のポンプ運搬が意の如くならず漸くかけつけた時には既に火炎は見る〳〵中に十五間四面を包み炎々として火柱天に冲し如何とも施す術なく同本堂並びに國寶大日如來、阿彌陀、藥師の三尊及び仁王尊全部烏有に歸し今迄鬱蒼たる緑林に覆はれ自然的一大遊園を形成してゐた同寺は瞬く間に燒け野ヶ原と化し今朝四時頃鎭火した原因は同寺の大法會たる六日の大曼荼羅會に準備の爲手傳ひに來てゐた村民の殘火の不始末らしく損害は數十萬圓に上る見込で目下中條署に於て原因その他損害取調べ中である（寫眞は在りし日の大日如來堂と國寶三尊）

## 損害は十數萬圓

損害及び原因については中條署で關係者を引致取調べ中であるが損害は大日堂一棟二百二十二坪二萬二千圓その他佛具三千圓計二萬五千圓位外に國寶佛像三体と佛像寶物五像の損害十數萬圓に達する見込みである尙同寺は六日新春大祈禱會の爲め五日愼倡多數がこれが飾り付け等の準備をなし午後四時十五分頃終了施錠をなし本坊に歸つたがその際住職長男瑞伽藍雄君(二)二男俊雄君(一)及び同字磯部順次君(二)の三名が堂内佛前に於て蠟燭四本に點火しこれを消して餅の蠟燭箱に入れたのでそれから發火したものらしい

## 見舞客殺到

### 事務所は慰問品の山

大日堂出火と聞くや大字乙渡邊區長は大日堂前の公會堂に臨時區長事務所を設置し消防組や見舞客の指揮應接に當つて居るが村の内外から炊き出しや慰問品が事務所内に山と積まれ遠方からの見舞客は夜更けて汽車もなくなつたので全部同地の民家に宿泊するなど字内は勿論大日堂前は時ならぬ大混雜を呈し燒け跡は六日午後に至るも尙濛々と煙りを吐いて巨大な伽藍の名殘を止めてゐた

## 炎上も知らず

### 參詣の群衆何れも茫然

六日の燒跡には見舞旁々の參詣者をはじめ炎上した事を知らずに遠く關谷郷や山形縣から曼荼羅會參拜に來た信者が引きも切らず押し寄せ遠來の參拜者は燒跡を眺めて驚きの眼をみはり長嘆息をもらしながら盛んに賽錢を上げ堂内は時ならぬ混雜を呈してゐたなほ今年は六月二十八日より百日間盛大なる開帳がある豫定であつたので乙寶寺をはじめ地元では今から準備に着手してゐた矢先思はぬ火災に遭つたので旅館業者や各商店にとつては大打撃といはれてゐる

## 旅館業者愁嘆

縣内外多數の信徒を有し北陸切つての名刹北蒲原郡乙村乙寶寺大日如來堂は五日出火と同時に國寶三尊と共に火炎の中に沒し千二百年の靈場も此處に終りを告げたが山門近くに營業してゐる旅館業者並に名物たる乙饅頭製造業者及び茶屋、菓子業者その他各營業者はこれ迄大日如來の恩惠に依り今日迄何不自由なく感謝の中に生活を送つて來たが大日如來堂の燒失と共に明日より生活戰線に異狀を來たし今後如何にして生活を送るべきか……一面燒野ヶ原と化したる炎を見て長嘆息をし悲痛な涙を流してゐる

## 聖武帝の詔を畏み

### 行基が彫心の本尊三体

別項燒失せる北蒲原郡乙村乙寶寺大日如來堂は今より千二百年前聖武天皇の御代に南天竺より婆羅門僧正來朝し天皇の詔により行基菩薩と共に諸國に出たがその頃北陸道未だ開けず日中と雖も鬱蒼ふて暗る〳〵事稀であつたので行基菩薩は自ら本尊たる胎藏界大日、彌陀藥師三尊を刻み七堂伽藍を建立し乙寶寺と名づけ北陸七ヶ國五穀成就の總勅願寺と定め近世迄寺領百石を賜つてゐた北陸第一の名刹で二月六日の大曼荼羅會、四月廿一日の御影供、七月一日苗稼祭の大護摩供、八月二十七日大護摩供、八月二十八日大般若會並に大日如來御開帳等の大法會にはこの秘處深遠な教義に參修せんものとお山を目指す善男善女は文字通り縞繹たる檀信徒に徹宵の賑ひを續け山内も亦十萬の參拜大衆の參修に依り沸き立つ程である附近には特別保護建造物たる三重塔、六角塔、鐘楼その他幾多の建造物が空高くそびえ一大壯觀を呈してゐる

## 兩天皇勅願所

乙寶寺は一千二百年前天平八年時の名僧行基が勅命を拜して北陸巡錫の際同地に創設したもので聖武後白河兩天皇の勅願所であつた殘骸を見て昨日に變る今日の參詣たる炎を見て長嘆息をし悲痛な涙を流してゐる

藥師如來の三体共燒いて終ひました

と力なく首をうなだれる樣は傍らで見る眼も氣の毒であつた佛像は燒けて終つたけれども一千二百年

## 國寶燒跡に繩張

全國に多數の信者を有した名刹である今回炎上した堂宇は二百年前に改築されたものであつた

### 火の廻り早く本尊を燒く

縣社寺兵事課の藤巻屬は六日午後乙寶寺を訪問し國寶に指定されてある佛像の燒失狀況を調査したが同寺を訪へば瑞伽住職は林中條署長と會談中で河村執事は佛像の取

### 綿帶姿の執事談

り出しのため左眼頭に負傷した痛ましい綿帶姿で語る

私共は機關銃の樣な物音がしまたので驚いて飛付けた時は火はまだ堂内の一方だけでありましたのでお佛像だけでもと懸命に奮闘しましたけれども火足が早く到頭手がとゞかずみす〳〵國寶の佛像大日如來、阿彌陀如來

## 藤原時代の代表的作品

本堂大日堂に安置された行基作の大日如來は身長八尺五寸、阿彌陀藥師兩如來は何れも五尺の坐像で藤原時代の代表的傑作として明治三十八年四月三体共國寶に指定された有名な佛像であるが特に本尊大日如來は全智全能諸佛の總主として昔から世人の尊崇完きもので

ギター・マンドリン・シロホン　ハーモニカ・手風琴・ハーモニホン　一表　オサベ　電話四八五

# 灰燼に歸せる國寶如來

（上）炎上せる乙寶寺本堂及び（下）は右から國寶の阿彌陀如來、同大日如來、同藥師如來、

# の奥様となつて

## 目覺りど助内の閨中

唐伯虎筆　枯木棲鳥圖



翁は各地遍遊の際一番多く寄寓したのはお寺であらう僧侶は當時地方に於ける儒學者で文藝にも達して居る雄なるものであつたからである。觀音像を持つて歩いたり佛を崇ぶといふ詩句もあり佛に關する詩もあり又儒者は佛を誹るが翁は佛を罵つた處は少しも見當らぬ此點より見て私は翁を佛教信者と見たい。前には二三首書いたが次に絶四首を掲ぐる。

一喝揮レ斤劈二碧空一。文珠驚超拜二樵翁一。分身九界無邊行。憶在二靈山一證二互融一。

御茶餘税及二宮闈一。念是私恩所レ用希。爭買二牡丹一來獻レ佛。美看雙蝶繞レ花飛。

寒梟叫レ月樹將レ枯。第四禪天走二野狐一。惑レ世誣レ民皆女輩。阿難迦葉賊罔レ顧。

麁姑碧海不レ生レ桑。織女機空廢二七襄一。天上人間蠶事急。又看二潮迹一挿二青秧一。

——（次號には遺稿を通讀し餘録として綴り一時完結する積り）——

# 村上版史記攻

大瀧新藏

我北越に於ける古經籍を原るに古くは北蒲原郡加治庄本源禪寺開版の圓悟碧巖集あり、又慶長十二年刊の所謂直江版文選あり、近く江戸後半の越後に於ける刊行物は經籍、連俳、歌書、俗謠等其の數を知らざるなり、此處に村上に於ても俳書呀月集月の鐘、夏の月、蓮の下、七ふしぎ等は京都橘屋治兵衛等より刊行せられ、又武門要鑑も村上藩に板木を殘しその板木は數々聞見する處なれども村上版史記に到りては之を知る人甚だ少くしてその存在甚だ稀なるものなり、余一昨年上京の節、靜嘉堂文庫の經籍を尋ね又解題叢書中の諸藩の刊行の部を閲覽すれども見當らず、唯京都帝國大學圖書館にのみ之を藏すと聞けり、余

唐伯虎筆 藕香圖

右一札は別紙元寛殘稿

二月

私儀不調法ニ候ハヽ、上候相果候様、御家老中へ、生前の厚誼を謝し、遺族たゞ、之迄の如くに、氣に仕り、七月十日出船、同七月廿日江戸へ、同八月廿日御屋敷へ、被下之、寛政三辛酉年、同年八月廿五日、同二月廿五日改名、天明五乙巳年、寛政元己酉年、同七月廿日、



これより村上藩の學制と出版に就きその大略を述べん、村上藩は古來武技にのみ專心し、文道は振はず寛政以前は殆ど見るべきものなく唯教師の自宅に教場を設け教授せしのみなりと、然るに安永十年三月內藤德丸信敦藩主となるに及びて儒道を尊崇し學事を振起し舊藩鄙三の丸なる某役所を他に移轉し此處を學問所と寫せしと言ふ、設立當時は唯塾或は學館と稱し別に校名有らざれども其後安政年中師範中島彌八の申請により克從館と名付たりと傳ふ。

內藤信敦は性英敏にして文武兩道の偏廢すべからざるを覺知し江戸の處士泉長達(斧太郎)に從ひ修業其高弟の位置を占め、朝暮近士を集め躬自ら之を素讀及び講義を授けられたり。天明五乙巳年八月江戸の儒者服部虛舟(七左衛門)の養子服部元寛(幼名平次郎と稱し次に七郎左衛門後に七左衛門と改む)を召抱へ、後本國詰を命じ(寛政年中の事なるべし)學事を振興せしめ且活字版を以て書籍の不足を補ひ勉めて子弟を養成し又藩費を以て續々遊學せしめしかば藩風忽ち一變し學事頗る擴張せりと言ふ、而して此の服部元寛なる人の刊行せし書籍にして現存するものは史記にして(一說東京永森書肆主人は左傳もありと稱せりとぞ)史記評林の一種なり活字版印刷本にして題簽岩船活版史記とあり、活字は明朝體にして卷末に寛政四年の年號と服部元寛の名あり、今服部家の活版刊行に關する古文書を鈔錄し左に記す。

服部元寛は寶曆六丙子年九月九日江戸にて生る初め平次郎次に七郎左衛門とも稱し後七左衛門と改め元寛と名乘る、江戸に住し養父虛舟(七左衛門)の後を繼ぎて儒を業とせり、天明五乙巳年八月書籍師範として內藤侯に召抱へらる、時に年三十、爾來江戸藩邸に在り御召抱後の經歷は行狀書といふものあれば其全文を左に揭ぐ

服部元寛七左衛門行狀書

一、天明五乙巳年八月五日今般御中小姓に御召抱書籍師範被仰付御家中面々引立候樣依之五人扶持金七兩被下置候旨江坂久左衛門申渡之

一、同月十五日被召抱候御禮生肴一折差上申上候

一、同月廿日御屋敷へ引移申候

一、同月廿五日改名の儀願の通七左衛門と被仰付候

一、天明六丙午年五月五日爲稽古料年々金三兩宛被下置候旨御家老中申渡之
一、同七丁未年四月朔日御廣間御番人被仰付候旨御家老中申渡之
一、寛政元己酉年六月十八日出精相勤候に付五人扶持御加扶持被下置候旨御家老中申渡之同廿五日引移
一、同二庚戌年六月十八日新規御長屋定宅被仰付候旨御家老中申渡之同廿五日迄相勤寒氣に付暫相休右の節の手傳三人爲諸入用一ヶ月金三歩宛
一、同年八月三日(寛政二年)より植字版習始め同霜月中旬迄相勤寒氣に付暫相休四月十日少々宛快
被下之
一、寛政三辛亥年正月廿三日より不快二月十六日より鹽風呂へ參る三月朔日痛氣甚敷に付五日迄素讀相休四月十日少々宛快
氣に付出勤同然に相勤同日緣談の儀に付以板橋穀介殿三好内右衛門殿迄御内意相伺同十五日願の通被仰付之
一、七月十日塚本斧左衛門次女婚姻相整
一、寛政四壬子年六月廿二日爲稽古引立御廣番御免被仰付並同日爲植字版出來に付御褒美銀三枚頂戴之
一、同七乙卯年六月廿三日御在所詰被仰付翌辰の八月十九日江戸着
一、同八丙辰年十月十五日實父病氣に付相州へ十五日御暇願十六日罷越廿四日快氣に付歸着

右に依ると村上活字版史記は寛政二年頃より摺始め、寛政四年頃完成せるものにて其の印刷せる部數は甚だ少く後解版せるものなるべし、元寛は享和二壬戌年二月十二日江戸にて病死せり時に年四十七にして此時藩主綜理院樣(信敦公の事)御年廿三歳なりき、芝増上寺地中安養院に葬り有隣院譽譽德叟居士と法名す、其病篤く死期既に迫るを知るや山本伴五郎氏に書を送り生前の厚誼を謝し且つ後事を依頼せり、其の病中自筆の案を左に掲ぐ

口上の覺

私儀不調法者御座候處新規召抱其後段々結構被召仕難有仕合奉存候然處此度大病引受養生難相叶體罷在候依之生涯之御禮申上候相果候はゞ名跡の儀追々親類共相談之上一々奉願候間此上以御憐愍如何樣にも被仰付被下置候者難有仕合奉存候此等の趣御家老中迄宜敷仰上可被下賴入度候　以上

二月十二日　　山本伴五郎殿　　服部七左衛門

右一札は別紙を以て包み表面上部に「上」下部に「生涯之御禮申上候案」と記されありたり。

元寛歿後藩士鈴木傳五左衛門正辰の四男藤太養子となり家を繼ぎ元貞と名乘り内藤公に奉仕せりとぞ。